
井川香四郎
梟与力吟味帳
紅の露
講談社文庫



紅の露

梟与力吟味帳

井川香四郎



講談社文庫

紅（くれない）の露

梟（ふくろう）与力吟味帳

井川香四郎

講談社

目次

第一話　雪まろげ　7
第二話　影踏み　85
第三話　紅（くれない）の露　162
第四話　風花の舞　243

紅（くれない）の露

梟（ふくろう）与力吟味帳

第一話　雪まろげ

一

今年の冬の訪れは早かった。銀杏の葉は、黄色く色づいた途端はらはらと落ち、いきなり小雪の頃のようになった。

小雪の頃とは、降る雨が雪に変わるような寒さである。白い地面に、鴨の足に似た銀杏の葉が広がる様は、まさに無数の鴨の足跡のようだった。ちなみに、〝いちょう〟とは、銀杏を意味する「鴨足」の中国読みが訛ったと言われている。秋刀魚や鯖、松茸など、まだまだ秋の味覚や風景を楽しみたいところだが、いきなりの冬模様に、人々の足取りも重かった。

もっとも、人の出が悪いのは寒さのせいばかりではなかった……。

日本橋芳町の小料理屋『佐和膳』でも、この数日、来た客といえば、いつもの三人組くらいである。寺子屋『一風堂』が生んだ三役人の藤堂逸馬、武田信三郎、毛利源之丞八助である。

その中で、無役に戻ってしまった八助だけは、人よりも寒い冬になりそうだと、競々としていた。

「恐いといえば、お染さんだ。まったく、いつまで、つきまとわれるのやら」

八助が切り出すと、信三郎も深刻そうな顔になって、

「だな。おまえには、女房と六人の子供がいる。お染さんに好かれた日にゃ、一家が大変なことになってしまうな。それに比べて、大将……おまえは気楽でいい。骨の髄までしゃぶられても、泣く者がいない」

大将こと逸馬は一向に気にしていないが、八助はやはり不安な表情のままで、

「そんな言い草はよくないぞ、信三郎。おまえの大好きな黄表紙や絵双紙のようにはいかないのだ。ひとたび、お染に見初められたら、生半可なことじゃ逃げられないのだからな」

「逃げられぬか」

「ああ。おまえとて知っているであろう。しつこさ、恐さを」

「知らぬではないが、こっちはちょいとばかり慣れてるのでね」
「いくら女あしらいが上手くとも、お染だけは……無理だ。もし、思いがけず関わった日にゃ、信三郎……おまえでも敵うまい。篤と覚悟をしといた方がよい」
「ばかだな。そういうのは、心配性の奴ほどやられてしまう。こっちが綺麗な身でいれば、お染の方から近づいて来ねえよ」
「そんなのは拘わりない。相手を選ばず……そこが恐いのだ。なあ、逸馬。おまえはどう思ってる」
「どうって……」
逸馬もまた困惑した顔で、白子鍋をつついていた。鱈の白子に葱、椎茸や独活、それに焼き豆腐が絡みあって、さっぱりとした甘味のある醤油味は、女将の佐和の人柄が煮込まれているようだった。
「鍋と違って、煮え切らねえ奴だな。奉行所でも、お染の話は持ちきりだろうが。いや、奉行所だからこそ、なんとかしろよ」
「そこが思案のしどころだ」
「他人事みてえに。そのうち、おまえがお染に取り憑かれるかもしれねえぞ。情け深い上に、一度、熱が上がっちまったら、恋の病じゃねえが、お医者様でも治せまいっ

てな」

信三郎がふざけて言うと、八助も銚子を傾けながら、

「まこと、お染って奴ア、恐いわいなあ」

と歌舞伎役者の物真似をすると、白木の付け台の奥で聞いていた佐和が、

「いい加減にしなさいな」

と眉根を上げた。その怒った顔も色っぽいなと信三郎がからかうと、ピシャリと佐和は指先で付け台を叩いて、

「あんたたちねえ、世の中には、お染って名の女の人もいるんだから、少しは口を慎みなさいな。可哀想でしょうが」

「いいねえ、恐い女も」

信三郎が性懲りもなく言い返すと、もう一度、佐和はピシャリと、

「恐いと言われて喜ぶ女はいませんッ。だいたいが、流行りの風邪に女の名をつけること自体、不愉快でしょうがありません」

「たしかにな……どうして、そんな名をつけるのかねえ」

ぼんやりと鍋の中を見ている逸馬の目の前に、信三郎が手をかざした。だが、それすら気にならぬ様子で、逸馬は白子をはふはふと味わいながらも、心ここにあらずの

様子だった。

「ほんと、誰がつけたんでしょうねえ」

佐和はさりげなく逸馬を見やった。評判だの噂だのの出所は、はっきりと分からないものだ。それを取り上げて、〝一般〟に使うのは奉行所だった。

お染とは、人形浄瑠璃『新版歌祭文』の主人公、お染久松からつけられた。他にも、『恋娘昔八丈』や『八百屋お七』から、お駒風邪とかお七風邪と呼ぶこともあった。可愛らしいけれど情念の深い女の名をつけるのは、江戸っ子らしい洒落っ気があるが、疫病に罹れば洒落では済まなかった。

流行り病と片づけられているが、感冒の恐ろしさは筆舌に尽くせないものがあった。江戸時代の衛生環境からすれば、一度、流行りはじめたら、なかなか終焉を迎えることがない。疱瘡、麻疹、水疱瘡という〝御役三病〟よりも恐れられていた。

今年も夏に蔓延し、この病に罹らなかった者がいない家はないと言われたほどだった。長崎に入った異国の船から伝わり、上方から、江戸に広まり、死人は既に三十人を超え、病臥している者も五百人を下らないという。

南北町奉行は防疫と原因究明を急いでいるが、未だに完全な解決策は講じられていない。それゆえ、人の出も少ないのだ。

流行り病は年老いた人や子供が犠牲になることが多い。逸馬も町奉行所与力として、何とか尽力したいところだが、病だけは吟味で裁くこともできず、如何ともしがたい現実に苦々しい思いだった。

「妙な流行り病が続けば、またぞろ、それに乗じて怪しげな薬を売り出したり、加持祈禱をして泡銭を稼ごうとする輩も出てくる。俺はそっちの方も心配なんだよ」

と逸馬は眉間に皺を寄せた。

「もっとも、治るならば、どんなことだってする。ましてや、自分の親兄弟、子供が罹った日には耐えられないだろう」

「それはね、みんな同じよ、大将……」

と佐和が重い口を開いた。

「いきなり目に見えない病に命を奪われる。でも、怯えてばかりいても埒があかない。だからこそ、奉行所や医者だけじゃなくて、みんなで智恵を出し合って、少しでも気持ちを和らげなきゃいけないんじゃないの」

「そりゃ、そうだが……」

「近頃は、病を撒き散らす素を調べるために、人の血を採って、菌があるかどうかを推し量るっていうじゃありませんか」

黒死病が猛威を振るった西洋では、今でいう細菌学が進んでおり、病根を絶ち切って蔓延するのを阻止しようとしていた。

小石川養生所では、相変わらず『傷寒論』や『霊枢』など古医学に拠っていたから、患者を隔離することしかできなかったのである。

「うちのような料理屋はいち早く、ぱったり人影が消えた。やはり、水が恐いのかも……それでも来てくれるあなた方には、感謝しなきゃね」

佐和は仏を拝むように掌を合わせた。

「よせやい……」

八助が忌々しげに首を振ると、

「水が恐い？」

と逸馬が不思議そうに顔を上げた。佐和は当然のように頷いて、

「そりゃそうでしょ。江戸の井戸は、誰もが飲めるように地中で繋がってる。だから、それで移るかもしれないって」

江戸の井戸は、地面を掘削して湧き出させたものではなく、神田上水や玉川上水から水道として引き込んだものである。

神田上水は井之頭池や善福寺池から集めた水が、小石川の水戸藩邸内を通って、水

道橋から大懸樋で神田川を跨ぎ、江戸市中を流れている。玉川上水は、多摩川から四谷の大木戸まで作られた運河で、そこから四谷見附、麹町、江戸城御曲輪内、赤坂、虎ノ門、芝、築地、八丁堀などに隈無く行き渡った。

万年石樋や木管が地中を網の目のように張られており、水は『ためます』という井戸に流れ込むようになっている。だから、江戸の武家も江戸町人も、同じ水を飲む仕組みになっているのである。

「では、佐和さん……病の菌が水を通じて、人々に移ったと？」

「かもしれないってね」

いきなり八助は箸を置いて、

「ゲッ。てことは、俺たちが食ってるこの鍋も……」

「熱を通してるから大丈夫。でも、生水は気をつけた方がいい」

「あ、それも、散々、飲んじまった」

「バカ。おまえが飲んだのは酒だろうが。酒も水も分からないくらい酔っ払ったのか」

信三郎が傍らから銚子を取り上げて、自分の杯に注いだ。

「よせ。人のを飲む癖はやめろ。ヒック。俺はだな、佐和さんに酔っただけだ」

「女房持ちがか」

と、さらにからかったとき、ガラッと戸が開いて冷たい風が吹き込んでくると、暖簾をくぐってひとりの精悍な商人風の男が入ってきた。中年の貫禄のある、いかにも大店の主人という感じだった。

「よろしいですかな？」

「いらっしゃいませ」

声をかけた佐和の表情が、ほんの一瞬、あっと強張った。そして、しばらく唖然と見つめていたが、ゆっくりと曖昧な笑みが溶けてきて、

「もしかして……研吉さん？」

と訊いた。

「久しぶりだな、佐和」

目を細めた商人風が実に懐かしそうに、佐和を見つめ返しているのを、逸馬たち三羽烏は半ば嫉妬の目で眺めていた。佐和ははにかんだように瞳を燦めかせると、

「お三人さん。悪いけれど、今日は暖簾を下ろすから、またね」

「なんだよ、女将。今、感謝したばかりなのに随分だな」

八助が文句を垂れようとしたが、逸馬と信三郎は、ふたりには何かあると鋭く察

し、もう十分飲み食いしたから帰ろうと、両脇から八助を抱え上げた。

「すみませんねえ」

佐和はそそくさと三人を追いやるように外まで見送ると、すぐに暖簾を仕舞って店内に戻っていった。

取り残されて佇む三羽烏に、折からの冬便りの風が吹きつけた。

二

翌日、北町奉行所では、流行り病の対策のために、年番方を中心に、非常取締掛や当番方、養生所見廻りなどの与力が集まって、〝コロリ〟や〝命定〟について話し合っていた。いずれも疫病の名である。

しだいに被害が広がっているので、これまでも、町木戸などに斎竹を立てて、疫病を払っていた。それでも罹患する人が増え続けるので、町人たちの間には益々不安が大きくなってきていた。病も大変だが、人々の心に恐怖が広がるのも問題であるのだ。

そんな中、またひとり、犠牲者が出た。

日本橋通り南一丁目にある両替商『和泉屋』の主人・徳右衛門だった。御高札場の両替商といえば通じるほど、橋詰の目立つ場所にあり、公儀御用達も賜っていた大商人である。

しかも、ただ金儲けをするだけではなく、

「金貸し業とは、世間の方々が一生懸命働いた汗水をお預かりし、それを喉が潤うほどの綺麗な真水にしてお返しするのが務め」

と常々言っており、恵まれない子供や病に伏している老人たちを、私財を投げ出して面倒を見ていた。

しかしその一方で、『和泉屋』が出した「銭札」が、近頃不評を買っていた。銭札とは、

――一両預ければ、一年後には倍の二両になる値打ちを保証する。

という札だった。これは一両預ければ、二両になって戻ってくるというのではなく、一年後からは、江戸市中ならば、二両分の買い物ができるという、つまりは金券である。

使えるのは、『和泉屋』と約定を交わしている店舗や行商人などに限られるが、その数は問屋組合などを通じて成立しているので、逆に、

――『和泉屋』の銭札を使えないような店じゃ信用ならない。

と人々が思うくらいの値打ちがあった。もちろん、買い物だけではなく、宿賃や飛脚代、医者の見料や薬代などにも使うことができた。それが不評というのは、近頃になって、

「これは掛け売りのようなものだから、直に金を持って来てくれ」

という店が増えてきたがためである。売る方と買う方が揉めると、その責任は『和泉屋』にあるので、町奉行所に出入筋として訴訟沙汰にもなった。

そうなると、不安になった人々が、『和泉屋』に対して、「金を返してくれ」と取り付け騒ぎを起こしたり、思いがけぬ騒動が広がった。

徳右衛門は出来る限りの対処をしていたが、交わした約定では、「金は返さない」仕組みになっている。しかし、立て替え分はすべて、『和泉屋』が払っている実績があるから、奉行所も訴人の言い分だけを聞くわけにもいかなかった。

折しも、逸馬は銭札に関する訴訟を受け持っており、和泉屋が死んだとの報せを受けて、衝撃を受けていた。今後の裁きの運びが複雑になるなということと、訴人への弁済や保証も滞ることになりかねないからである。

さらに幕府にとっても、大きな傷手であった。徳右衛門は老中や若年寄など、幕閣

とも繋がりがあって、公儀の普請などにも少なからず尽力をしていたのだ。

「老中首座、水野忠邦様の話では……」

北町奉行の遠山金四郎景元に、役宅と役所の境にある桔梗之間に呼びつけられた逸馬は、幕府の事情を聞かされていた。

「幕府は江戸市中の橋梁や家屋、掘割や街道の整備をどんどん推し進めねばならぬと意気盛んに言うておる。その先鋒が、大坂城代から若年寄になったばかりの堀田備中守だ」

「あの堀田様が……」

逸馬は、あまり好きな人物ではなさそうだったが、はっきりとは言わなかった。遠山も同じ思いである。

遠山は養生所や寺子屋など、福祉や教育に関わる事業や芝居小屋、寄席などの庶民の娯楽についても、公儀が援助すべきだと訴えていた。が、幕府の財政は厳しく、経済対策をして景気と活気を取り戻さなければ、町人の暮らしも益々、暗くなるばかりだと堀田は力説している。

「幕府が改めて、江戸の町を造り替えるくらいの普請をすることで、職を失った人々

の懐が潤うから前向きに取り組めという。町奉行所にもその下調べをせよと言うが、俺にはその裏があるような気がしてならないのだ」

ざっくばらんに打ち明ける遠山の意図がどこにあるのか。

「もしかして、此度、和泉屋が死んだことで、何か不都合でも？」

「まあ、色々とな……おまえも知ってのとおり、和泉屋は武家や商人を問わず、実に大勢の者から多額の金を集め、それを米相場や先物取引に使っていた……先物といっても、奴がやっているのは、やくざが開帳している賭場のようなものでな、てめえは損をしないカラクリになっている」

「はい……」

「莫大な金を投資するぶん、差益も大きく、ただの金貸しの利鞘の何倍も稼ぐ。だから、銭札の値打ちを倍にしたところで、綻ぶことはなかった。なかったが……」

遠山は深く溜息をついて、

「ここにきて、大きな問題が起きた。幕閣の中に、和泉屋から金が流れていた。銭札で儲けた金がドッと幕閣に流れる代わりに、米相場の動きや先物に関わる前知識を、幕閣から得ていたのだ」

「絶対に損をしないために……ですか」

「そうだ。和泉屋が儲ければ儲けるほど、幕閣も潤うことになる。つまりは、幕閣連中は、和泉屋を食い物にしていたのだろうな。それが綻びはじめたとき、悪運が尽きたか、和泉屋が流行り病で死んだ。一番ほっとしているのは、利益を得た幕閣かもしれぬ」

「……」

「困ったものだなア、悪い奴らは色々と考えやがる」

「で、お奉行は私に何をどうしろと」

「ふむ……」

箱火鉢で燃える真っ赤な炭に手をかざして、遠山はギラリと逸馬を見た。

「おまえは吟味方与力だ。和泉屋から銭札を買った客との間で起きている厄介な訴えは、手を抜くことなく調べ、さらに……身辺を深く探れ」

「身辺を深く……やはり何か裏でも？」

「ある。俺にはな、藤堂。和泉屋が流行り病で死んだとは思えないのだ」

「ええ？　ど、どういう意味ですか」

逸馬は意外な目を向けた。

「まさか、誰かに殺されたとでも言うのですか」

「その、まさかだよ」

何か言い返そうとする逸馬を制するように、遠山は先に喋った。

「俺とて、確信があるわけではない。だが、あまりにも機がよすぎる」

「機が……」

「うむ。幕閣連中にとってな」

「お、お奉行！　老中や若年寄を相手に喧嘩をするつもりじゃないでしょうね」

吃驚仰天の顔を向けた逸馬を、遠山はニヤニヤと見やって、

「おまえも大将と呼ばれた男だろう。しかも、元は町人なんだから、幕閣と差し違えたところで失うものはあるまい。いや、町人だからこそ、意気地を見せてやらなきゃならないんじゃねえか？」

少し伝法な口調で、鼓舞する遠山の狙いが、逸馬にははっきりとは分からなかった。

いつも、事件の緒をつけさせ、少し開いたところで、ぐいっと迫るやり方を遠山はしていた。たとえ相手が老中であれ、若年寄であれ、悪いことは悪いと堂々と渡り合う遠山である。そのためには、「証」という武器が要る。遠山が欲しがっているものが何か、逸馬は探さねばならないのだ。

「おまえなら、分かるな、藤堂……」

遠山が期待の目で見つめたとき、ゴホンと咳払いがあって、内与力の坪井喜八郎が襖を開けて入ってきた。いつもながらの険しい態度だが、遠山には少し気弱な面も見せている。その都度、逸馬は八助を思い出すのだった。

「お奉行……少々、厄介なことが……」

と言いながら、坪井の目は逸馬に、席を外せと語っている。察して立とうとすると、遠山の方が止めた。

「構わぬ。おまえも聞け」

「ですが、お奉行……」

ためらう坪井に、遠山は構わぬと小さく呟いた。改めて膝を整えて、坪井は言った。

「では、申し上げます……南町奉行の鳥居様が、此度の流行り病について、早急に話し合いをいたしたいと申し出てきております」

「鳥居が？」

「はい」

「妙だな。これについては、何度もこちらから持ちかけていたのに、けんもほろろで

あったが、どういう風の吹き回しだ」
「私も不思議に思うたのですが、こちらから持ちかけていただけに、断ることもできますまい。それを承知で探りを入れてきたのだと思われます。如何なさいます」
「むろん、受ける」
「明日、鳥居様の小石川の私邸で行いたいとのことですが、何か罠の臭いがします。やはり、せめて役宅にて……」
「構わぬ。罠があるなら掛かってみるまで」
不気味な誘いを楽しむように、遠山は笑みを浮かべた。
逸馬は何が起ころうとしているのか、胸の奥に小さな不安の火がともったものの、止めて聞く奉行ではないことも承知している。
「油断ならさぬよう、お気をつけて」
そう言うのが精一杯の逸馬だった。

三

その日の昼下がり、逸馬は日本橋の御高札場の前に立っていた。

大高札場は、ここ日本橋南詰をはじめ、常盤橋門外、筋違橋門内、浅草橋門内、麹町半蔵門外、芝車町の六ヵ所だった。他に、ふつうの高札場は江戸市中に三十数ヵ所あり、老中から出される惣触、町奉行から出される町触が、町年寄や町名主の手を経て、出されていた。

此度の御触書は、流行り病についての注意喚起がほとんどで、特に女、子供、年寄りへの配慮がされていた。その一方で、流行り病について、妙な噂を流すことを禁じており、もし根も葉もない流言を広めようとする者がいれば、即刻、捕縛されて厳しい処罰がなされるとあった。

『和泉屋』の表は大戸が閉じられて、忌中の貼り紙がされ、潜り戸からのみ、人が出入りしていた。

逸馬が覗き込むと、番頭の喜兵衛が腰を低くしたまま頭を下げたが、あまり来訪を快く思っていない顔をしていた。構わず、逸馬は通されるままに奥の部屋に行き、すでに納棺されている主に、焼香をして合掌した。

主人の徳右衛門には妻子はおらず、親戚もいないということで、棺桶の側にいる人間も少なかった。奉公人たちは涙ながらも、次々と訪れる商売仲間である大店の主人や番頭などに対応をしていたが、急に主を亡くした割には、湿った雰囲気には乏しか

った。

突然のことだからなのか、普段から主人と奉公人の関わりが希薄だったからなのか。逸馬には分からないが、どこか冷たいものを感じていた。

「ところで、番頭。頼みがある」

焼香を終えた逸馬は、おもむろに喜兵衛に声をかけた。町奉行所の詮議所でも、銭札の一件で、何度も顔を合わせているから、控え目な気質も承知していた。

「なんでございましょう」

「徳右衛門の亡骸を、小石川養生所の医師に検分させたいのだが、構わぬか」

「は？」

「医師によって、死因をはっきりとさせたいのだ」

「それならば、町医者の容堂先生が、流行り病によるものだと」

「だからこそだ。徳右衛門は貧しい者や病に伏せっている者の面倒を見ていた。己が死も無駄にはしたくないと思っているのではないか？」

「しかし……」

喜兵衛は検死されることを、ためらうように首を振って、

「奉行所では、銭札について、あることないこと取り沙汰され、本当に苦しんでおり

ました。他人様のためによかれと思って考えた仕組みを、まるで欲惚けのようにいわれて、気を滅入らせておりました」

「……」

「だから、流行り病にもあっさりと負けてしまったのだと思います」

「そう言われると、こっちも辛いが、死因をはっきりさせた方が、奉公人のおまえたちも安堵するのではないか？」

「どういうことです？　藤堂様は、病死ではないとでも仰しゃりたげですが」

商売人として長年、過ごしてきたから、ちょっとした表情や言葉尻から、相手の内心を読み取れるのであろう。喜兵衛は訝しげに逸馬の顔を見やっていた。

「そうではない。詮議所で見た、あの実直な徳右衛門ならば、自分の体を犠牲にしてでも、病の元を調べたいと思っているだろうと……違うかな」

「さあ……私どもとしては、もうそっとしておいて欲しい。それが正直な気持ちです」

「だろうな。けど、このままでは……」

「いいえ。本当にご勘弁下さい」

「そうかい。だったら、しょうがない。町奉行所から、変死扱いとして無理にでも調

べさせて貰うぜ」

「え……」

「こっちの調べではな、和泉屋徳右衛門には、怨みを持つ者が掃いて捨てる程いるらしいので、殺しの疑いも捨て切れねえんだ」

「ま、まさか……」

「流行り病で死んだのなら可哀想だが、面倒な訴訟の途中だから、悪く思うなよ」

逸馬が居直ると、番頭はそれ以上は何も言い返さなかった。

むろん、逸馬には、徳右衛門が誰かに殺された確信があるわけではないが、遠山の思いとは別に、調べてみる値打ちはあると踏んだのである。逸馬は既に呼びつけてあった町方中間に命じて、仏を奉行所まで運ばせようとした。

そんな様子を、廊下の片隅から、じっと窺っている男がいた。

――おや？

と逸馬は首を傾げた。

――やつはたしか……ゆうべ、『佐和膳』に来ていた商人……。

ちらりとしか見ていないが、仕事柄、人の顔だけは忘れない。佐和が懐かしげにしていた様子も気がかりだった。

逸馬とチラリと目が合ったので、語りかけようとすると、避けるように目を伏せて、店の方へ行った。

「番頭。今の男は？」

目顔で訊くと、その後ろ姿を見ながら、喜兵衛は答えた。

「ああ……昔、うちにいた奉公人ですが……実は、亡くなった旦那の甥っ子なんです……もっとも、本当かどうかは知りませんがね。ほんの半月ばかり前に、ぶらりと訪ねて来ただけですから」

「何処の誰兵衛か、知ってるな？　たしか、研吉とかいったと思うが」

「へ、へえ……」

困惑したように返事をする喜兵衛を、逸馬は毅然と見やった。

その夜――。

逸馬は『佐和膳』に立ち寄っていた。

二晩も三晩も続けて来てくれるのは嬉しいけれど、それほど与力は暇なのかと、からかわれた。もっとも佐和は、逸馬が自分が惚れぬいた遠山の秘蔵っ子だということを承知しているので、ただ遊びに来た顔ではないと見抜いていた。

「――ゆうべの男、ですか？」
「ああ。なかなかの色男だったじゃないか。金もたんまりありそうだし、女が捨て置くような感じではなかったが」
あまりにも真顔で言うので、佐和は少しばかり不機嫌になった。ふわりと漂う湯気の向こうから、言いたいことがあればハッキリと言いなさいなと返ってきた。
「大坂の掛屋『天満屋』の主人らしいな」
「そうですよ。私もゆうべ知ったばかりですけど」
「元の名は、研吉だが、今は清兵衛と名乗っている……もっとも、『天満屋』の先代の名を継いだだけらしいが」
「だけらしいって言うけれど、名跡を継ぐのは大変なんじゃありませんか？」
「うむ。婿養子に入って、それから、すぐに一番番頭になって主人に……けれど、大旦那も女房も死んでしまった」
「だから、なんです？」
「とんとん拍子ってのは、こういうことを言うのかと思ってな」
「ちょいと、何が聞きたいんですか」
「まあ、そんなに突っかかるなよ、女将らしくねえ」

「そっちこそ、大将らしくない」
「そうかい？」
逸馬はゆっくりと息を吸い込むと、風呂吹き大根を含んで、酒を口の中できゅっと馴染ませた。甘味と旨味が広がって、満ち足りた温もりが広がる。
「はあ……今日も美味えなあ……で、清兵衛こと研吉とは、どういう仲だったんだい。なに、お奉行に命を捧げた女将が、どういう男と惚れ合ったことがあるか、それが知りたくってな。下世話な話だが」
「遠山様に頼まれたのですか」
「まさか。そんな野暮天じゃないだろう、お奉行は」
「どっちにしろ、逸馬様は調べたんですね、あの人のことを」
「……」
「それを私で確かめようとしている」
「さすが、察しがいいや。だったら話が早い。きちんと聞かせてくれるね」
と逸馬は箸を置くと、佐和をじっと見つめて、語り出すのを待っていた。ほんのわずかに唇を噛んで、うなじに手を添えて、
「あの人……何かやらかしたんですか」

「さあ。分からないから調べてる」
「……」
「言いたくないことまでは、聞こうと思わないが、俺が探ってる銭札のことも少なからず関わりがありそうなのでな」
「銭札のこと……」
「ああ。お奉行もそのことが、流行り病のことと同じくらい、気になっている」
「一々、遠山様を引き合いに出さないで下さいな」
逸馬はバツが悪そうに杯を傾けた。
「あの人……研吉さんは……たしかに立派な大店の旦那になっているけれど、元々は両替商『和泉屋』の手代でした」
「その主人の徳右衛門は、流行り病で死んだことになってる」
「……ことになってる？」
「きちんとしたことは、今、奉行所で調べているところだ。『和泉屋』には、研吉も来ていたよ。徳右衛門の甥だということだが？」
「それは知りません。あの人は、ゆうべ、懐かしくて、私に会いに来ただけです」
ほんの微かに佐和の頬が色づいた。逸馬にはそう見えた。

「会いに来ただけ？　まさか、昔のいい人ってわけじゃないだろうな」
「あら、大将でも、そんなふうな言い方をするんだわね……お察しのとおり、研吉さんはかつて、私を女房にしたいと言ってくれた人でした」
半ば冗談で言ったのに、逸馬は驚いて、佐和をじっと見つめた。
「正直言って、私も迷ったことがある。研吉さんは本気だった。幸せにしてくれるに違いないと思った……けれど、私は……」
「お奉行との恋をまっとうした……決して、添い遂げることのできない、叶わぬ恋と知りつつも……かな？」
佐和は何も答えず、小さく頷いた。
その後、研吉はふいに江戸から姿を消した。上方へ行ったとの噂は聞いていたが、佐和に書き置きのひとつもないから、思いを断ち切るためだったのかと、自分なりに解釈していた。
「ゆうべ、あの人はこう言ってました……『私は佐和を諦めて、大坂に行った。でも、いつかは、おまえが羨ましがるくらいの商人になる。そう思って、虚仮の一念で頑張ってきたんだ。それで、私の晴れ姿を見て欲しくて、江戸まできた……なのに、おまえは相変わらずの日陰暮らし。あのとき、俺がもっと強く求めていれば』……そ

んなことをね」

「……」

「無理はありません。あの頃の遠山様は、まだ旗本らしからぬ行状ばかり……悪い男に引っかかった女にしか見えなかったんでしょうね、研吉さんには」

だが、佐和はなぜかは分からないが、研吉の顔を見て、懐かしさよりも、愛おしさの方が込み上げてきて、思わず涙を見せてしまったという。

――女心は分からぬな。

と逸馬は思ったが、黙って聞いていた。

「けど、女将……悪いことは言わないから、研吉、いや天満屋清兵衛とは金輪際、関わらない方がいい」

「え？　どうしてです？」

「それが、お奉行のためだ。ああ、また引き合いに出すが、遠山様のことを思っているのであれば、関わってはならぬ。いいね」

釈然としない表情の佐和だったが、逸馬がここまで言うには何か裏があるのであろうと、承知したように頷いた。

厨房の格子窓の外に、ちらちらと白いものが落ちていた。

「あら、冷えてきたと思ったら……」
やはり変な空模様だと、佐和は呟きながら、煮物の鍋に落とし蓋をした。

四

鳥居耀蔵の別邸の庭には、タヒバリ、カシラダカ、シロハラなどの冬鳥が飛来して、美声を披露していた。だが今、月明かりの下では風流な音もなく、酒膳もなかった。
「物見遊山ではないゆえな、無粋だが、ご勘弁下され」
呟くように鳥居が言うと、目の前に座していた遠山は単刀直入に、
「用件をお聞きしましょう。私が話し合いを申し出ても断られていた流行り病のこと、どういう風の吹き回しですかな？」
「流行り病のことは……まあ、よいではありませぬか」
「ふざけて貰っては困る。私も大概、鳥居殿には我慢に我慢を重ねてきた。あえて不問に付したことも数々あるはず。されど、此度は、江戸町人の命に関わること。それを、まあよいでは……とは、どういう了見でござる」

「……」

「返答次第では、この遠山、背の桜を散らせてでも……」

「言うな。そんな汚いもの、見たくもないわい」

吐き出すように言ってから、鳥居は手にしていた煙管を火鉢の縁で打ち、

「大川に、弁七という岡っ引の土左衛門が上がったのは知っておられるか」

「いや」

「この男、うちの加藤主水という同心が使っていたのだが……もっとも、私とて殺されるまでは知らなんだ。奉行が同心の手下をいちいち掌握してるはずもないからな」

「それが何か？」

「弁七って奴は、面こそニコニコと一見穏やかだが、なかなかの性悪らしくてな。金に女に博打、どれひとつ手を抜いてなかった。御用は手抜きばかりだがな」

「で？」

「そんな奴だから、近頃は、御用から遠ざかっていたようだが、誰が何故殺したか……少しばかり気になって探索をしたところ、天満屋清兵衛と関わりがありそうなのだ」

「天満屋清兵衛？」

「さよう。知らぬのか」
「はて……」
「遠山殿ならば、よくご存知のはずだが……あの銭札の和泉屋徳右衛門の一件でも、ちらちらと出ている名だがな。しかも……」
鳥居は意味ありげに、唇の端っこに煙管をくわえて、にやりと笑った。
「貴殿とは恋敵だった……と小耳に挟んだが？　ああ、あの綺麗な佐和という『佐和膳』とやらの女将を間に」
遠山は何のことだか訳が分からぬと首を傾げた。持って回った言い草に、遠山は少々、苛ついていたが、これが鳥居の手でもある。相手の心を揺さぶって、弱味を握ってしまおうというのだ。
だが、遠山は本当に知らぬことであった。たしかに天満屋清兵衛の名は、『和泉屋』の事件の流れで出てくるが、佐和と関わりのある人間だとは思ってもみなかった。
「本当に知らぬ、と？」
「まったく」
「ならば教えて進ぜよう。天満屋清兵衛は元は、『和泉屋』の手代だった。しかも、

貴殿とはわりない仲の……」

佐和と夫婦約束をしていた節がある——という話を淡々と聞かせた。遠山には俄に信じられなかった。私情を挟むつもりはないが、佐和と曰くのある男が、事件に関わっているのならば、詳細を聞きたくなるのが人情であろう。

「南でも、銭札については秘かに探索しておったのだが、そんな中で浮かび上がったのが、近頃になって江戸に舞い戻ってきた清兵衛こと、研吉だ」

「……」

「研吉は、『江戸清』という船宿で、弁七と何度も会っており、その度に結構な金を渡していた。研吉は、弁七に脅されていたようなのだ。なんやかやと、五十両は下るまい」

「鳥居殿はどうして、そのことを？」

「私を見くびらないで欲しい。これでも町奉行、ゆえな。隠密廻りの同心は言うに及ばず、町中に放っておる密偵はいくらでもおる」

「なるほど。では、何故、その研吉とやらは、弁七という岡っ引崩れなんぞに、脅されていたのですかな？」

「それが分かれば苦労はない……ただ、うちの吟味方筆頭与力、中嶋勘解由が詮議し

たところによれば、『脅された訳ではない。江戸は物騒だから、用心棒代わりに雇ったまで』と研吉は答えたそうだが、奴は上方で指折りの掛屋の主人に成り上がった男。そんなやり手が、つまらぬ金を渡すとは思えぬ。しかも、五十両は大金じゃ」

そう言った鳥居は、何か言いかけた遠山に、まだ続きがあると手を上げて、

「弁七は……研吉の何か重大な秘密を知った。そのために、弁七は口止め料を求めた。二、三度は研吉も言いなりになったが、調子づいた弁七を消した……ことは間違いあるまい」

「殺し、ということの証はあるのですかな？」

「おそらく、毒によるものと思われる」

「毒……」

「その裏は、南で取っておるが、遠山殿に探索願いたいのは、『和泉屋』との関わりでござる。研吉が、大坂『天満屋』の主人になった経緯も不明なところが多いが、今度は『和泉屋』を乗っ取ろうという節もある……そのあたりを調べて貰いたい。いずれ銭札のこととも関わりあると思うが」

一気に語りかけた鳥居だが、つまりは南北奉行所合同での探索を持ちかけてきたのである。このようなことは、今まで一度もなかった。ますますもって怪しいと踏んだ

遠山だが、

「そういうことなら、調べてみましょう」

と答えて、探るような目で見た。鳥居も遠山の腹の裡は承知しているようだったが、

「これはありがたい。実は、断られるのではないかと、兢々としておったのじゃ。よかった、よかった。まこと、感謝の気持ちで一杯だ」

「心にもないことを……されど、探索のことなれば、南北町奉行が手を携えるのは当然のこと。恐れ入られては困ります」

「これは、まだ儂の私見だが、『和泉屋』の銭札の一切を裏で操っていたのは、『天満屋』に違いあるまい。そして、濡れ手で粟で儲けているのは……」

老中首座の水野忠邦だと、鳥居はハッキリと言った。

近頃、水野から距離を置かれている鳥居は、一矢報いたい思いで、和泉屋の不祥事を取り上げたいのであろう。遠山は鳥居の本意を見抜いていたが、事件を解決するためには、手段を選ばずの心境も働いた。

何はともあれ、流行り病の収束のために、尽力をせねばならぬときである。事件探索も重要だが、遠山にとっての急務は、病を断ち切ることであった。そのために、江

戸市中を巡る水道の衛生管理を見直すことを、鳥居と取り決めた。
その水道を隈無く調べていた与力、同心から、病の広がっている地区が特定された。概ね、江戸の南半分で、赤坂、虎ノ門あたりが多く、同じ水道の系列に偏っていた。よって、その〝流域〟の水道は飲むのを避けるよう、高札などで改めて知らしめた。

五

「おかしい？　何が、おかしいのだ」
桔梗之間で、江戸市中の地図を挟んで、遠山と向かい合っている逸馬は、幾つかの赤い丸印を扇子の先で指しながら、
「ご覧の所は、特に死人が多く出た長屋が密集しています。ですが、ここ……」
と日本橋の一点を指した。
「この『和泉屋』の周辺では、死人どころか、病に罹った者もほとんどおりませぬ」
「つまり？」
「お奉行のご推察のとおり、流行り病で死んだのではない、とも考えられます。事

実、徳右衛門は、もう何ヵ月も、店から離れることはなかったので、他で水を飲んだとも考えられませぬ。そこで、小石川養生所医師の所見です」

「うむ」

「徳右衛門の亡骸を改めたところ、首筋から胸にかけて、数多くの斑点が広がっておりました。これは、此度の流行り病とは関わりなく、毒を飲まされた疑いがある、とのことです」

「なんと……！」

他殺の疑いを抱いていたとはいえ、遠山は驚いた。鳥居から聞いた、弁七殺しとも一致するところがあるからである。

「研吉の近い所で、ふたりの人間が、しかも同じように、毒で殺された……徳右衛門は流行り病に見せかけられ、弁七は土左衛門となって……」

遠山が口の中で繰り返すのを聞いて、逸馬は不思議そうに問い返した。

「お奉行……今、弁七、と言いましたね」

「うむ。知っておるか」

「あまり、いい噂のない岡っ引ですが、奉行所の中間や同心の小者（こもの）などには、うまく擦り寄ってる奴で、小遣いには事欠いてない奴です。それが、どうして……」

「研吉とやらを脅したためらしい」
その名を聞いて、逸馬はギクリとなった。
「これも知っておるのか」
「あ、いえ……」
「今は、天満屋清兵衛と名乗る掛屋で、なかなかの切れ者らしい……鳥居の話では、俺の恋敵とのことだが、ふん、とんと分からぬから戸惑っておる」
逸馬にはピンときたが、何も言わなかった。おそらく佐和は、研吉のことを微塵も遠山には話していなかったのであろう。自分ひとりで苦しみ、悩み、決意したに違いない。鳥居がどこで、そのことを摑んだのかは知らないが、逸馬は惚けた顔をしていると、
「もしかしたら……研吉なる者が、流行り病に見せかけて、徳右衛門を殺したのかもしれぬな。そして、そのことを知った弁七が、研吉に脅しをかけた」
「だから、弁七も殺したと？」
「そうならば、辻褄が合おう。藤堂、おまえはどう思う」
「はあ……」
俯いたまま、しばらく黙っていた逸馬は、おもむろに顔を上げて、

「私が気になるのは、研吉が何故、和泉屋を殺したか……です。ふたりの間柄は、私も調べてみますが、今のところ、銭札にまつわる人物は誰も浮かんでおりませぬ」
「では、研吉が、徳右衛門を殺す理由がない、というのだな」
「――まだ分かりませぬ」
「ならば、その辺りを探るのだな」
遠山が意図しているのは、銭札でボロ儲けした幕閣を白日のもとに晒すことだけではない。被害を受けた者たちに、すべて弁済させる必要があると考えている。そのためには、悪の構造をはっきりさせ、場合によっては、公儀が被害者を救済せねばならぬと思っていた。
「此度の徳右衛門殺しの真相が分かれば、銭札のことも明らかになろう」
「あ、はい……」
「なんだ。どうも気のない返事だな」
研吉が下手人であれば、少なくとも商人として成功したと信じている佐和は、苦しむことになる。知らぬこととはいえ、佐和に思いを抱いた男を、遠山自身が裁くことになる。
――それは、それで仕方がないことだ。運命というものだ。

と思った逸馬だが、肌に張りついて拭い切れない、ぬめりのようなものを感じていた。

直ちに、逸馬は研吉の滞在している旅籠に、同心の原田健吾を向かわせ、北町奉行所まで連れて来させた。途中、逃げる素振りはなかったとのことなので、

「殊勝である」

と逸馬は研吉を褒めてやった。

だが、研吉は、何故、自分が何度も与力や同心に呼び出されるのか、皆目見当がつかないと首を傾げていた。

「本当に、私が一体、何をしたというのでしょうか」

「世間てものは、駆け上がるように大金持ちに成る者には、やっかみがあるものだ。大坂でも、同じような目に遭ったであろう？」

「別にそのようなことはありません」

「ところで……」

詮議所の小さな白洲で、両肩を落としている研吉に、逸馬は真っ向から訊いた。

「なぜ、流行り病に見せかけて殺したりしたのだ？」

「は……？」

「徳右衛門のことだよ」

「……」

「仮にも、元の雇い主を殺すとは太え野郎だ。主殺しは御定書第七十一条で、二日晒した後、一日中引き廻し、鋸で挽いた上で磔とある。たとえ、今は奉公人ではなくとも、同じような刑罰は避けられぬだろうな」

研吉はビクリとなって、背中を震わせたが、何も答えなかった。逸馬がいきなり核心に迫って問いかけるのは、相手がどういう表情をするか見たいがためである。

だが、このときの研吉は、驚きはしたものの狼狽はしていなかった。よほど図太い神経をしているか、本当に知らないかのどちらかであろう。とはいえ、ふたりの人物を知っていることは確かなようで、時折、瞑目するように俯いていた。

「南町では、岡っ引の弁七殺しのことで調べられたらしいが、よほど疑われるようなことをしたのか？」

逸馬が尋ねると、研吉は下を向いたまま、

「そっちのことは、もう始末がついたはずですが」

「徳右衛門を殺したことを、弁七に脅されていたのではないか？　奴はこれまでも、

そういうことをしては、金をせびりとっていたからな」
「知りません」
「おまえが江戸にいた頃から、弁七とは知り合いだったのではないか？　『和泉屋』の番頭らの話では……」
「待って下さい、藤堂様」
研吉は乱れた心を隠すように、襟元に手をあてがいながら、
「本当に私は、何もしておりません。たしかに弁七親分は知っておりますよ。もう十年近く前に『和泉屋』に奉公していた頃にも、弁七親分は時折、主人に袖の下を貰いに来てましたからね。何かあれば、すぐに町方に走ってくれるんで、店としても大助かりですから」
「御用商人なのにかい……ま、昔の話はいいや。では訊くが、江戸に来た訳はなんだい。江戸店でも出すつもりか？」
「お察しのとおりです」
目を輝かせた研吉は、自分がいかに上方で頑張ったかを話し、掛屋の主人になったことを自慢げに話した。商人として、大坂での成功は〝上がり〟も同じである。だが、生まれ育った江戸の水を、もう一度飲みたい。そして、江戸店を出すことは、上

方商人の夢でもある。

掛屋は江戸でいえば、札差と両替商を合わせたような仕事をしているから、自分にとっては馴染みがあって、やり甲斐がある。江戸でまた一旗揚げたいという思いもあって、地ならしのために来たのが目的だというのだ。

「それで、女将にも自慢したかったか……」

「え？」

「佐和さんのことだよ」

「あ、ああ……」

逸馬が何を言い出すのか、研吉は黙って様子を窺っていたが、たまらず訊いた。

「俺たちの話、佐和から聞いたんですか」

「てめえの女みたいな言い草じゃねえか。どうでもいいが、佐和さんには近づくな。いいな」

まるで恫喝するような口調の逸馬に、研吉は少し驚いた顔になったが、ここで逆らうのもマズいと算盤を弾いたのであろう。素直に頷いて、

「私はただ懐かしくて、会いに行っただけですから、はい……」

と情けない顔で答えた。

その研吉の顔を見ていると、人殺しをするような男には見えなかった。逸馬にはそう感じられたが、大坂でのことや、徳右衛門とどういう形で再会したのかとか、弁七とどうして会っていたのかなどと、幾つか尋ねた後解き放った。

——泳がせば何か新たなことが分かる。

と踏んだからである。

逸馬は、決して目を離さぬよう、健吾に命じた。

六

研吉も自分が奉行所に睨まれていることを、はっきりと自覚したのか、まっすぐ湯島天神近くの旅籠に戻ったまま、一切宿から出ようとはしなかった。

その夜も、次の日も、厠のほかは一歩たりとも部屋からすら出なかった。ほとぼりが冷めてから、江戸に来た本当の用を為すつもりなのであろうか。健吾は小者や岡っ引に張り込ませていたが、目立った動きはなかった。

だが、三日目の夕暮れ——。

深編笠の浪人風の男が、研吉の宿を訪ねてきた。宿の者に案内されて、二階の奥にある部屋に通されるとすぐに、

「江戸から離れろ」

と浪人風は、くぐもった声で言った。

「どうしてですか。その訳を聞かせて下さい、岡倉様」

「シッ。不用意に名を呼ぶな」

岡倉と呼ばれた侍は、後ろ手に障子戸を閉めると、壁や押し入れの襖にも気を配ってから、ようやく腰を下ろした。

「町方の動きが意外に鋭くてな、御前様も用心には用心をとおっしゃられておる」

「御前様が……」

「おまえとて、あと一歩、いやあと半歩で、公儀御用達の大看板を手にできるのだ。ここまで来て、足を掬われるような下手は踏みたくあるまい」

「そりゃ、そうですが……」

「またの機会もある。大人しく、言われたとおり姿を消せ。上方に戻ればよい」

「は、はい……」

研吉は仕方なさそうに頷いたものの、怪訝な声で、

「もしや、弁七を殺したのは……」
と岡倉を見やると、すぐさま答えた。
「あんな虫けらはさっさと始末しておくに限る。後々、面倒が起きては困るのでな」
「何も殺さずとも……そのために私は金を摑ませておいたのです」
「甘過ぎるぞ、清兵衛。蟻の一穴よりナントヤラだ」
岡倉が鋭く睨み返して、
「おまえひとりのことではない。御前様のみならず、大勢の御仁に迷惑がかかる。そもそも清兵衛……おまえが掛屋に成れたのも誰のお陰だと思うておる」
「え……」
「先代の天満屋清兵衛やその女房子供、さらには商売敵らが病死したり、事故で死んだのは何故だと思う」
「ま、まさか……」
「さよう。すべて御前様の差し金だ。だからこそ、おまえも山の頂に登れたこと、ゆめゆめ忘れるでない。よいな。いや、これからも銭札で騙し儲け、儲けに儲けろ。さすれば、おまえの懐は潤い、御前様への献金も増える。お互いもちつもたれつ。幕閣への苦労を水の泡にするでない。よいな」

研吉は自分が知らなかったことがあるとはいえ、すでに逃げ出すことのできぬほど深みに入っていることを切実に感じた。

「一蓮托生……裏切りは許さぬ」

そう岡倉に念を押されたが、研吉とて今の立場を捨てる気はない。

「ご心配には及びませぬ。私はあのとき、岡倉様が大坂城代様の使いで店にいらしたとき、若年寄老中に成ると確信に満ちた言葉を聞いたときから、私も御用商人になると決めたのでございます」

「うむ……」

「そのためには、掛屋や札差など御用の金を扱う商いをすべきだと思うておりました。金が金を生むということを、世間の者は知らなすぎます。殊に、あの水野忠邦様や遠山奉行のように倹約奨励では、世の中に金が廻りませぬ。廻らなければ、貧乏は貧乏のまま。私の夢は岡倉様……今紀伊国屋でございます」

「ならば、余計な情けには流されず、きちんと己の務めを果たすがよい」

鋭く目を細める岡倉に、研吉は忠誠を誓うように頭を下げた。

深編笠の岡倉を尾けていた原田健吾と岡っ引の六助は、アッと度肝を抜かれた。む

ろん、健吾は岡倉の名は知らない。だが、岡倉が入った、番町にある長屋門の大屋敷は、

――若年寄堀田備中守。

の屋敷であった。

「原田の旦那……こりゃ、えらいことになりやしたね。もう、あっしらが関わることじゃないのでは……」

不安になる六助が言うとおり、健吾も尻込みした。

堀田備中守といえば、先頃、大坂城代から若年寄に栄進した大名である。もっとも、大坂城代は将軍直属の譜代大名から選ばれ、大坂城を預かって西国の大名を監視する立場にあったから、実質は降格。だが、旗本や御家人を差配する若年寄は、幕政に直に関わるから、名誉よりも実権のある職だ。

大坂城代は名誉こそ高いが、奉行所役人や大坂の地役人らは若年寄が直に管轄しているがため、権力の行使も出来ず、商人との繋がりが乏しいため、旨味もない。京都所司代を経て、老中への道は約束されているものの、確実ではない。少しでも早く若年寄として幕閣中枢に入って、己が能力を遺憾なく幕政で発揮することが、旨味を吸える近道なのだ。

――堀田備中守が金をばらまいている。

という噂は、幕府内のみならず、瓦版などを通して町場にも広がっていた。役人が賄(まいない)を授受するのは特段、珍しいことでもないから、悪者扱いはされなかったが、金の出所だけは不思議だと誰もが思っていた。

「それが……天満屋清兵衛から廻って来ているならば、不思議でもなんでもないな」

健吾の報せを受けた逸馬は、堀田が若年寄となって江戸に戻ってきたことの背景には、天満屋の力があると察した。大坂で、どのような〝密約〟が交わされたのか分からぬが、研吉が天満屋になったことと、深い関わりがあることも確かなようだ。

「改めて、堀田様、和泉屋、それから研吉の身辺を調べる必要があるな」

逸馬が命じると、健吾はしかと頷いてから、すでに探索済みのことを伝えた。

「研吉という男……根っからの悪党ではなさそうですが、決して綺麗な商いはしておりませぬ。此度の銭札についても、発案は研吉で、大坂で上手くいったので、江戸では和泉屋にさせたようです」

「和泉屋徳右衛門が、その誘いに乗った訳は……」

「やはり、堀田備中守の口利きでございましょう。徳右衛門とは、大坂城代になる前から、関わりがあったそうにございます」

「時を隔てて大坂で、研吉と堀田備中守が再会した……ということか。悪事とは妙な組合せで起こるものだ。出会ってなければ、起きなかった罪がなんと多いことか。ああ、色々な咎人を吟味していて、俺は時々、『こいつらが出会ってさえいなければ……』と思うことがよくある」

深い溜息をついて、逸馬はしみじみと人の運命について考えた。佐和と研吉の関わりを知っているからであろうが、逸馬の胸には苦い思いが広がっていた。

奉行所を出た逸馬は、ぶらりと『佐和膳』に向かった。研吉が現れたことで、何かが違ってきた佐和のことが、気がかりでしょうがなかったからである。

しかし、今宵、店には暖簾が出ていなかった。灯りのない戸を、春のような朧月がぼんやりと照らしている。

「大将も来たのか……」

近くの通りから声をかけてきたのは、信三郎だった。

「なんだ、おまえか」

「ご挨拶だな。佐和さんなら、おまえの嫌いな研吉とやらと、何処ぞへ出かけて行ったぞ。手を取り合って仲良くな」

「見ていたのか」

「ほんの今し方、出かけたばかりだ。行き先は知っている。尾けてみるか？」
「知ってる？」
「ああ。ふたりが話しているのを、ちらりと聞いた」
「俺にはそんな……」
半ば照れて、ためらう仕草の逸馬に、信三郎は真顔のままで続けた。
「俺も銭札についちゃ、色々と調べてみた」
「ん？」
「評定所でも話題になっているのでな。このお染風邪のお陰で、町人たちはそんなどろどろした欲惚けの話よりも、流行り病のことの方が気がかりだ」
「であろうな」
「悪いことを企む奴は、火事場泥棒じゃねえが、どんな時でも、てめえたちに利がある時だと踏めば、何だってやりやがる」
「そのことと、佐和さんが関わりがあるのか」
「まあ、ついて来い」
信三郎が歩き出すのへ、逸馬は当然のように後を追った。
「あ、そうだ。パチ助の野郎が、流行り病に罹ったかもしれねえから、屋敷内のしか

も、炭小屋に閉じこめられているそうな」
と信三郎は事もなげに言うので、逸馬は驚いて、「ええ!?」と声をあげた。
「ま、あいつが死んでも、俺とおまえで残された女房と子供はなんとかしてやろう」
「お、おい……」
「嫌か？」
「そうじゃない。縁起でもないことを言うな」
「だったら、風邪の素をバッサリと切り取ってやらねえとな」
意味深長な言い草で、にやりと笑う信三郎の顔が、逸馬には鬼に見えた。
さらに、夜風が冷たくなった。

七

湯島から不忍池（しのばずのいけ）あたりにかけて、ぽつりぽつりと出会茶屋が点在している。それぞれ黒板塀だったり、土塀だったり、高い竹垣で趣があるが、人知れず密会する場所ゆえ、門灯や軒提灯（のきちょうちん）などは淡くくすんでいた。
研吉に誘われるままに佐和が入ったのは、『藤壺』という店だった。『源氏物語』で

は、光源氏の初恋の女の名である。

夏には蛍が訪れる小川が裏庭に流れているが、袖林に囲まれた離れ座敷は隙間風があり、真っ赤に炭が燃えている火鉢が置かれていた。ふたりは宿に入るなり、火鉢の前で向かい合って座った。

ふたりはいい大人ながら、まだ前髪の子供のように照れくさそうに俯いたままだった。長らく沈黙が続いた後、佐和の方から口を開いた。

「誤解しないでね、研吉さん……こんな所に来たのは、あなたに身を捧げるつもりではありませんから……でも、ゆっくりとふたりだけで話したかった」

「佐和……」

「長年、苦労したんですねえ……この前、店を訪ねてくれたのは嬉しかった。でも、まだ私に話していないこと、あるんじゃないんですか？」

「話していないこと？」

「私の店は、別に遠山様の密偵が集まる所じゃありませんがね。藤堂様や武田様など、凄腕で頭も切れるお役人の溜まり場みたいになってます。私の耳にも、それなりのことは入ってくるんですよ」

じっと見つめる潤んだような佐和の瞳に、研吉は思わず吸い込まれた。

「てことは……俺の話も藤堂様から？　なに、奉行所に呼ばれて、あることないこと訊かれたよ。もっとも疚しいことは何もないから、きちんと答えたがね」
「本当に？」
「どういうことだい」
「……本当に疚しいことは、してないんですね、研吉さん」
「ふん。佐和にまで疑われるとはな……」
自嘲ぎみに笑いながら、研吉は火箸で真っ赤な炭を崩した。
「この前も言ったが、俺はおまえのことが忘れられなかった……藤堂様にも言われたが、おまえを見返すつもりで頑張った。それは嘘じゃない。だからこそ、どんな辛いことでも我慢できた。男の意地ってやつだ」
「……」
「そのためには、多少の悪さもした。でなきゃ、大坂でのし上がることなんざ、できるわけがない。けど、信じて欲しい……おまえが疑っているようなこと……人を殺めるようなことだけは、絶対にしていないってことをな」
黙って聞いていた佐和だが、女中に頼んで、酒とちょっとした当てを運んできて貰い、深まっていく夜を楽しむように時を過ごした。

佐和は研吉が人を殺したなぞとは思ってもいない。一度は心を動かされた男だ。そのことは疑っていない。ただ、

——頼まれ事をすれば、断れないお人好し。

という気質であることは承知していた。どこか弱い心もあったので、ずるずると悪事に引きずり込まれたのではないか、と勘繰ったのだった。

ほろ酔い加減になった研吉は、そんな佐和の内心を察してか、

「やはり、佐和は俺のことを疑っているのだな……」

「では訊くけれど、弁七という岡っ引のことはどうです？　いえね、その人の女房から意外なことを耳にしたもんでね」

「意外なこと？」

「弁七があなたを脅していたんじゃなくて、研吉さん、あなたの方が脅してたって」

「下らねえ」

「よく使っている船宿の船頭さんも、研吉さんがこう言ってたのを聞いてましたよ。『俺と堀田様のことを嗅ぎ廻るのはよせ。でねえと、本当に死ぬことになるぜ』そう言って、金をやるから江戸から出て行けとまで……」

「佐和……」

俄に物悲しそうな表情になった研吉は、杯を膳に置くと、佐和に擦り寄った。そっと手を握り締めると、

「どうして、そんなふうに言うんだ……遠山様に俺を探るよう頼まれてるのか？」

「違います」

「だったら、なぜ……」

「私が信じたいからです。あなたが嘘をついていないことを」

「嘘……」

「商売柄、私も色々な人を見てきました。けど、あなたには何処か嘘がある。大坂で指折りの掛屋になって、江戸店を作りたいというのは本当のことでしょう。けど、何かしっくりこない……しっかりと地に足がついていないというか、焦っているというか」

「そんなふうに見えるか」

「もし……もし悪いことに荷担しているのなら、きちんと奉行所に出向いて下さい。遠山様は話の分かる人。きっと力になってくれると思う」

「何を下らんことをッ」

研吉の口元が歪み、苛立ちが走ると、握っていた手にぐいと力が入った。痛いと零

した佐和のことなど気にせぬ顔で、そのまま畳に押し倒した。だが、佐和は抗うことはせずに、まるで俎板の鯉のように大人しく、しかし覚悟を決めた声で、

「手籠めにするのなら、どうぞ。殺したければ、どうぞ……でも、そんなことをしたら、私が思い描いていた研吉さんは、ぜんぶ消えます。真面目で頑張り屋の研吉さんは、露と消えます」

「今更、何だ！　おまえの心の中には、俺なんか、いないじゃないか！」

乱暴に耳朶に息を吹きかけ、うなじに唇を這わせた。

佐和はされるがままにしていた。だが、その目は虚空を見上げたまま、精彩が失われていた。魂が抜けているような佐和の表情をまじまじと見て、研吉はふいに突き放すように立ち上がった。

「からかっているのか……いや、やはり遠山の密偵か……俺が悪いことをしていると思って、こうやって近づいた。そして、何かを探り出そうとしている」

「そうじゃない。私は本当に、研吉さんに危ない橋を渡って貰いたくないから……」

「大きなお世話だ」

声を荒らげた研吉は、横たわったままの佐和を険しい目で見下ろして、

「おまえが今でも、遠山の日陰の身である意味が分かったよ」

「え……」
「一緒にならぬ理由もな……遠山様の奥方は、格上の旗本、堀田家のお姫様だ。芸者上がりのおまえを嫁にすることはあるまい。だが、それでいいのか……佐和……俺はおまえを幸せにしたい。だから、江戸に舞い戻ってきたのだ。俺と一緒にならないか。なんなら、上方に行ってもいい」
「……」
「幸せにしたいんだ」
今度は打って変わって、哀願するような声になった。
「俺は、そうしたいと、ずっと考えていたのだ、佐和……」
だが、佐和は首を振って、
「遠山様と一緒にならない理由は……それでも幸せだと私が感じているからです」
「佐和……」
「そう覚悟できるほど、遠山様は私にとって、大切な人なのです」
研吉は思わず何か言いかけたが、その言葉を呑み込むと、うっすら笑みすら浮かべて、火箸を握り締めた。それをぐいと掲げると、佐和を睨みつけ、
「ふん……二度も振られるとは洒落にもならないな……」

と呟いて、グサリと火鉢に戻した。最後の見納めとばかりに佐和を見つめると、そのまま部屋から出て行った。

出会茶屋から表に出ると、粉雪が音もなく降っていた。

研吉が肩を窄めて、懐手になると、

「女ひとりに振り回されるとは……天満の鬼と呼ばれたやり手の清兵衛も形無しだな」

と声がかかった。

振り返ると、岡倉が番傘を手にして立っていた。

「なんだ、あんたか……盗み見をしてたんですかい？」

「情けに流されるなと言ったはずだ」

「……」

「だが、もううかうかとはしてられぬな。佐和という女も、始末しておいた方がいい。おまえのためだ」

驚いて凝視する研吉を、岡倉は牽制するように、

「なに、おまえに殺れとは言わぬ。この俺がきちんと……」

と言いながら、ゆっくりと刀を抜いた。その切っ先に、白雪が触れて、ぎらりと燦

めいた瞬間、研吉は思わず後ずさりした。
「またぞろ、おまえが奉行所に引っぱられたら、遠山左衛門尉は切れ者だ。それこそ面倒なのでな。悪く思うなよ」
鋭く斬り込もうとした寸前、小柄が飛来して、岡倉の手首を掠めた。
同時、逸馬が駆けつけてきた。アッと見やって、思わず踵を返すと、そこには信三郎が両手を広げて立っていた。
「辻斬りを探ってたんだ。ちょいと奉行所まで来て貰おうか？」
無言のまま岡倉は、逸馬に斬り込んできた。素早くかわして腕を〝霞み取り〟で絡めると、そのまま仰向けに倒した。同時、信三郎が鞘ごと刀を摑むと、猛烈な勢いで岡倉の鳩尾を突いた。
「うっ――」
そのまま気を失った岡倉を見て、研吉は咄嗟に逃げようとしたが、逸馬に足掛けをされ、たたらを踏んで倒れた。
「和泉屋徳右衛門並びに、岡っ引の弁七殺しについて、改めて吟味させて貰うよ」
淡々と言う逸馬を、研吉はぶるぶると震える目で見上げていた。

八

「ほう……岡倉が北町に捕らえられたか」
老中首座・水野忠邦はその濃い眉毛を逆立てて、目の前に控える堀田を見下ろし、さらに畳を強く踏みつけて近づいた。
――ごくり。
堀田の喉が鳴った。乾いた音だった。
「も、申し訳ありませぬ。されど、岡倉とて、すべてのカラクリは知りませぬ」
「だから？」
「喋ることはあるまいと思います」
「愚か者めが」
水野は低く掠れた声で、責めるように言った。
コツン――。
中庭の鹿脅(ししおど)しが澄んだ音で鳴った。水野は、暇ができれば自ら手入れをしている庭木を愛おしそうに見やって、

「誰とて、己の命が一番可愛い。和泉屋徳右衛門や岡っ引を手にかけたことがバレそうになれば、すべて主君であるおぬしへの忠義でやったことだと言い訳するであろう」

「ですが……」

「――ですが、なんだ」

「あの殺しについては、決してバレることはありますまい。徳右衛門は流行り病で死んだこと。弁七とて殺された証なんぞ、ありませぬ」

「だが、天満屋清兵衛の方はどうだ」

「……」

「あいつが銭札の仕組みを話して、立ちゆかなくなると、逃げ隠れしていたことを話せば、儂の身も危うい」

「さようなことは決して……」

必死に首を振りながら、堀田は答えた。

「清兵衛こと研吉と、私との関わりが分かることがあっても、水野様との繋がりは決してバレることはありませぬ。他の幕閣とは違って、いかなる文書にも水野様の名は出しておりませぬし、痕跡も残しておりませぬ」

「だが、おまえは知っておる」
「は……？」
「いずれ、岡倉はおまえの名を出す。天満屋も、おまえとがっぷり四つに組んでいるのだから、表に出ぬわけがない」
「ですから、奴らは決して私の名を……」
「出さぬと申すか」
「はい」
「しかしな、儂はそれほど人を信じてはおらぬのだ。だが、おまえがまこと、儂に忠義を尽くすと言うのであれば、この場にて腹を切れ」
「み、水野様……」
喘ぐように上目遣いで見る堀田の頬は、ぴくぴくと痙攣していた。
「おまえが事前に、すべての責任を取って切腹して果てれば、元服をしたばかりの息子を立てて、御家の存続だけは認めてやろう。潔さを買って、儂が後見人になってもよい」
「……」
「どうする」

「そんな……あまりに無体な話ではございませぬか……わ、私は水野様に、これまで、どれだけ忠義を尽くしてきたと思うておられるのでございますか」
「感謝しておるから、御家は存続させると言うておるのだ」
「此度の銭札についても、すべては水野様のため、ご公儀のため……なのに、たかが町奉行に手下が捕らえられただけで、何故、そこまで恐れられるのです。老中首座の水野様が、何故でございます」
必死に命乞いをするように両手をついて、涙を呑んで訴える堀田を、水野は冷ややかな目で見やって、
「裁くのが、遠山だからだ」
「は？」
「あやつは、身分や役職の上下だの、縁故の深さだのには拘わりなく裁きをする。たとえ相手が上様であっても、理を通そうとする。そこが恐い」
遠山は、いわゆる上聴裁判にて、公平公正で妥当な裁きを、将軍から直々に褒められたことがある。
「でも、水野様ならば……」
「揉み消すことなどできぬ。奴なら、儂と刺し違えてでも、真実を暴こうとするであ

ろう。しかも、此度は何故か、鳥居までが遠山に擦り寄った」

「……」

「鳥居は権力の座をちらつかせれば転ぶやもしれぬが、今は儂の分が悪い」

自分勝手な言い草に、さすがに堀田も我慢できなくなったか、畳についていた手を上げて背筋を伸ばした。

「しからば、水野様……私は腹を切りませぬ。一蓮托生と言うたは御前でございますぞ。遠山の何を恐れておるのか知りませぬが、旗本を差配するは私の役目。遠山のひとりくらい、どうとでも処分致しましょう」

腹立たしげに言って立ち上がると、襖が開いて、水野の家臣が数人現れた。廊下からも、足音を立てながら駆けつけてきた。

「な、なんと!?」

立ち尽くした堀田は怒りと恐怖が入り交じった顔を水野に向けて、言葉にならぬ声で叫んだ。だが、水野は何事も起こっていないように淡々と、

「大坂城代になったのも、若年寄に抜擢されたのも、一体、誰のお陰だと思うておる。おまえは少々、欲が深過ぎた」

「おのれ……!」

「欲を持つなとは言わぬ。だが、己のためだけではなく、ご公儀のため、世の中のため、よいことのために使わねばな」

水野がニヤリと笑うと、家臣たちは一斉に飛びかかり、脇差を抜く間もないくらい素早く、堀田を押さえつけた。

堀田備中守、切腹――。

との報が北町奉行所に届いたのは、お白洲にて、研吉を取り調べる直前のことだった。事前の詮議で、逸馬は岡倉に、堀田と和泉屋徳右衛門や天満屋清兵衛こと研吉との関わりを話させていただけに、まさに青天の霹靂であった。

それでも、逸馬は幕を引くわけにはいかない。堀田備中守が背後にいたことは既に摑んでいた。そこから、どのように金が流れていたかは、信三郎が評定所にて秘かに調べているはずだ。

むろん、逸馬がやらねばならぬお白洲は、徳右衛門殺しの真相と弁七殺しの下手人を捕らえて、処刑することである。とはいえ、黒幕であろう堀田が既に死んだとなれば、結局はトカゲの尻尾切りで終わってしまう。

――堀田備中守のことは、まだ伏せておく方がよさそうだな。

逸馬はなんとなくそう感じていた。
「何をぼうっとしておる、藤堂」
控えの間にて立ち尽くしている逸馬に、内与力の坪井が声をかけた。
「此度の一件は、お奉行も立ち会うと言うておる」
「お奉行が……!?」
あまりの驚きように、坪井の方が腰を抜かしそうだった。
「なんだ。お奉行が吟味に出て、まずいことでもあるのか」
「そうではありませぬが……いや、少しばかり、まずいといえば、まずいか……」
「何をぶつぶつと。近頃は少し耳が遠いのでな、ハッキリと言え、ハッキリと」
「あ、いえ。何でもありません」
逸馬は毅然と言うと、襟を正す仕草をして、詮議所に向かった。
町奉行所の裁きは直ちに、町奉行が下すのではなく、吟味方与力が事前に調べる。これが〝一審〟のようなもので、捕縛された咎人や証人らから調べ書きを取る。もちろん裁決をするわけではないが、この調べ書きによっては、町奉行が即決することもある。
もっとも死罪や遠島という重罪については、〝最高裁〟である評定所に持ち込まれ

るので、慎重に慎重を重ねての審議となる。

詮議する折の吟味方与力の席は、八畳二間、下役同心と書物方（かきものがた）のは六畳二間と決まっており、座席の四方は板縁で、六尺三和土（たたき）の粗筵（あらむしろ）は公事人（くじにん）や証人の呼び出し席、そして砂利を敷き詰めた白洲がある。

誰しも、この場に通されれば、緊張をするものである。

だが、すでに蹲（つくば）い同心に呼び出されていた研吉は緊張をするどころか、ふて腐れたような態度で、軒庇（のきびさし）を見たり、公事人溜まりを振り返ったり、お白洲の砂利に触れたりしていた。裃（かみしも）姿の逸馬が詮議所に現れたときも、何度か顔を合わせているせいか、

「こりゃ、どうも……」

と形ばかり、頭を下げて平伏したものの、悪びれたようすは微塵もなかった。

――嘘を通す気だな。

逸馬は感じたが、威儀を正して座り、

「面を上げろ」

と重々しく声をかけた。

九

研吉がゆっくりと顔を上げると、いつの間にか、奥の襖を背に遠山奉行が座していた。薄暗いので、はっきりとは顔が見えなかったが、家紋入りの濃紺の裃は、まるで閻魔が険しい目で睨んでいるようだった。

ぎくりと首を竦めた研吉が、もう一度頭を下げるのへ、逸馬が訊いた。

「大坂の掛屋、天満屋清兵衛に相違ないな」

「は、はい……」

「元の名は何と申す」

「研吉と言います」

「日本橋の両替商、和泉屋徳右衛門を知っておるか」

「はい。十年程前、お世話になっておりました」

「何故、店を辞めた」

「それは……」

ちらりと壇上を見て、少し言い淀んで口をつぐんだが、思い切ったように、

「惚れた女と、添い遂げることができなかったからでございます」
「誰だ、それは」
「――お白洲と関わりがございますか」
「言いたくなければ、言わずともよい。既に、お奉行も承知していることだ」
逸馬が事前に話していたのである。少しばかり困惑した顔になったが、研吉は気を取り直したように、自分が何故に捕らえられ、何の咎で裁かれようとしているのか、不思議だと言った。
「覚えがない……と申すか」
睨みつけるように逸馬が問い返すと、研吉は首を横に振りながら、知らないと答えた。そして、吐き出すように、
「商人は信頼が命。しかも、私どもは他人様のお金を預かるのが仕事。あらぬ疑いは、本当に大迷惑でございます」
「しかし、おまえは私の先の詮議では、色々と話してくれたではないか。銭札のカラクリなどを……」
「……」
「武家や商人から預かった金は、十万石の大名に匹敵するほどの額となる。それを米

相場、先物取引でうまく利すれば、儲けは莫大なものになる。天変地異が起こって、凶作にならない限り、胴元役のおまえが損をすることはない。しかし、万が一、飢饉になって取り付け騒ぎが起これば、元本は残っていないのではないか？」

鬼の首を取ったように言う逸馬に、研吉は鼻先で笑うように返した。

「倹約令や株仲間の廃止、物価の強引な引き下げ。そして、年貢の増加のための新田開発に人返し令……御公儀がやっていることは、私ども商人に言わせれば、まったくの出鱈目でございます」

「御政道を批判するか」

「千両と言われた札差株も、今では半値近くではありませぬか。これでは、家屋敷のような担保とはなりませぬ。それに、大坂の問屋が江戸の問屋に、どれほど貸し越しになっているか、ご存知ですか」

「十六万両を超えていると承知しておるが……」

「与力様のおっしゃるとおりでございます。そんなに商品の代金を滞納されては、大坂商人はたまりません。貸し倒れを避けるために、モノが江戸に流れなくなるのは、当たり前ではないですか」

「……」

「それに加えて、札差や両替商の利息はどんどん下がり、先頃、旗本御家人を救うために、札差にある借金は無利息と定め、二十年の年賦で返済することになりましたが、こんな無茶苦茶なことはない」

「その代わり、猿屋町会所から札差に貸してある八万両も無利息としたが？」

「それが何だと言うのです。事実、半数の札差が営むことができなくなりました。だからこそ、私たちが……」

研吉は前のめりに身を乗り出して、

「だからこそ、私たち大坂の掛屋や両替商が、銭札という、いわば商人が藩札のようなものを出して、滞ったままの金を天下に廻そうとしているのではありませぬか。それのどこが悪いのですか！」

立て板に水と話した研吉は、逸馬とさらにその奥に鎮座している遠山にギラリと目を向けた。まるで、食らいつくような勢いだった。

逸馬は興奮を静めるように言い返した。

「――ならば、なぜ、徳右衛門を殺したのだ？」

「殺してない」

研吉はすぐさま答えた。

「では、誰が殺したのであろうな。いや、言い訳はよい。徳右衛門が、流行り病に見せかけて殺されたことは、すでに露顕しておる。おまえも承知しているはずだ」

「……」

「弁七も同じ毒で殺された。おまえが殺したのでないとすると、誰がやったのだ？」

「知りませぬ」

「さようか……ならば証人を呼んでおる。これへ」

蹲い同心が溜まり場から連れて来た証人とは、岡倉であった。そのことは、研吉もおおよそ承知していたことである。筵を敷かれたものの、町人と同じ白洲に座らされることを、岡倉は武門の恥と拒絶した。

だが、遠山が奥から低い声をかけた。

「評定所より許しを得ておる」

たったその一言で、岡倉は渋々ながら、研吉と少し離れた所に座った。

「先に行った詮議での話を繰り返すことができますかな、岡倉殿」

「ああ……」

「徳右衛門並びに弁七を殺したのは、そこな天満屋研吉に相違ないな」

「はい。間違いござらぬ」

間髪入れず岡倉が答えたので、研吉はキッとなって振り向いた。
「その理由を申せ」
「私が徳右衛門から聞いた話では、清兵衛こと研吉は、以前『和泉屋』の手代でしたが、店の金を百両程盗んで遁走しました」
「何をバカなッ。出鱈目を言うな！」
研吉は腰を浮かしたが、逸馬は澄んだ声で制した。
「お白洲であるぞ」
「は、はい……」
「続けて下され、岡倉殿」
「こやつは……いえ、清兵衛は、江戸に来たのはいいが、昔の罪を徳右衛門に咎められ、出る所に出ると脅された。百両を返すから黙っていてくれと、何度も話し合いをしたようだが、物別れに終わった。それで徳右衛門を殺し……そして、そのことを知った岡っ引の弁七は、逆に清兵衛を脅して金をせびっていた。だから、口封じを兼ねて殺したのだ」
「武士に二言はないな」
「ない」

今にも爆発しそうな顔で、研吉は拳を握り締めていた。が、今度は研吉に向かって、逸馬は声をかけた。

「岡倉の申すことに相違ないか」

「大嘘もいいところだ」

「だが、武士に二言はないとはっきり申しておる」

「……」

「言い訳があるなら許す。申してみよ」

膝の上で拳を握り締めたまま研吉は、全身を震わせていたが、

「こ、殺したのは……この男だ。岡倉だ。それだけじゃない。大坂の天満屋……私の先代を殺したのも、この岡倉です……」

岡倉は端然と座ったまま、半眼で聞いていた。

「もちろん、私の知らなかったことです。江戸に来て初めて聞いた……私もまた、この人たちに利用されたのです」

「この人たち？」

「はい」

「他におるのか？　それは誰のことだ」

「……」
「構わぬ。正直に申せ」
逸馬が優しい目をじっと向けていると、研吉は藁をも摑むように、
「わ……若年寄の……堀田備中守様です。私は堀田様の言われるがままに、銭札で儲けた金を渡しておりました。しかし……そのことを徳右衛門にも命じたところ、徳右衛門は……いえ、私の元の主人は、それはできないと拒みました。だから……」
「殺されたのだな？」
「――はい」
逸馬は岡倉に向き直って、
「さよう申しておるが、どちらが本当のことを言うておる」
「私だ……かような町人ごときの言うこと、信じるのか」
「町人？　町人だからこそ信じるんだよ」
わずかに伝法な口調になった逸馬に、岡倉はエッと目を上げた。
「なに、俺も元は町人。人形町の町名主の次男坊だからよ。今、てめえの人生を語るつもりはねえが、藤堂家の養子に入って、ここに座ってる……俺の養父とおまえの主君である堀田様とは知らぬ仲ではなかったらしい。叔母から聞いたのだがな、実に権

力欲の強い御仁だとな」
「なにを下らぬ……」
「おまえも忠臣ということか……武士は時に、主君のためなら嘘を押し通す」
「何の話だ。殿は関わりなきこと」
「関わりない？　何に関わりないのだ」
「……すべてにだ。銭札のことを知りもしなければ、徳右衛門殺しも知らぬ」
「痛ましや。そうやって主君を庇うのか」
「知らぬ、知らぬ！」
憤然となって頑なに否定する岡倉に、奥から遠山が声をかけた。
「堀田備中守は、おまえが殺したと言うておるが？」
「な、なにをバカな……」
「最期に嘘は言うまい。堀田殿はすべてを吐いて、自刃して果てた」
「!?　――」
その言葉には、研吉も驚かざるを得なかった。
「その顔……おまえも知っている顔よのう」
遠山が声をかけると、それを引き継ぐように、逸馬が研吉に顔を向け、

「殺しについては、おまえに罪はない」
と断言した。そして、岡倉を毅然と睨みつけて、
「庇う相手は、もはやおらぬのだ。おまえが話さねばならぬことは、その後ろのことだと思うがな……堀田殿が一体、誰にどれだけの金をばら撒いていたか」
「残念ながら……私は知らぬ……いや、万が一、知っていても、主君の不利になることなら言わぬ。口が裂けても言わぬッ」
岡倉は全身を打ち震わせながらも、頑なに黙っていた。
「ならば……ならば私が、知っていることを、すべて話します」
唐突に声を洩らしたのは、研吉の方だった。一度はがっくりと両手をついたが、背筋を伸ばすと、まるで重い荷物を下ろしたような、妙に爽やかな顔で話しはじめた。
「どの幕閣に、どれくらいの金が渡ったか……克明に記した帳簿もありますれば……すべては堀田様の命令ですが、私の金ですので、私が……すべて把握しております……これで公儀御用達になれると思ったのに……佐和も見返せると思ったのに……」
訥々と語りはじめる研吉の顔を、逸馬と遠山は静かに見守っていた。
遠山ならば、すべてを話しても安心だと思ったのか、それともはや逃れられぬと観念したのか、研吉はまるで他人事のように、十年前に上方に行って、行き倒れ同然

になっていたところを、『天満屋』の主人に助けられたことから語り始めた。

お白洲に、小雪がちらちら舞ってきた。

長い年月をかけてできた苦労という名の〝雪まろげ〟を、少しずつ溶かすかのように、研吉の目に涙が溢(あふ)れてきた。しかし、その涙をまた埋めるような純白の雪が、さらりさらりと舞っていた。

第二話　影踏み

一

内桜田門を潜った途端、門番の甲賀百人組の者に声をかけられた。粉雪が舞っていたから、編笠に合羽の姿ゆえ誰何されたのだろうが、急いでいる身としては苛立つことだった。

「書院番組頭、毛利源之丞八助でござる。今日より拝命し、上様の護衛に参った」

将軍の側役であることを強調した八助だが、それがかえって押し問答の原因になろうとは思いもしなかった。

「もう一度、御名を戴きたい。上様の御側役ならば尚のこと、お確かめしとうございます。これも役儀なれば、ご容赦戴きたい」

堅苦しく述べた門番に、八助は首筋が痛くなる思いがしたが、同じ事を繰り返した。だが、門番は通すどころか、門番所まで来てくれという。

「何故だ」

「少々、お伺いしたいことがあります」

「この急いでおるときに、私を誰だと思うておる」

八助はさらに苛立って、半ばムキになって言葉を返した。

「三河以来の旗本、毛利源之丞……かつては、西之丸切手門番頭だった毛利だ。畳奉行、宗門改役、小普請方改役、奥右筆仕置掛、勘定吟味方改役、台所奉行、寄場奉行などを歴任した者だ。この顔に覚えがないというか」

「ありませぬ」

がっくりとなった八助だが、気を取り直して懸命に、

「ならば、おまえの方が怪しい。私を知らぬとは潜りだ。まこと、甲賀衆の門番か」

「申し開きなら、ささ、門番所にて」

と門番が手をかけようとしたので、

「無礼者！　下がれ！　この前まで無役だったからと思って、馬鹿にしておるのか！　私は書院番組頭だぞ！」

幕府役人には「役方」と「番方」があるが、武門の出としては番方の方が格上だという思いがあった。大番組、書院番組、小姓番組、新番組など将軍の旗本を守る役目の者から、旗奉行、持弓組、持筒組、使番、太鼓役、船手、徒衆、鉄砲方などが主な番方であった。

八助は流行り病に唸っていたとき、書院番を拝命したのだ。炭小屋なんぞに閉じこめられて、己の運命を呪っていたが、まさに塞翁が馬。病が完治してから、改めて奉公することとなったのである。

書院番とは合戦場にあっては、御馬廻りを固めて、平時や鷹狩りの折でも将軍の身辺を守護する最も重要な武役である。五十人が一組で、十組あり、八助はその十番目の組頭であった。

この役職に限らず、老中若年寄以下、諸奉行らは、登城の際に通るべき門や道筋が決められている。〝通学路〟を守るのと同じように、必ず通るべき城門を潜らねばならぬ。

書院番の場合は、内桜田門ないしは大手門から入った後、下乗橋を渡って三之御門を抜け、百人番所の前を通って、中之御門、その先の石垣を曲がると御書院門がある。さらに中雀門を抜けて、本丸表御門から御殿に入り、中之口で着替えやら、文

書など持ち物などを整え、一度や二度では覚えられないくらいの廊下を渡って、かつて務めた勘定組頭や奥右筆の部屋の前を歩いて、番方詰めの土間を通過して、ようやく控室に到達する。さらに、ここで刀を置き、身なりを整え、奥の詰所へ行く準備をする。

そこまで行くのには、かなりの時がかかる。それゆえ、門番なんぞの誰何を受けていては、遅刻してしまう。遅刻は、銀二枚の罰金である。

「罰金なら、まだいい。この誰何がもとで、当番に不参となったら、家は改易なのだ。家が取り潰しになるのだぞ。そういう厳しい御法度だということは、おまえも知っておろう！」

思わず八助は、門番を怒鳴りつけた。だが、自分は役目をまっとうしているだけだと、門番は淡々と手招きする。そのとき、大手門側から顔見知りの旗本が入って来た。

「おう。これは山本殿！　この門番が私のことを知らぬというのだ。こちらへ来て、文句を言って下され」

と縋るように八助は声をかけたが、その旗本も「急いでおりますので」と、そのまま三之御門の方へ小走りで行った。まるで逃げるような態度に舌打ちをして、八助は

他の顔見知りを目で探したが、
「初めから従っていた方が時間の無駄にならずに済んだと思いますが？」
門番の言う通りであった。仕方なく、名の確認を行ったが、八助の名は記載されていなかった。そんなバカなことはないと八助は必死に言ったが、
「ないものは、ありませぬ。まこと、書院番組頭なのですかな？」
「ぶ、無礼者！」
これが夢であってくれればいい。八助は悲痛な思いでそう願ったが、門番の態度は変わらなかった。それにしても、このままでは本当に遅参扱いされて罰金となる。いや、登城できないまま改易になったりすれば、最悪の事態となってしまう。
――もしや、これは罠ではないか。毛利家を潰すための……！
そう考えたら居ても立ってもいられなくなった。頭の中を悪いことばかりが巡る。
たしかに、その気配はないではなかった。
逸馬と信三郎が探っていた銭札の一件についてだ。
切腹して果てた若年寄の堀田備中守と天満屋清兵衛が結託して、不正をして儲けた金を幕閣にばら撒いた。その金の流れを突き止めるべく、ふたりに協力した結果、明瞭なことは分からなかった。

天満屋清兵衛こと研吉が残していた帳簿はあったが、どこまで正確かは分からず、結局は誰もが知らぬ存ぜぬを通して終わってしまった。評定所にて詮議されたものの、金の授受の現場を押さえるのならともかく、不正をした商人の裏帳簿では、信憑性がないと一蹴されたのである。

当の研吉は、すべてを知らなかったでは済まされず、天満屋は闕所の上、島流しとなった。現代で言えば「収賄」側は不起訴なのに、「贈賄」側が有罪になったということだ。

黒幕の堀田備中守が己が悪事の一切を暴露し、自刃したのだから、老中首座の水野忠邦もそれ以上の追及ができようもなかった。

――水野様も銭札の恩恵を受けていたか。いや、水野様こそが本当の黒幕か。

逸馬と信三郎がそのようなことを言い出したものだから、八助も旗本のひとりとして、奥右筆や色々な奉行を務めた人脈を生かして調べてみた。その結果、怪しい人物は何人もいたが、評定所で明らかにならなかったことが、八助ひとりで解決できるわけがない。幕府という大組織に、ひとりで刃向かえるはずがない。所詮は蟷螂の斧だったのだ。

「だが、俺のその行為が老中幕閣の耳に入っていたとすれば……陥れられたとしても

不思議ではない。『当番に不参の者は改易にする』という決まりを実行されれば、言い訳の余地はない……いやいや、考え過ぎだ……我が屋敷には確かに、担当若年寄の使いがきて、正式に任命状まで渡されたのだ……そこまでして、俺を潰して何になる。面倒な奴は、逸馬と信三郎の方だろう。くそッ。結局、あいつらのせいで俺は……ガキの頃からいつもそうだッ。西瓜泥棒も俺のせいにされた」

ぶつぶつ言っていると、

「毛利殿。如何なされた」

と背中から声がかかった。振り返ると、そこには供侍を門外に置いて入って来たばかりの遠山左衛門尉景元がいるではないか。北町奉行の遠山金四郎である。

「あ、ああ……！」

地獄に仏とはこのことである。簡単に事情を述べると、

「この遠山が保証する。御番帳に名がないのは誰かの手落ちであろう。毛利殿が書院番組頭になったことは、水野様他老中の方々より聞いておる。仔細は後に報せるとして、ここは儂と一緒に通る。よいな」

遠山が門番に有無を言わさぬ毅然たる態度で話をつけた。

「か、かたじけのうございます。この御礼は改めて申し上げます」

「いや。今日は式日でよかった。でなければ、儂は登城しておらぬのでな」
「ハハッ。では後ほど！」
深々と頭を下げると、八助は慌てて駆け出そうとして、砂利に躓いて転びそうになった。なんとか持ち堪えたが、久しぶりの裃姿のせいもあって、ぐっしょりと汗をかいている。
「さように急がずとも……」
「は、いえ、今日が初日でありますれば」
本当は緊張の余り、俄に激しい尿意を催していたのだ。もう一度、頭を下げた八助は、スタコラサッサと次の門に向かって走った。
城中、急ぎ足は構わぬが、駆けるのは厳禁である。そのことを思い出したのか、急に早歩きに変えた八助の姿を、遠山は苦笑し、半ば呆れ顔で見送っていた。
「まさに藤堂の言うとおり、番方には相応しくない男じゃのう」

二

虎之間が書院番の詰所であった。襖に虎の絵があるから、そう呼ばれている。

さらに奥には、蘇鉄之間、檜之間、紅葉之間、西湖之間などが続き、それぞれ番方の執務室となっている。

八助が虎之間に到着したとき、書院番頭と他の組頭はすべて揃って、新任の八助が来るのを今か今かと待っていた。既に登城終了の太鼓は鳴っている。

「大変、申し訳ありませんでした。遅参のこと深くお詫び致します」

ずらり居並ぶ書院番組頭たちは、いずれも居丈夫で裃の上からでも胸板が厚く、腕っ節が強そうだと分かる。剣術、槍術、柔術など武芸十八般に秀でており、いかにも武家の棟梁という雰囲気であった。

「着任早々、遅れるとは銀二枚の罰金では甘うござるな。組頭がかような調子では、配下の書院番、与力や同心の志気も鈍るというもの。己が力量不足と思えば、辞退することもできようものを」

早々に皮肉が飛んできた。だが、理由はどうであれ、新参者は最初に来ているべきところ、刻限に間に合わないというのは叱責されて然るべきであった。

「まこと、平に平に、ご容赦のほどを。申し訳ございませんでした」

と頭を下げるしか、八助が取るべき態度はなかった。

書院番頭の江崎小太夫は壮年ながら穏やかな顔をしているが、眼光は鋭く、八助を

食い入るように見て、

「まあ、遅参と言うても、まだ執務が始まっている訳でもなく、式日の催しもまだ二刻程先のことなれば、それほど恐縮することもない」

「と、とんでもないことで」

「だが、二度と無様なことはするでない。おぬしは色々な役職を歴任し、江戸城中の生き字引との噂もある」

「さような、大袈裟なことは……」

「それゆえ、幕閣への賄賂の流れなどを調べておったのであろう？　無役ながら大した御仁じゃな」

「あ、いえ……」

ここにも噂が届いているのかと、八助は穴があったら入りたい思いだった。

「だが、これからは若年寄支配の書院番の組頭ゆえな、言動には気をつけよ。番方は上に逆らえば、行いが乱れ、統率が取れなくなる」

「は、はい」

「もっとも、毛利殿は、台所奉行、寄場奉行などの奉行職を務めたお方。組頭は降格と思われているかもしれぬが、我らは上様側近中の側近の、文字通り旗本でござれ

ば、矜持をもって務めに励まれい」
「はは。この命に代えまして、上様をお守り致す所存でございます」
「頼もしいのう。宜しく頼んだぞ」
ニタリと笑った江崎の表情を見て、八助は胸が苦しくなった。何とも言えぬ威圧感がある。思わず目を逸らして、自席に行こうとすると、
「早速、仕事始めだが、毛利……先日来、何度か、かようなものが、畏れ多くも大手門に貼られてあった」
と江崎が声をかけて、手にしていた分厚い紙切れを見せた。
『江戸城の御金蔵の金子、頂戴致し候。暮らしに喘ぐ貧しい町人農民のため、我ら世直し天狗党が天に代わって、バラ撒き候』
そう達筆で書かれてある。いかにも人を食ったような文だが、江戸城の御金蔵がおいそれと破られるわけがない。この文の内容が真実とは限らない。本当は何か別の悪行を起こすのが狙いで、役人の目を引きつけておくための偽装かもしれぬ。
八助がそう言うと、
「むろん、その考えもあるが、盗賊の仕業と考えるのが筋であろう。世直し天狗党という名の盗賊は、かつても江戸で跋扈していたことがある」

「たしか、そうでした……」
「それと同じ輩かどうかは分からぬが、こうして挑戦状を叩きつけられた上は、鼠一匹通さぬのが我ら書院番の務めだ」
「だから、あんなにしつこく誰何したのか？」
「む？」
「あ、いえ。何でもありませぬ」
「とにかく、大番方、新番方、そして勘定奉行、金奉行、さらには町奉行らと連携を取りつつ、賊を退治せねばなるまい。御城の御金蔵を狙うは上様のお命を狙うも同じ」
「はい」
「老中首座の水野様も、先頃、廻り番衆に活を入れて、博徒、泥棒は言うに及ばず、怪しいとみたら遠慮なく捕らえよ。それが何よりの番方の勲功だと、お話しになられた」
「そうなのですか？」
「うむ。そこでだ、毛利。この大役、おぬしに一任するゆえ、決して蔵が破られるようなことはなきよう、最初の務めとして、奮闘するがよい」

「わ、私がですか……!?」

そのような大役は無理だと断ろうとしたが、周りの組頭たちは城中警備、城外の巡回、さらには鷹狩りへの随行、大御所の日光参拝の警護など、数々の仕事があるため、非常時のことは「十組」が請け負うことになっているのだ。

「ぎょ……御意。承知仕りました……な、何としても、職務、まっとう致します」

背中が丸くなって文机に向かうと、八助ははあっと深い溜息をついて、なぜかしみじみと掌を見た。町中の手相占い師に、

――必ずよいことがある。目の前のことに死力を尽くせば、道は開ける。

と言われたことを思い出していたのだ。

「無役のまま、病に伏して屋敷に籠もっていることを考えれば極楽ではないか」

そう考え直した八助は、別室にて控えている配下の書院番五人に会った。それぞれの下として、中雀門番には、与力と同心が十人ずつ詰めているから、八助の部下は五十五人となる。

ところが、目の前の書院番たちは各々、読み物をしたり書き物をしたり、中には寝転がっている者や間食をしている者、酷いのになると、花札賭博をしている奴らもいた。番方の最前線を預かる武士の集まりだけに、一癖も二癖もある顔つきばかりだっ

た。

「ゴホン！」

わざと大きく咳払いをしたが、誰も八助を振り向くことはない。もう一度、咳払いをしたが、耳栓でもしているのかと思うくらい無視している。だが、八助としては、恐い顔ばかりなので、それ以上、何ひとつ強く言うことはできず、一同の前に座った。

「此度、番頭を命じられた毛利……」

「分かってるよ」

花札をいじっていた男がギロリと振り返った。

「あの……」

「だから、あんたが誰かは先刻承知之介だって。堅苦しい挨拶は勘弁だぜ」

「はい。では、早速ですが、我ら十組に課せられた務めを言います」

「御金蔵の警護だろう？　そんなものはもう十日も前からやってるよ。天狗党かなんだか知らないが、そんなものは御金蔵の番兵だけで十分だろう。そこまで入って来りゃ、大したものだよ」

脅し文はまったくの悪戯（いたずら）だと認識している口調である。あるいはそうかもしれぬ。

だからといって、何かが起こるまで腰を上げぬのは如何かと問いかけた。
「これは、書院番頭の江崎様よりの命令なれば……」
「そんなのを一々、聞いてちゃ、こっちの体が持たぬ。適当に処するのが、あなたの仕事ではないか」
「な、なんと……」
「上には上の考えがあるのでしょうが、下の我々とお偉方をうまく繋いで下され」
「そう言われてもな……」
八助は一同を見廻して、眉を顰めた。
「なんという体たらくであろうか。朝っぱらから、かような気の緩んだ態度では、上様がイザというときになんとする。しかも、城中で博打まがいのことなんぞ、どう大目に見ても許すことはできぬ」
五人が同時にむっくりと起き上がり、八助を振り返った。まるで牢獄にでもいるような感覚に囚われた。
「ま、待て……乱暴はならぬ、乱暴は」
「私たちは宿直で疲れているのだ。まったく、だから番方の事情を知らぬお坊ちゃんは始末が悪い」

朝番、夕番、寝番という三交代で務めが行われている。目の前の男たちは、しばし寛いでいるだけだという。それにしても、およそ江戸城中に詰める役人とは思えぬ有様に、八助は何とも苦々しい思いがした。

考えてみれば、数々の任務先へ赴いたが、いずれも問題のある所ばかりであった。ということは、幕府内の役所という役所は腐りきっているということであろうか。だからこそ、賂も当然のように罷り通り、木の葉がしずんで石が浮くような政が行われるのであろうと、八助はぼんやりと考えた。

――逸馬だったら、ここでブチッとなるだろうな。

さしもの八助も怒鳴りたいところだったが、喧嘩になれば勝ち目はない。何事もなくてよかったと胸を撫で下ろして、

「宿直については、ご苦労でした。しかし、この御金蔵破りを捨て置くわけにはいきませぬ。今日から、取り組むので、そのつもりで宜しく頼みます」

なんだか自分の方が手下のような気分になって、目を伏せた八助だった。だが、書院番たちは、きちんと返事をせず、またごろりと横になるのであった。本来、城中で寝ころぶなどというのは処罰ものである。だが、八助は、

「うっ……」

何も言えなかった。

三

「まったく、パチ助も困ったものだ。書院番組頭らしくビシッとやればいいのだ、ビシッと。ねえ、仙人」

逸馬が声をかけると、さっきまで座敷で横になっていた仙人こと宮宅又兵衛（みやけまたべえ）が、寺子屋の子供たちと影踏みをして遊んでいた。

中庭が狭く感じるくらい、十数人の年もバラバラな子供たちが、お互いの影を踏み合っている。立冬が過ぎて、影が長くなったので、面白くて仕方がないのであろう。子兎（こうさぎ）のように跳ねる子供らは可愛らしいが、足腰が少し曲がった仙人の姿は、壊れた操り人形でしかなかった。

「先生……また腰をギックリとやってしまいますよ」

「ワハハハ。逸馬、おまえも一緒に来い。昔はよくやっていたではないか」

「昔はって、俺を幾つだと思ってるのですか。ささ、無理はやめて、無理は……」

おもむろに逸馬が立ち上がり、縁側から降り立つと、仙人がその影を踏んで、

「ほれ！　逸馬の鬼じゃ！　みんな、逃げろ、逃げろオ！」

と仙人が叫んだものだから、子供たちが挑発するように近づいたり、逃げたりし始めた。奉行所から立ち寄っただけの逸馬は乗り気ではなかったが、ついつい仲間に加わってしまった。

逃げる子は影を踏まれると、鬼に捕まえられたことになる。だから、ひたすら逃げるしかない。建物などの陰に入ると、影が消えるので、ほんのひととき息を継ぐことができるが、十数える間しか陰の中に立っていることはできない。

間合いを取って逃げ出すのだが、この影踏みの何が面白いのか、子供たちは喚声を上げながら逃げ回っている。幼い頃は、自分も夢中になって遊んでいたはずなのに、

――いつから、屈託のない遊びをしなくなったか……。

そう考えると、目の前の子供たちが急に愛しくなってきた。ずっと子供のままでいてくれという思いが込み上げてきたのだ。

楽しませるために、逸馬もワアッと叫びながら鬼を演じていたが、急に仙人が声もなく、その場に倒れた。咄嗟に駆け寄った子供たちに手を差し伸べる仙人の顔が苦痛に歪んだ。

「先生！　大丈夫ですか！」

すぐさま逸馬が支えると、仙人は絞り出すような声で、
「こ、腰が……腰が……」
「だから言わんこっちゃ……さあ、肩に捕まって下さい」
縁側に運んでいると、奥の厨房から、茜が飛び出してきた。
「――せ、先生！」
茜も一緒に仙人を抱えて、座敷に上げるのを、子供たちも心配そうに見ていた。
「大丈夫だよ。すぐによくなるから、みんなは机を片づけて、気をつけて家に帰りなさい。また明日ね」
笑顔で言う茜に、子供たちはそれぞれきちんと挨拶をして、『一風堂』を後にした。だが、ひとりだけ心配そうに中庭に立っている男の子がいた。忠吉という九歳の子である。
「どうしたの、忠吉ちゃん」
「……先生が転んだのは、おいらが押したからなんだ」
「え……？」
「鬼に影を踏まれたくなかったから、先生を……」
申し訳なさそうに言う忠吉は、今にも泣き出しそうな顔をしている。

「それは、違うぞ、忠吉……」

仙人は布団に横になって、苦痛の表情のまま続けた。

「先生がおまえを押しだそうとして、滑ったのじゃ。自業自得じゃわい。おまえは気遣いのできる、いい子じゃ……気にするな。明日には治っておる」

「そうよ。忠吉ちゃんが悪いんじゃない。分かったら、ほら、みんなと一緒に帰りなさい。でないと、本当の鬼がやって来るぞー！」

両手を挙げて脅かすと、忠吉はもう一度、頭を下げて、山門の方へ駆け出した。

「――本当に、あの子は、気イ遣いなんだから」

茜が溜息のように言うと、逸馬もそのようだなと答えて、

「あまり見かけない子だが」

「五日程前に入って、でも、一月もすればまた何処かへ行っちゃうんですよ」

「何処かへ？」

「旅芸人一座の子なんですよ」

「ああ……」

逸馬はもう一度、忠吉が去った方を見やった。人に気を遣うのは、旅から旅の暮らしで、心から安らぐ友がいないからかもしれない。そう思った。

「そういや、逸馬……おまえもあの年頃に、旅芸人の女の子を好きになったことがあったのう。ぽっちゃりとした頬の赤い可愛い子じゃった」
「そうでしたかね」
「忘れたとは言わせぬぞ。両国橋の涙の別れ、相手は健気に我慢しているのに、おまえの方がワアワア泣いてなあ。あはは、あの時はおかしかった」
困ったような顔になる逸馬を見て、茜はくすりと笑った。
「仙人……そんなに喋れるのでしたら、起き上がって下さいな」
「あ、いや、痛いのだ。痛いのは本当だ」
「もしかして、お開きにするためのお芝居でしたか？」
「違う、本当に……あ、いててて……」
くすくす笑う茜に、逸馬は忠吉の旅芸人一座について訊いた。
「あら、知りません？　それこそ今、両国橋西詰に小屋をかけている紫源氏一座の座長、紫梅之丞の子なんですよ。あの子も三歳で初舞台を踏んで、芝居に出ることはあるのですが、読み書きもきちんとさせておきたい。梅之丞さんはそう考えていて、だから……」
「仙人に？」

「ええ。石門心学の宮宅又兵衛先生だからこそ、子供に色々と教えて貰いたいと」
「そうだったのか……」
茜が逸馬と親しそうに話していると、仙人が焼き餅を焼くように、
「おい、茜。あの塗り薬を頼む。痛うてたまらん。早う頼む」
「住み込みも楽じゃないですね」
何が嬉しいのか、茜はいつもニコニコしている。これでは仙人も寺子屋師匠として、放したくないであろう。
「それより、逸馬……パチ助がなんだって？」
「あ、いえ。何でもありません。評定所勤めの信三郎が、書院番初仕事の顚末を、小耳に挟んだもので」
「天狗党がどうのこうのと言ってたが？」
「ええ。盗賊を取り締まる役になったとか。まったくパチ助に似合わぬ役職です。天狗党のことでは、町奉行所でも探索を始めておりますが、武家屋敷しか狙わない盗賊でして、何やら武家に怨みを抱いているようでもあります」
「武家に怨みを……」
「世直しと謳っているくらいですから、幕府に対しても不平不満があるのでしょう

な。だからこそ、御金蔵を狙うなどとバカげた挑戦状を叩きつけたのかもしれません」

「バカげたことかのう……」

「でしょう。到底、無理です」

江戸城には九十の門があり、それぞれ大名や旗本が、鉄砲、弓、槍、持筒などの編隊を組んで、厳しく警戒している。堀は深く、石垣を登るのも困難、櫓には当然、武者返しがある。熟練の忍びでも不可能に近い。

仮に御金蔵に入ったとしても、天守台下にある奥御金蔵も蓮池御金蔵も昼夜なく、金奉行配下の番卒が見張っているし、そもそも〝二千両箱〟を人の手で持ち運ぶことは無理である。盗まれにくいように重く作られているのだ。

「それでも、破る奴はいるかもしれん」

「仮に盗んでも、その小判を使えばバレるのではありませぬか？　庶民が小判を使うのは、なかなかないことだし、幕府の封印を見られれば……」

「では、何のために、挑戦状なるものを門扉に貼ったりしたのかのう？」

「度を越した悪戯だと思いますが」

「そうかのう……つまらぬことから、世が乱れ、無辜の民が巻き込まれるのが戦の始

まりじゃ。泰平の世だからというて、浮かれておってはならぬ。何事もなくてよかった……そういう思いで、どのような些細なことにでも目を光らせる。それも与力の務めぞ」

「……はア？」

「はアではない。真面目に聞け」

珍しく仙人が正面から意見を言ったりするものだから、逸馬は調子が狂って、背中がむず痒くなった。縁側に転がっていた麻姑の手を使って背中を掻いていると、山門の向こうにチラリと人影が見えた。

黒っぽい着流しに、腰には小太刀を一本だけ差している。総髪の浪人のようだが、透き通るような白い細面で、体は女のように華奢だった。

――あいつは……。

何処かで見たことがあると逸馬は感じた。だが、詳しくは思い出せない。あるいは錯覚かもしれぬ。

「ああ。あいつか……このところ、時折『一風堂』の近くをうろうろしておる」

仙人も気づいて、小声で言った。

「この近くを？」

「またぞろ、水野様か鳥居様の手の者やもしれぬな。儂のことを、どうでもお縄にして、獄門にでもしたいとみえる」

「！　……」

「まったく……人は生まれながらにして、分け隔てがない世の中にしたい……ということのどこが悪いのかのう。これはお釈迦様も言うておることだ」

「せ、仙人……」

逸馬とてその思いは強いが、わざわざ大声をあげて、〝お上〟を挑発することもあるまい。尻込みをしているのではない。仙人の身を案じてのことである。

山門に向かって、問い詰めてやろうとした逸馬だが、すぐさま着流しは煙のように姿を消した。

「!?　――」

目を凝らした逸馬の胸中には、新たなざわめきが湧き起こった。

四

大御所護衛の命令が八助に下ったのは、暮れ七つ（午後四時）に「寝番」に出向い

たときだった。大御所とは十一代将軍家斉公のことである。将軍在位五十年の後、西之丸に引っ込んだが、いまだに幕政に多大な影響を与えていた。

家斉の治世は後にいう〝寛政の改革〟からはじまり、〝天保の改革〟に至る長い変革の時代であった。その間に、文化文政という町人文化の熟成期でもあったから、逸馬のような町人上がりの与力などという変わり種も現れたのである。

いずれにせよ、家斉は好色将軍として巷に轟いており、幕府が奢侈禁止令などを出したのも、その豪奢な暮らしを貪ったからだと、まことしやかに囁かれている。たしかに、五十五人の子供を生ませるほど好色で、贅沢だったかもしれぬが、太政大臣の官位を貰うほど、武術に優れ、幕政にも熱心だった。だからこそ、有能な側近を侍らせ、自らが陣頭指揮を執っていたのである。

「そんな御仁の護衛とは……十番組の役目ではないではござらぬか」

八助は書院番頭の江崎に文句を言いかけたが、上様のご命令だ、と言われれば反論なんぞできなかった。

上様とは、十二代将軍家慶のことである。将軍職に就いたのは四十五歳のとき。十分に壮年になっていたが、大御所の家斉が実権を持っており、父親の言いなりだった。だから、老中若年寄から何か相談を受けても、ただ、「そうせい」と答えていた

だけだ。その上様が自ら何かを命じたとは考えられない。

「まこと、上様の……」

「さよう。大御所様は近頃、体を悪くして、養生しておられるが、そのことにつけ込む輩が暗躍しているとかでな。おぬしに白羽の矢が立ったのだ」

着任早々の八助に、そのような重要な任務があるのは妙だ。しかも、御金蔵を狙う盗賊退治を命じられたばかりである。西之丸とふたつの御金蔵を警護するのは、五十人の書院番ひと組では到底、無理な話である。

――これは上役のいじめかもしれぬな。

と八助は勘繰った。

武官とはいえ、書院番組や小姓番組など将軍側近の番方は、嫉妬が渦巻いていると噂には聞いたことがある。出世とは縁の薄い八助から見れば下らぬことだが、新任の組頭が将軍に気に入られて、一挙に書院番頭になることもある。それゆえ、新入りには無理難題を吹っかけることがあるのだ。

そういういじめには、子供の頃から慣れている八助である。が、下手をすると御役御免どころか家取り潰しとなるような、神経を使う役職だ。女房と子供を六人も抱えている八助にとっては、何としても耐えなければならなかった。

「しょ……承知仕りました」

「当たり前のことだ。せいぜい気合いを入れて、職務に当たれ」

江崎は淡々と命じてから、自分の持ち場に帰った。直ちに、八助は書院番の松本、藤田らを呼びつけて、西之丸の番方と会って段取りをつけるよう命じた。しかし、松本から返ってきた言葉は、

「それは毛利様の務めにございます」

「なんだと？」

「聞いておりましたが、上様の願いは、毛利様に是非に大御所の護衛を務めて貰いたいとのこと。我々は盗賊の方に専念しますれば、与力、同心を十名ばかり預けますので、毛利様自らがおやり下さいませ」

「ま、待て……何のために、おまえたち書院番がいるのだ。私は……」

「では、よろしくお願い致します。新たに脅し文も届いておりますれば、我々も肝を据え直して取り組まねばなりませぬ」

有無を言わさぬ頑固さで、頼りにしていた直属の配下たちも立ち去った。

――あるいは、予め江崎様とツルんでのことかもしれぬ。

とも思ったが、八助は何も言わなかった。そもそも十組は〝遊軍〟みたいなもので

ある。黙って従うしかなかった。

西之丸は遠い昔、八助が切手門番頭として出仕した所だから、馴染みと言えなくはないが、当時は大御所と呼ばれる人物はいなかった。前の将軍家斉が家慶に将軍職を譲ってから、ここに入ったのはいいが、我が儘で困ると耳にしていただけに、どっと憂鬱になった。

もっとも、将軍の側役ではない。警護役ゆえ、顔を合わせたり、言葉を交わすことはないが、動きだけは正確に把握しておかねばならない。だが、西之丸の番方もまた底意地が悪いとの噂があるので、チクチクと八助の心の臓は痛んでいた。

その夜――。

蓮池の御金蔵が破られたとの報が、八助の耳に飛び込んできた。

「そんな……まさか！」

一瞬にして脳裏に浮かんだのは、責任を取らされて、切腹する自分の姿だった。西之丸とは離れている蓮池の御金蔵まで、大御所護衛を放り出して駆けて行くわけにはいかぬ。かといって、自分が「寝番」であるときに破られたとあっては、指揮に向かわねばなるまい。

「これは何かの間違いだ……なんで俺が就任した早々、こんなことが起こるのだ……あり得ない。これは罠だ、きっと罠だ」

狼狽していると、同じく宿直だった江崎が駆けつけてきた。

既に江戸城中は、すべて閉門にしており、鼠一匹通れぬようにしてあるという。つまり盗賊は必ず城中にいるはずだ。堀から逃げようとしても、すでに内堀中に松明を焚いて、怪しい人影はすべて捕らえる算段になっている。

「手早いことですな」

八助が妙に感心すると、江崎は冷ややかな顔で、

「かようなことは、色々なことを幾重にも想定しておるから、直ちに対処できるのだ。まったく新任とはいえ、噂通り役立たずだな」

「噂どおり……噂とはどのような……？」

「どうでもよいから、おまえの組の書院番を集めて、意地でも賊を捕らえよ！　万が一、上様や大御所様の御寝所に入るようなことがあれば一大事だ。よいな、気を抜くでない！」

乱暴に言うだけ言って、江崎はまたぞろ何処かへ姿を消した。

「な、何をどうすればいいんだ……」

おろおろとするばかりの八助だったが、とにかく本丸御殿の虎之間に戻り、配下たちに指示を出そうとした。とはいえ、すぐに行ける訳ではない。面倒な手続きをして、西之丸大手門から、坂下門を抜けねばならぬ。苦労して駆けつけたが、虎之間には他の組頭は誰もいない。御金蔵に行こうとしたが、今度は甲賀者らに誰何された。

「またかよ……私は……！」

と名乗ろうとしたが、強く追い返された。まるで火事場でおろおろとしているだけの間抜けに見えた。

「俺はもはや用なしか」

吐息とともに項垂れた八助は、蜂の巣をつついたような大騒ぎの城中にあって、まるで波に翻弄される如く、元の西之丸に舞い戻っていた。

もはや御役御免は覚悟している。ただ、家の取り潰しだけは避けたい。その思いで、次の手を考えていたものの、頭が真っ白になって何も浮かばなかった。

そのときである。八助は足下に伸びた人の影を踏んだ。

――ン!?

振り向くと、薄暗い廊下に、ぶらり現れた白い着物の老体がいた。

「な、何奴だッ」

胸がドキリと鳴って、八助が声をかけると、相手は嗄れ声で、
「おまえこそ、何者だ。曲者か」
老体は手に槍を持っている。八助は思わず後ずさりして、廊下の蠟燭灯りに浮かんだ顔を見ると、喉がつっかえたように、
「ああッ……！」
と呻いてから、床にひれ伏した。
「それがし、書院番組頭の毛利源之丞八助にございますッ。たった今、城中に賊が忍び込み、御金蔵破りをしたとのこと。鋭意、探索しておりました。賊は未だ城中にいるに違いありませぬ。万全を尽くしておりますが、あたりに潜んでいるやもしれませぬ。ここにいては危のうございます。すぐにでも……」
八助は必死に訴えながら、わずかに目を上げると、そこには既に老体の姿はなかった。不思議そうに上体を上げて見廻したが、薄暗い廊下が続くだけであった。
「⁉　……お、大御所様……！」
立ち上がって、何度も振り返ったが、闇だけが不気味に広がっていた。

五

「それが大御所様だったというのか、バカバカしい」
逸馬が歯牙にもかけぬように反論すると、八助は懸命に言い返した。
「本当なのだ、信じてくれ。俺はこれでも何度か上様のご尊顔を拝したことがある。本来なら、御簾の奥に座して、顔など見ることはできない。だが、三河譜代の旗本が集まった折にだな……」
「その話は幾度も聞いた。信じる。だが、昨夜の話は眉唾だな。気が動転してて、幻でも見たんだろうよ」
断言する逸馬に、佐和はやんわりと竹馬の友のことは無条件に信じてあげるものだ、と口を挟んだ。
いつもの『佐和膳』の店内である。白木の付け台には、出来上がったばかりの〝おばんざい〟ふうの魚や根菜などの煮物が、湯気を立てて並んでいる。実に美味そうな鯖の南蛮煮もあったが、八助の喉には通りそうもなかった。
「いじめて言ってるわけじゃない。御金蔵破りが本当に入ったのならば、狙いは何だ

ったのか……ということだ」

真顔で鯖の南蛮煮を突っつきながら、逸馬が言うと、八助はえっと首を傾げた。

「賊は、二千両箱を盗んだわけではない。その箱をこじ開けて、わずか五十両だけ盗んだという話ではないか」

「まあな」

「しかも、江戸城中から姿を消した。おまえの上役が言うとおり、江戸城中のすべての門を閉じ、要所要所に夜通し松明を灯して、番方を配していたにも拘わらずだ。他にも、御庭番も動いていたはずだ」

「ああ……」

「なのに、どうして賊は逃げることができたんだろうな」

「……」

「俺たち町方も真夜中に狩り出されて、江戸市中を見廻っていた。昨晩の江戸は尋常じゃなかった。不気味だった」

江戸城は松明で覆い尽くされ、町中も夜祭りのように興奮した騒ぎだった。町木戸も閉じたままで、異様な雰囲気が漂っていた。にも拘わらず、賊は誰ひとり捕まることはなかった。

「てことは、うまく騒ぎの中に溶け込んで逃げたか、さもなくば……」
逸馬が軽く息を吐くと、八助を凝視して、
「まだ城中に潜んでいるか、だ」
「城中に……」
「うむ。それこそ、書院番組頭のおまえが探し出して捕らえれば、御役御免にならずに済むし、毛利の御家も安泰なのではないか？」
「よう言うてくれた、逸馬。さすが大将、我が友だ……とはいっても、あの千代田の城に隠れているとなると、一筋縄ではいきそうにないな」
「だが、おまえが見た大御所様……あるいは、それが謎を解く鍵になるやも」
「鍵……なあ」
八助は釈然としないまま、鯖の南蛮煮を摘んで口に運ぶと、にこりとなって、
「はあ、うめえ……実に酒に合うなあ」
「これは、丹波から下って来たばかりの新酒ですよ。近頃は〝寒作り〟などといって、年明けに来るのもありますが、やはり私は霜月の新酒が好きですねえ」
佐和が艶やかな笑みを洩らすので、八助は思わず、俺の奢りだと酒を勧めた。杯を受けた佐和も、馴染みの顔ばかりでは面白くもないでしょうけどと飲んでから、返杯

した。

そんな所へ、ぶらりと信三郎が暖簾をくぐってきた。

寒気が一挙に流れてきたので、ぶるっと佐和は肩を窄めながら、

「いつもの三人が揃ったところで、温め酒といきますか？」

と声をかけると、信三郎はいつになく真剣なまなざしで、

「それどころじゃねえ。大変なことになったぞ、逸馬」

「また女に家まで押しかけられたか。いい加減なことをして、泣かしてばかりだからそうなる。少しは真面目に女とつき合うといい」

「そうだ、そうだ」

八助も相の手を入れると、信三郎は横合いから杯を奪い取って、ぐいとあおり、

「とにかく、来てくれ、逸馬。パチ助、おまえもだ。大手柄になるやもしれぬぞ」

と先導するように駆け出した。

「あらら……」

それを追いかけて行く二人を、佐和は見送りながら、

「あんたたち、二人羽織ならぬ、三人羽織だわねえ」

と笑った。

信三郎は評定所に出向している寺社奉行の役人であるが、いわば裁判資料の下調べや判例探しを主な職務としている。昨夜の御金蔵破りについても、それらしき盗賊の資料を探していたのだが、意外なことが分かったのである。

「意外なこと？」

道々、話す信三郎の言葉に、逸馬は耳を傾けていた。

「聞いて驚くな。俺が調べたところではな、あの紫源氏一座が出向いた旅先の、代官所や本陣の蔵が破られているのだ」

「本当か!?」

「しかも、十両とか二十両という、盗賊にしてはわずかな金だ」

そして、盗まれた所には、『世直し天狗党見参！　民の金を民に返して貰い候』などとふざけた文を残していたという。

「民の金を民に……？」

「ああ。元々は百姓の金。苛斂誅求（かれんちゅうきゅう）で取り上げたものの中から、返して貰っただけだとうそぶいているのだ」

「なるほど。それが、その盗人の〝三分の理〟という奴か……で、今度は江戸城の御

金蔵破りをして、世に一石を投じよう、とでもいう義賊気取りか？」

「気取り、でもねえんだ」

「どういうことだ」

「実際、貧しくて食うにも困っている者や病人を抱えている人たちに、ばら撒いていたというのだ。どこまで本当かは、まだ俺も調べ尽くしちゃいねえがな」

「ふむ……」

冷たい夜風に肩を震わせながら来た先は、両国橋西詰の歓楽街であった。昼間は立錐の余地もないほど、人が集まって混雑しているが、昨夜の騒ぎもあって、深閑としている。

火事などがあったときに、すぐにでも火除け地にできるように広小路となっているが、その目的のため並んでいる芝居小屋や見せ物小屋も葦簀張りに毛が生えたような簡素なものである。その中に、興行の幟が掲げられたままの紫源氏一座があった。

「ここだ」

新三郎は言うと間をおかず待てと声をかけた。逸馬と八助もハタと立ち止まり、一方を見やった。すると、南町奉行所の隠密廻り同心だった谷津重兵衛が着流しで、鋭い眼光を発しながら、芝居小屋の裏手に回っているのが見えた。

「奴は……同心をクビになっていたんじゃないのか？」
思わず、八助が声を洩らすのへ、逸馬が答えた。
「クビになるどころか、商人殺しなどの悪事が露見し、切腹させられたはずだが……」
「ありえねえな」
と信三郎は冷めた口調で言った。
「鳥居耀蔵の懐刀と言われた奴だ。同心にしたものの、元々、鳥居が目付だった頃から抱えていた切れ者だ。その配下には、青竜、白虎、朱雀、玄武という風水の〝四神〟に倣った忍びがいる、とか」
「……」
「同心を辞めても尚、鳥居のために暗躍をしていても不思議ではあるまい」
逸馬と八助にも緊張が走った。信三郎は確信を得たように頷いて、
「俺が調べたことの一切は、評定所にお伝えした。大目付や目付も承知しているはずだが、遠山様よりも鳥居様の方が一手、早く動いたとみえる」
「では、俺も正面から行ってみるか」
気合いを入れて、逸馬が向かおうとすると、今ひとり、闇の中から現れた。そし

て、逸馬たちの方に、ゆったりとした足取りで向かって来ている。総髪で、黒い着物に紅の帯をしている。その不気味な物腰に、

——アッ！

と逸馬が喉の奥で声を発した。

「あの男だ……『一風堂』の様子を窺っていた、あの男……」

「どういうことだ」

「近頃、またぞろ仙人を見張っている奴がいてな。こいつの顔は、俺も見た」

逸馬はすぐさま自分から、その男に近づいて、

「また会ったな。いや、そっちが俺たちの動きを探っていたようだが？」

「……」

相手は無言のまま鋭く、逸馬を睨みつけたまま、掠れたような声で、

「この場から、立ち去られよ」

「何故だ」

相手には殺気が漲っている。逸馬は身構えながら問い返すと、相手は鋭く目にも止まらぬ速さで抜刀し、いきなり斬りかかってきた。思わず避けた逸馬も、次の瞬間は刀を抜き払い、青眼に構えていた。

同時、信三郎もその男の背後に廻り、鯉口を切っていた。
「おいおい！　てめえから、悪党でございますと暴露したようなものだぜ！」
信三郎も素早く刀を抜き払いながら、
「俺たちが誰か知ってのことのようだな」
ジャリッと半歩、詰め寄った。相手は切っ先を地面に垂らし、前後、どちらから攻撃を受けても、すぐさま打ち返す構えを取った。
――かなりの手練れだ。
と逸馬も信三郎も感じていた。下手をすれば、お互い怪我では済まぬ。
ごくりと、八助は息を呑み込んで見守っていたが、このままではマズいと思ったのであろうか、思わず叫んだ。
「控えおろう！　儂は書院番組頭、毛利源之丞である！　そこな紫源氏一座が御金蔵破りの疑いありと睨んで参った！　そこをどかぬと、貴様も賊と見なすぞ！」
必死だった。とにかく、カラカラの喉で気炎を吐いたとき、松本、藤田ら書院番の者たちが十数名、ずらりと現れた。
あっと見やった総髪の男は、わずかに身を引いた。この数が相手では敵うまい。だが、闘う気は満ちている。

「書院番である。貴様は誰だ！」

と松本が声をかけた途端、総髪の男は裂帛の叫びを上げながら、斬りかかっていった。だが、書院番は武術に秀でた者たちばかりである。一閃、二閃と刃を交えながら激しく立ち回り、総髪の男の刀を叩き落とし、バッサリと着物を裁ち切った。

「おお……さすがは書院番。いつも、だらだらとしていても、イザというときには、さすがだのう、ふはは」

満足げに頷いた八助の目が凝然となり、総髪男の姿に止まった。

はらりと落ちた黒い着物の奥には、さらに黒装束の忍び姿があって、豊かな胸が膨らんでいたのだ。

「お、女……!?」

八助は思わず声を上げた。逸馬と信三郎も目を見開いて見た。

すると、芝居小屋の裏手から、谷津が戻って来て、

「朱雀……もうよい」

と声をかけた。途端、谷津は路地に立ち去り、朱雀は車剣という、撒き菱のお化けのような手裏剣を投げて、逸馬たちを牽制しながら闇に消えた。

思わず追おうとする逸馬に、深追いはするなと信三郎が止めた。あまりにも危険な

臭いがしたからだ。

「毛利様、お見事！　後は我らが！」

と松本たちが、目の前の芝居小屋を踏み潰す勢いで乗りこんだ。

六

御金蔵破りが捕まった――という瓦版が江戸市中を舞ったのは、翌日のことだった。下手人は紫源氏一座の座長、梅之丞である。

捕縛したのは、書院番の者たちだということで、城中でも大騒ぎであった。着任早々の八助の手柄だという噂も飛んでいた。

賊に関しては、書院番頭の江崎が直々に取り調べ、その後、蓮池御金蔵を管轄する勘定奉行と町奉行が吟味の上、評定所にて罪科を決定する段取りになっている。

梅之丞当人が、世直し天狗党として、巡業先で盗みを働いていたことも認めたからには、「市中引き廻しの上、磔」は避けられないであろう。

事は将軍の城の御金蔵を狙った凶悪犯罪である。かつて、御金蔵破りは二度あった。犬将軍綱吉の治世と、火附盗賊改・長谷川平蔵（はせがわへいぞう）が目を光らせていた寛政年間、将

軍家斉の時代である。いずれも、蓮池御金蔵だったのは、奥御金蔵は天守台の近くだと言われているが、役人でも場所をはっきりとは知らされていない所だったからであろう。

それに比べて、蓮池の方は普段に使う御金蔵で、大手門と大手三之門さえ乗り越えることができれば、到達することができる。とはいえ、朝昼晩なく警護をしている番兵の目をすり抜けて忍び込むのは至難の業だ。とまれ、そのような不埒者については、即日、評定所で決裁されることとなった。

だが……。

不思議なことに、南北の町奉行が珍しく、

――改めて、吟味をやり直したい。

と同じことを申し出た。つまり、遠山も鳥居も同じような疑念を抱いたのだ。

その疑念とは、どうやって御金蔵まで忍び込んだか、そして江戸城中の門をすべて閉じたにも拘わらず、どうやって逃げたかというものである。

「こやつらは百戦錬磨。さような疑念、問い質したところで何になる。無用じゃ」

臨席していた大目付・相楽幸右衛門は反論をした。

「無用とは、これ如何に」

遠山は膝を進めて、相楽を見据えて、
「およそ、人の命を奪う刑を与える立場の御仁ならば、屹度、間違いのないよう、念には念を入れて調べなければなりますまい」
「さよう。しかし、奥御金蔵の差配は留守居役だが、蓮池御金蔵を差配するは、ご老中と勘定奉行。すでに老中立ち会いのもと、勘定奉行が直々に取り調べた限りにおいては、梅之丞が盗んだことは揺るがない事実。しかも、江戸城中での事件である。町方の出る幕ではないと思うが？」
「我らは……」
同じように、鳥居も鋭く相楽を睨みつけており、
「評定をするために、この場に出向いて来ております。町方としての意見ではありませぬ。取り調べが不十分ゆえ、吟味のやり直しを求めているのです」
意外な目で、遠山は鳥居を見やった。
――何か裏がある。
と勘繰るのは、これまで散々、煮え湯を飲まされた遠山としては当然の思いであった。しかも、梅之丞が捕縛された現場には、同心を辞めたはずの谷津重兵衛がいたということを、逸馬から聞いている。ここで意見が一致したとしても、別の意図がある

に違いない。遠山はそう考えざるを得なかった。

だが、鳥居は、何かを問い質そうとする遠山を制するような仕草をして、相楽に向かって、南北町奉行が一緒に詮議をしてもよいと申し出た。

「ほう……遠山殿と鳥居殿、おふたりでか」

「事は、江戸城の御金蔵を狙った大事件。だが、梅之丞は江戸町人のみならず、関八州の領民たちのなかにも慕っている者が多い……のう遠山殿」

「さよう。江戸歌舞伎よりも人気があるほどで」

「そのような人気者を、御金蔵破りの下手人として処刑するならば、よほどの証拠を立てねばなりますまい」

「しかしな、鳥居殿……」

「あいや、相楽殿の言わんとすることは分からぬでもありませぬ。しかし、下手に処刑をすれば庶民の力は大きい。疑念が膨らめば膨らむほど、余計な憶測も飛び交い、無実の梅之丞を問答無用で処罰した……などと言われてはたまったものではありますまい」

鳥居も庶民の目に見えぬ底力を肌で感じている。これもまた、遠山と幾多の対立を通して学び取ったものであった。

「それゆえ、相楽殿に改めて、お願いしたい。身共と遠山殿で詮議をすれば、江戸町人は納得するのではありますまいか……たとえ、人気者の梅之丞を盗賊だと断じても」

「待て、鳥居殿」

言いくるめられそうな相楽は、慌てた様子で、鳥居に掌を向け、

「梅之丞は、巡業先で盗みを働いていたのを認めておるのだぞ。天狗党だということも」

「承知しております」

「ならば、何故、庇いだていたす」

「庇ってなんぞおりませぬ。巡業先は巡業先のこと……我々は江戸城の御金蔵破りについて調べております」

「それはそうだが……」

「昼夜隔てなく、警護の番役が幾重にも見張っているにも拘わらず、破られたということは、警護のあり方にも問題があるのではありますまいか。我らはただ盗賊を捕らえるだけではなく、どうやって破り、侵入したかを梅之丞から、克明に聞き取ることが大事なのです」

「……」

「そうすることで、二度と賊に破られぬようにせねばなりますまい」

鳥居がそう断じて、同意を求める目で遠山を見た。

「私も、そう思います」

南北の町奉行に、吟味改めを求められれば、拒否する道理はない。相楽は不機嫌な顔をしていたが、仕方がないと呟いた。それを耳ざとく聞いた鳥居は、念を押して、今般の事件の主導権を握ろうとした。

散会の後、遠山は鳥居に呼び止められた。

「――遠山殿はどう思われる？」

「どう、と言うと？」

「梅之丞が本当の御金蔵破りとお思いか？」

「さあ。篤と調べてみぬと分からぬが、おかしなところは幾つもある」

「さよう……」

鳥居は口をもごもごとさせていたが、

「あ、いや……近頃、虫歯が疼いてのう。眠れぬ夜もある……だから、色々と考えたのだが、ずばり言おう。賊は江戸城中におる」

「城中に……」
「つまり、役人の仕業だということだ。五代様の治世の折の賊も、将軍の駕籠頭らの仕業だったではないか」
「たしかに、そうだが、鳥居様の言うとおり、内部の者の仕業なれば、梅之丞は冤罪。解き放たねばなりませぬな」
「いやいや。巡業先で犯した罪……それはそれで償って貰わねばな。所詮、梅之丞なんぞは、江戸城の御金蔵破りができるような、肝っ玉の大きな人間ではないということを、バカな町人どもに知らしめねばなるまいて」
「バカな町人……か」
「これは、ちと言い過ぎた。では、お互い、吟味を尽くしましょうぞ」
にんまりと笑って立ち去る鳥居の背中に、遠山は声をかけた。
「早手回しに梅之丞を捕らえ、真相を探るつもりでしたか」
「……」
「谷津重兵衛は如何しました。うちの与力が見かけたらしいが」
「はて。幽霊でも見たのであろう」
とだけ言って、振り返りもせず、堂々と遠ざかる鳥居が何を考えているか、遠山に

もはかりかねた。

薄暗い廊下に、小雪の寒さがしんしんと広がっていた。その片隅で、信三郎は書類箱を抱えたまま、ずっと控えていた。

「おう、武田か。なんだ、この寒いのに」

「評議を聞いておりましたが、納得できないことが幾つかございます」

「うむ。申してみよ」

「では……」

改めて頭を下げて、信三郎は抱えていた書類の入った漆箱を、そっと手渡した。

「これには、世直し天狗党が、梅之丞の一座の者である証拠が書かれております。どうか、吟味に役立てて下さい」

受け取った遠山は、ただならぬ信三郎の目つきに慄然となった。

七

忠吉が泣きながら『一風堂』に駆け込んできたのは、その夕刻のことだった。一旦、解き放たれたのはいいが、再び梅之丞が町奉行所に連れて行かれたからだ。

「先生……宮宅先生……私の父を助けて下さい。父は、盗みなんかする人ではありません。先生……お願いです」

よほど涙を流したのであろう、着物の襟も袖も雨に打たれたように濡れている。いつも気丈で、大人びた態度をしていた子供だけに、仙人も意外な目を向けていた。他の寺子屋の子たちも、大方の事情は分かっていたので、同情の目で見ていた。中には、盗賊の子だと冷ややかに眺めている子もいたが、誰も口には出さなかった。

「親は親。子は子」

と仙人は常々、言っていたからである。親が悪いことをしたからといって、その子供まで責められるのは間違っている。仙人のその考えは、縁座や連座を否定するものだから、幕府からは睨まれていた。

もっとも、罪人の親兄弟や関係者も処分されることは、吉宗公の治世になくなっている。忠吉が遠島などにされることはないが、盗賊の息子が生きていくのは難しい。

「案ずることはない。もし、お父っつぁんが盗賊であったとしても、貧しい人のためにしたことだと聞いておる。自慢こそすれ、卑下することはない。そして、おまえはずっと、ここで暮らしてもよいのだぞ」

仙人が頭を撫でながら言うと、忠吉はまたしゃくり上げそうになって、

「ほ、本当ですか……？」

と顔をくしゃくしゃにした。旅芸人の子ゆえ、ひとつ所にいることが少ないので余計に、人の情けを感じたのであろう。

「ああ。そのような色々な事情を抱えた子は、今までにも何人もおった。遠慮することはない。のう、みんな」

仙人が子供たちに声をかけると、子供たちは実に明るい顔で、

「そうだよ。ずっと、いなよ」

「お父っつぁん、偉いじゃねえか」

「悪い人と決まったわけじゃないんだから」

「うん。俺のおっかさん、梅之丞の贔屓なんだぜ」

「遊ぼう、遊ぼう」

などと思い思いに励まして、いつの間にか、また影踏みをして遊んでいた。

そんな子供たちを目を細めて眺めながら、仙人はぽつり呟いた。

「じゃが……礫にされたら……あんまりじゃのう」

「――先生？」

茜が声をかけた。情け深い黒い瞳である。

「私……大したことはできませんが、きちんと調べるよう頼んでみます」
「妖怪、にかね」
「はい」
「おまえはもう、こういうことには関わってはダメだ。『一風堂』の女師匠。それで、よいではないか」
「でも……」
と何か言い返そうとしたとき、
「そのとおりよ、茜さん」
背中から声がかかった。子供たちが飛び回る間を縫うように、山門から近づいて来ているのは、真琴だった。
馬喰町にある公事宿『叶屋』の女主人である。いつものように艶やかな着物に、鮮やかな印半纏を小粋に羽織って、屈託のない笑顔で歩いている。その何にもとらわれない、日だまりのような姿に、茜は思わず目を逸らしたくなることがあった。
——自分とは違いすぎる……。
という負い目があるのだ。そして、鳥居の密偵として働き、仙人たちを見張っていた忌々しい日々が蘇ってくる。そんな自分をも許してくれた仙人のことだから、盗賊

の息子を預かることなんぞ、当然の理なのであろう。

真琴にも仙人に通じる〝罪人〟を許す大らかさがあった。茜から見れば、本当に眩しい人たちであった。逸馬といい、信三郎といい、八助といい……茜から見れば、羨ましいくらい輝いている人間だった。

「それに比べて……」

喉まで出かかったのを止めて、茜はにっこりと真琴に、

「今日は、逸馬様は来てませんよ」

「そうじゃないんです。忠吉ちゃんて子に会いたいと思って」

「忠吉……？」

「何か？」

「……忠吉なら、あの青い着物の子だけれど、やはり梅之丞さんのことで？」

「ええ。座員の人に頼まれてね。梅之丞は御金蔵破りなんかしていない。助けて欲しいってね。で、私も色々と俄に調べたところ、その子が何か知っていると思って」

「まさか！　あの子は何も知らないですよ。お父っつぁんが捕まったって、わあわあ泣いてたんですから」

半ばムキになって言う茜に、真琴は落ち着いた声で、

「大丈夫よ。忠吉ちゃんを傷つけるようなことはしないから」
「まだまだ小さな心なんです。触れれば壊れそうな心なんです。大人の事件に巻き込まないでくれますか？」
「……」
「ご、ごめんなさい……私、何を言っているんだろう」
目を伏せて謝る茜の顔を、真琴はまじまじと見つめて言った。
「逸馬さんの言うとおり。あなたは本当にいい女師匠になった。子供も信頼しているのがよく分かる。けどね……言いにくいけれど、忠吉ちゃん自身が盗みに利用されていた節があるんです」
「えっ!?」
「だからこそ、逸馬さんは何とかしたいと考えてる。だけど、吟味方与力の立場では、梅之丞のことを下手に庇うことはできない」
「それで、真琴さんが……おふたりは何をしても意気が通じてるんですね」
少し嫌みな言い草になった自分を、悔やんだように頭を下げてから、茜は忠吉の名を呼びながら駆け出した。
『一風堂』の子供たちは、真琴のことをよく知っている。暇があるときには、逸馬に

代わって〝読み書き算盤〟を教えにくることがあるからだ。だが、勉学になると公事師らしい厳格な態度になるので、子供たちは逃げ腰になっていた。茜の方が好きだった。

奥の部屋に呼ばれた忠吉のことを、他の子供たちは心配そうに見ていたが、茜はさりげなく、その場から離れるように、遊びの相手をしてやった。

忠吉に会ったのは初めてである。緊張の面持ちで見上げるのを、仙人が程よくほぐしてやりながら、

「恐くないぞ。正直に答えれば、何も恐くない。よいな」

と笑いかけた。

「では、聞くけれど、あなたのお父様、梅之丞さんは、本当に世直し天狗党ではないのですね？　芝居の仲間たちも、みんな関わりのないことだと話してます」

「は、はい……」

「去年から今年にかけて、一座は上州から房州、相模と転々として、主に宮地芝居を打ってきたようだけれど、その行く先々で、代官所や本陣などに盗賊が入ったことは知ってる？」

宮地芝居とは、寺社の勧進のために境内で行われる小屋掛け芝居のことである。実

入りは多くないものの、必ず興行ができ、また地回りなどのやくざ者に荒らされる心配も少ないので、梅之丞ら人気旅芸人には有り難い興行だった。

「知りません」

きっぱりと忠吉は答えた。

「そう……だったら、どうして、世直し天狗党のことを知ってるの？」

「え？」

「行く先々で、結構、話題になったはずよ」

「……」

困ったように忠吉は俯いた。まるで畳の目を数えているかのように、もじもじしている。真琴は、私の目を見なさいと言った。

一瞬、ちらりと見たが、威圧するような黒いまなざしに思わずたじろぐ忠吉だった。

「人と話すときには、目を見なさい。でないと、嘘をついていると思われますよ」

厳しい真琴の言葉に、忠吉の薄い唇が辛そうに歪んだ。

「まあまあ……儂とて人の目をじっと見るのは苦手じゃて」

柔らかい声で、仙人が口を挟んだ。

「公事師の悪い癖じゃのう、真琴さんや。逸馬もそのことを心配しておる」
「はあ？」
「誰もが、あんたのような強い心の持ち主ではないのじゃ」
「私だって別に強くありません。懸命に強くあろうとしているだけです」
「それでも強くなれぬ者はおる。いや、弱い心の人間の方が、かなり多いはずだ。責めちゃいかん。相手が勝手に、自然に話すようにせねばのう」
あっと打たれたような顔になって、真琴は仙人を見つめ返した。素直に忠吉に謝ってから、そっと手を握った。戸惑いを見せた忠吉だが、真琴はじっと目を閉じて、脈打つその手をしばらく握り締めていた。
「――本当にお父さんを助けたかったら、すべてを話すこと。本当のことを話すことです。そうすれば必ず、助けてくれる人が現れます。いいですね」
どう返事をすればよいか迷っている忠吉に、仙人も微笑みながら頷いた。
「信じる者は救われる……じゃぞい。もっとも、信じすぎるのも考えものじゃがな」
「先生……」
真琴が艶っぽく目を細めると、仙人は頭を掻きながら、
「のう、忠吉。女を信じ過ぎると、痛い目に遭うが、この真琴さんは別じゃ。ああ、

ちょいと恐いが、観音菩薩様のような人じゃからな、ふほっほ」

そんな様子を、中庭から、子供たちと影踏みをしながら、茜が見ていた。

「あ、消えた、消えた！」

子供たちの声がバラバラと起こった。俄に日が雲に隠れたがために、影が薄くなったのだ。そして、雲が厚くなり、影はすっかりなくなってしまった。

八

北町奉行所の詮議所では、逸馬が黙想して待っていた。同心に案内されて、お白洲に座らされた忠吉は、壇上の逸馬の顔を見て、一瞬、たじろいだ。

「――本当に、吟味方の与力様だったのですね……」

寺子屋で会ったときの印象とは違うので、子供心にも、違和感があったのであろう。

隣に一緒に座った真琴は、忠吉に礼をするようにと背中を押し、逸馬の「面を上げよ」の声で元の姿勢に戻った。

「忠吉。固くなることはない。うまく答えられなければ、いつでも真琴に……あ、い

や叶屋主人に代弁して貰うがよい」

忠吉は小刻みに震えており、肌寒いのに額には汗が滲み出ていた。ぎゅっと手を握り締めている様子を見て、

「申し上げます」

と真琴が逸馬に向かって声をかけた。

「お調べの世直し天狗党という盗賊と、紫源氏一座の座員たちとは、何も関わりはありません。いえ、座員が知らなかったこと……と言えばよろしかろうと思います」

「座員は知らぬこと……では、座長の梅之丞がひとりでやったことだというのか？」

「はい」

「その根拠は」

「そもそも、徒党を組んでやるような盗みはしておりません。千両箱を盗んだわけではないし、代官所や本陣にしても、盗まれたかどうか、はっきりしない程度のお金です。わざわざ世直し天狗党などと貼り紙を残したりしたから、騒ぎになっただけです」

「自ら騒ぎを仕掛けたと？」

「はい。これは私の推測に過ぎませぬが……」

横にちんまりと座っている忠吉をちらりと見てから、
「芝居の前評判のためではないかと思います。世直し天狗党というのは、紫源氏一座の中に出てくるお芝居の義賊と似ております。悪代官や豪農、裕福な大店から金を盗み出しては、それを困った人々に配る。お上は吸い上げてばかりで、領民は暮らしに喘いでいるから、盗賊が代わりに助けてやるという筋立てです」
「なるほど」
逸馬も頷いて、俯いたままの忠吉を見下ろして、
「本物の盗賊が出て、庶民に金がばらまかれれば、それが梅之丞ではと噂となって、客が集まるという算段か？」
江戸でも歌舞伎の木戸銭が高くなり、庶民には高嶺の花になったがために、「寄場」と呼ばれる寄席が盛んになった。そこでは当たり狂言の物真似や怪談などを手軽に見ることができるので、人気があった。
だが、水野忠邦は、寄席で〝都々逸〟を流行らせた都々逸坊扇歌らのあまりの人気を心配したのか、庶民の楽しみの寄席まで規制し、江戸市中の寄席は十五に限られた。そして、演目も滑稽なものは排除され、神道講釈、軍書講釈、昔話に心学という、堅苦しいものだけに限られた。

これでは江戸っ子の憂さの晴らしどころがない。だから、紫源氏一座のような旅芸人の芝居は、江戸町人が楽しみにしていたのである。

その人気を博したのも、義賊と梅之丞の芝居がどこかで重なったからであった。

「私の考えです。本当かどうかは分かりません」

忠吉は黙ったまま聞いていた。

「分かりませんが、藤堂様……梅之丞一座はかつては、あまり人気がなかった……だから、そういう手を使ってでも……」

「なるほどな。すべては人気取りのため、興行のため、ということか」

「はい。ですから、本当に義賊かどうかは分かりません」

「違わいッ」

思わず、忠吉は腰を浮かして、

「父上は、そんなことをしなくても、人気のある役者だい」

と強い目つきで真琴を睨み、そして、逸馬を見上げた。

「本当に、本当にお父っさんは困った人を助けるために、盗みをしてたんだよッ」

言い切ってから、忠吉はシマッタという表情になったが、もはや真実を語らねばならないと子供心に感じたのであろう。唇を一文字にして嚙みしめてから、

「――盗みをしていたのは、お父っさんと私（わたくし）です」
私ですという言い方が妙に大人びており、逸馬は痛々しく感じて、目を細めた。
「盗みは十両から二十両の間だと聞いてます。粒銀などの小銭も多かったと思います。私が手伝うようになったのは、五つの頃からです。お父っさんが入れない狭い所や、蔵の明かり窓、床下などから忍び込んで、私が盗（と）ったこともあります」
「……」
「だけど、自分たちが使ったことは一度もない。ぜんぶ、病人や貧しくて困っている人の家に置いてきてました」
「梅之丞は、どうして、そのようなことをしたのかな？」
逸馬が尋ねると、忠吉は答えに窮して、しばらく俯いていた。ただ父親に命じられて、やっていただけのことであろう。だが、一生懸命、自分の言葉を探しているようだった。
「お芝居は人を幸せにする。泥棒も幸せにする……お父っさんはそう言っていたからです」
「芝居は分かるが、泥棒も？」
「お金を貰った人は、とっても喜んでた。お芝居も観ることができない人は、世の中

には沢山いるんだ」

「……」

「そういう人は、病気だったり、貧しかったりするからだ。だから、お父っさんは……」

「だったら、芝居の木戸銭の上がりとか、おひねりから、恵んでもよかったのではないかな？　たとえ相手が金持ちであっても、他人様のものを盗めば、大きな罪だ。貰った人も、盗んだものを貰って心から喜ぶとは思えないがなア」

「でも……でも、みんな喜んでました」

逸馬はそれ以上、責めることはせずに、傍らにある書類を掲げて見せた。中は、漢語を使ってかかれた文字だらけなので、忠吉には読むのは難しいから、逸馬が語って聞かせた。

「これはな、おまえの親父さんが、何処でどれだけ盗みをしたかを、克明に記したものだ。勘定奉行が各代官所の役人に命じて集めたものらしいが、おまえも知ってるだろう……武田信三郎が、町奉行の遠山様に預けたものだ」

「……」

「何故、このようなものが残されているかといえば、盗まれた金の額をきちんと精査

して、おまえの親父さんから取り返すためだ」
「そんな……」
「だがな、これには総合すると、三千両余りの金がなくなっていることになる」
「ええ!?」
まだ金の値打ちがはっきりとは分からぬ九歳の子でも、莫大な数だと言うことは理解できるのであろう。自分たちが盗んだ額は、到底、これに及ぶものではない。
「おかしいとは思わぬか？　算術が得意なおまえなら、分かるであろう」
「――はい。誰か他の人が盗んでいた……ということですか」
「そういうことだ」
にこりと逸馬は忠吉に微笑みかけて、
「それと同じことが、江戸城の御金蔵でも行われた節がある」
「本当ですか……？」
「だが、今度ばかりは、おまえの親父さんのせいではない。そのことは、おまえが一番、知っているであろう」
「……」
「なぜならば、賊が入った夜、親父さんとおまえは別の蔵に忍び込んでいたからだ」

ドキッと逸馬を見上げた忠吉は、どうして、そのことを知っているのだとばかりに、目を丸くした。

「てめえで言うのもなんだがな、俺は〝梟与力〟と呼ばれてる。夜目は強いんだ」

本当は、八助から世直し天狗党の予告話を聞いてから、定町廻り同心の原田健吾らに探らせていたのだ。端から、紫源氏一座に目をつけていた逸馬の狙いどおり、梅之丞は動いた。

「忠吉……おまえも一緒にな」

「！　……」

「そのことを話しても、親父さんの罪は同じ……だから黙っているのか？　だとしたら、それも間違いだ。盗んだ金の多寡ではない。盗んだ金を何に使ったかも関わりない。盗むという行いが悪いのだ。どんな金持ちからでも、悪い奴からでも、盗んではならないんだよ。それが人の道だ」

「でも……」

「言いたいことがあれば口で言う。はっきり言えなきゃ芝居にしたって構わない。でも、悪い行いには、悪い結末しか待っていないんだ」

気丈に身構えていた忠吉だが、色々なものが押し寄せてきたのであろう。嗚咽する

ように泣き出した。とめどもなく涙が出てきた。
「まったく……泣き虫だな、おめえは」
逸馬が穏やかに言って微笑むのを、真琴も優しい目で見守っていた。

九

評定所で改めて御金蔵破りについて詮議される日、八助はいつものように複雑な〝登城路〟を通って、虎之間に辿り着いた。
待ち受けていたのは書院番頭の江崎小太夫で、濃い眉を逆立てていた。
――またぞろ、何かヘマをしでかしたか……。
と八助の動悸は激しくなったが、
「よくぞ、梅之丞を捕らえてくれた。おぬしには感謝をしておる」
そう述べて、軽く頭を下げた。そして、直ちに続けて、
「今日の評定では、私のことも出るであろうが、万が一、お呼びがかかったら、おまえの口からも、江崎様は立派なお方。書院番頭の鑑（かがみ）となるお方と述べて欲しい」
「あらら？」

そういうことかと八助は肩すかしを食らったが、次席の文机に座るなり、八助は今日の将軍警護について、配下に語り始めた。

「おい、毛利。聞いておるのか」

「私を懐柔しても、評定所では通じないと思います。今般は、何かと敵対している遠山様と鳥居様が珍しく意見を同じくしておいでです。しかも、勘定奉行も改めて吟味し直し、事件には裏があることを探索しております」

「事件の裏……？」

「私にはよく分かりませぬが、どうやら梅之丞は利用されただけ……のようです」

「何故、そのようなことを申すか」

「藤堂や武田が調べたのですから、まあ間違いはないかと」

「どういうことだ」

「ま、それもいずれ明らかになるのでは、ありますまいか」

「貴様……奥歯にモノが挟まったような言い草をして……何が狙いだ」

「私は何も。ただ、梅之丞を捕縛したのは間違いだったかなア……とだけ、御老中にも進言しておきました。むろん、この捕縛が間違いならば、私は腹を切る……のは大袈裟ですので、御役御免くらいは覚悟しております」

八助の言動がよほど気になったのであろう。江崎は、何をどのように老中に進言したのだと、繰り返し問い続けた。

そのとき、評定所の役人から、江崎に呼び出しがかかった。

辰之口評定所は、意外と静かであった。

水を打ったような……とは、このような静けさかと、江崎は感じた。警護のために入ったことはあるが、自分が証人席に座するとは思ってもみなかったからである。

三奉行の他に、大目付、目付という五掛かりであり、老中と若年寄もひとりずつ立ち会っている。緊張して当然であった。

「書院番頭・江崎小太夫」

遠山が重々しく声をかけた。

「はッ」

「盗賊世直し天狗党こと紫梅之丞を捕縛の後、初めに調べたのはおぬしだな」

「さようでございます」

「すぐに自白したか」

「はい。自分の素性と御金蔵を破ったこと、淀みなく語りました」

「では、改めて尋ねる」

鳥居をはじめ、評定所の役人たちの目が覆い被さってくる重苦しさに、江崎は耐えるように拳を握り締めた。

「なんなりと……」

「梅之丞は、どのようにして、蓮池御金蔵まで辿り着いたか、問い質したか」

「はい。たしか、桔梗門は登城する旗本の供侍に扮して入り、堀の内側にある大手門の前で、主の下城を待つふりをしながら様子を窺い、百人番所の厠を借りて、そのまま城中に身を潜め、暗くなってから三之門を縄ばしごなどを使って乗り越え、後は堀沿いの道を駆け抜けたそうです」

「それでも、御金蔵の前は警護が厳しかった。予め盗みに入ると文を貼っていたのだから、当然であろう。それほどの警護の中を、どうやって忍び込んだというのだ」

「あの日、私は毛利源之丞に西之丸警護を命じて、他の者を御金蔵にあててありましたが、梅之丞の話だと、番方に扮して混じり、警護の交替の機を逃さず、鍵を開けて堂々と入った。そして、『賊だア！』と叫んで混乱させたのも、梅之丞当人だということです」

一同は、静かに聞いている。

「さようか……では、どうやって逃げたと？」

確かめるように遠山が訊くと、江崎はこの場の雰囲気に慣れてきたのか、少しなめらかな口調になって続けた。

「堀を泳いで渡れば、対岸は西之丸。本丸ほどの警護ではないので、屋敷内に忍び込み、そこで、しばらく隠れており、明け方近くになって、混乱に乗じて逃げたそうです」

「――どうも、曖昧だな」

「は？」

「西之丸の警護を預かった毛利源之丞によると、大御所様が槍を摑んで、ひとり廊下を歩いていたそうな」

「そのようですな」

「だが、大御所様はその日、病に伏しており、床を離れていないことを、側役が証言しておる。つまり、毛利が見たのは亡霊か……さもなくば、大御所様に扮した賊か、だ」

「そのとおりです」

「ん？」

「梅之丞は役者でございます。大御所様に扮して毛利を欺き、堂々と逃げたのでござ

います。このことは、梅之丞本人からも聞いておりますれば」
「いや。梅之丞はそのようなことは、一言も申しておらぬはず」
「は？」
「この話は、つい先刻、この儂が毛利から聞いた話だからだ。梅之丞が話してもないことを、どうして、おまえが断じることができたか……」
ぐっと睨みつけるような目で、遠山は江崎を見据えて、
「それは、おまえが大御所様に扮して、毛利に見せたからだ」
「そんなバカな！　一体、何のためにです」
「賊が入って、まんまと逃げ通した……と毛利に思わせるためだ。よほど手の込んだ盗みと見せたかったのであろう。でないと、ただ押し込まれたのでは、御金蔵警護を預かったおまえのせいにもなるからな」
「……」
「どうだ。認めるか？」
江崎はとんでもないと首を振り、何を証拠にそのような話になったのだと、興奮気味に反論した。そもそも、自分は御金蔵の警護で忙しく、西之丸に行くことなどできぬと主張した。

「であろうな……だからこそ、予め世直し天狗党の仕業に見せかけて、ありもしない盗賊騒ぎを起こし、その上で梅之丞を捕らえて、下手人として処刑する」
「!?　……な、何のためにですか」
「おまえがちょこちょこと、御金蔵から盗んでいたことを隠すためだ」
「なんと！」
「御金蔵の鍵を持っている者は、ごく少数に限られており、しかも、鍵も月に一度は替える。だが、おまえはその都度、どこぞで合い鍵でもこさえていたのであろう」
「……」
「だが、勘定奉行の点検が迫ってきた。紛失した金があるとバレれば、当然、おまえに疑いがかかる。だから、江戸に紫源氏一座が来ているのを利用し、賊の仕業にしようとした。数十両だけ盗まれたはずだが、後で数百両、数千両足りぬと分かっても、梅之丞のせいにして葬ることができる。違うか」
「何を証拠にそのような……」
「儂と鳥居殿に、梅之丞は忍び込んでいないと、正直に話したからだ」
「馬鹿な。盗賊と私と、どちらを信じるのでございますか」
「梅之丞の方よ。奴はその日、その刻限に……江戸市中のある商家に忍び込んでい

た。北町の同心も確認しておる」

「そ、そんな……」

江崎は知らぬ存ぜぬを決め込んで、

「かような茶番、私は断固、認めませぬ。私が盗んだという証拠があるならまだしも、そのようなことが……」

「証拠ならあるのだ」

「!?　……」

「おぬしの拝領屋敷から、五百両余りの金子が見つかった。中には、町場に出るはずのない、大名や商家との決裁だけに使われる十両小判もあったのだ。他に何か言うことはあるか」

老中や若年寄たちも険しい目をじっと向けていた。わなわなと震えはじめた江崎は、何度も知らぬ知らぬと繰り返していた。だが、それも嘘であることは、全身から溢れ出る冷や汗で誰もが感じ取っていた。

「のう、江崎……人の影は踏めても、己の影は踏めぬものだ……分かるか？」

遠山が語るように言うと、江崎はがっくりと項垂れて、情けない自分の影をじっと見つめていた。

その日のうちに――。

江崎の切腹は決まった。捕縛に向かった書院番たちは、ただ江崎に騙されて使われていただけだから、お咎めなし。そして、図らずも、八助が書院番頭に任命された。

「まさに棚ぼただな、八助」

いつものように『佐和膳』で、逸馬と信三郎はからかったが、八助としては乗り気ではなかった。番方が性に合わぬこともあるが、面倒に巻き込まれるのが嫌だからである。

「役人とは、人々の面倒を引き受けてこそ、役人ではないか。何を今更、愚痴っておるのだ、さあ、飲め飲め」

と逸馬が、佐和が差し出す銚子をそのまま受け取って、勧めた。

「いや、しかし……」

「何を遠慮しておる。おまえは、書院番頭様々だ。俺たちのような御家人とは違う。さすがは旗本。上様のお側に仕える偉い御仁ではないか、さあさあ」

「なんだか、おまえらに言われると、からかわれているようだ。くすぐったいというより、気持ち悪い」

「いや、まことのことだ。ようやくおまえに春が来たのだ」
「いや、これからが寒くなる。立冬が過ぎたばかりだ」
どっと笑いが起こったとき、ガラリと戸が開いて、茜が入ってきた。
「おう。茜ちゃん……入れ入れ。おまえも一緒に祝ってやってくれ」
信三郎が声をかけると、茜は俯いたままで、
「長い間、お世話になりました」
と消えるような声で言った。
「はあ？　何てった？」
「逸馬様たちには、本当にお世話になりました……」
「何を言ってる。ああ、もしかして、忠吉のことを案じてるのか？　それなら遠山様が粋なお計らいをして下さった」
「……」
「北町は御金蔵の盗人は暴いたが、本当の世直し天狗党を捕らえることはできなんだ。けれど、絶対に二度と、現れることはないだろう……だから、安心して、紫源氏一座も巡業できようってな。だから、今朝、信州に向かって一座は発った」
じっと聞いていた茜は、そのことは承知していると答えた。そして、

「私……このままでは、自分が悪い人間になりそうな気がするんです……だから、皆様の前にはもう……」

辛そうに眉間を寄せた茜に、小雪がちらちらと吹きつけてきた。

逸馬はゆっくり立ち上がって、とにかく中に入れと肩をそっと抱いた。暖簾の隙間から、雪まじりの冷たい風が吹いてきた。

しんしんと、今宵の雪は積もりそうだった。

第三話　紅の露

一

藤堂逸馬は、中山道十二番目の宿場、倉賀野宿にいた。

江戸でもちらちらと小雪が舞っていたくらいだから、この宿場はさぞや雪に覆われているだろうと思っていたが、穏やかな田園地帯が広がっているせいか、温かい気がする。

倉賀野宿は日光例幣使街道と中山道の追分宿として栄え、本陣と脇本陣ふたつを擁して、街道屈指の賑わいを見せていた。

また、利根川の支流にあたる烏川の河岸には、船問屋が数十軒もあり、膨大な米や木材、煙草、などの物資を江戸に運ぶため、町に活気が溢れていた。江戸と上州、信

州を結ぶ要所だったからである。

ずらりと六十軒を超える大きな旅籠が並ぶ通りは壮観で、河岸が朝千両なら、宿場は昼千両、そして宿屋は夜千両と江戸の賑わいになぞらえられるほどだった。飯盛り女が多く、両隣の高崎や新町などに比べても、遊興の客が多かった。

追分から続く下町、中町、上町と歩いて行くと、立派な商家や豪農とおぼしき屋敷が増えてくる。黒塀と見越しの松という風情の町並みには、旅情よりも江戸に帰ってきたような心持ちにさせられた。

海鼠塀（なまこべい）の蔵が伸びる路地を入ったところに、湯屋があった。路地といっても、荷車がすれ違えるほどの幅があって、片側には一膳飯屋や居酒屋が連なっている。まだ日が高いが、夜になれば赤い提灯が並びそうな雰囲気だった。

湯屋には『阿弥陀湯』と染め抜かれた暖簾が下がっていた。閻魔（えんま）のいる阿弥陀堂が宿場にあるとかで、その名にちなんでいて、肌がちりちりするほどの熱い〝地獄湯〟が名物らしい。

逸馬は暖簾をくぐって番台の前に立った。右が男湯で左が女湯となっている。だが、大抵は、脱衣所から石榴口（ざくろぐち）を入って流し場の奥の湯船は混浴となっているのがふつうであった。

番台に座っていた老婆は、旅姿の逸馬のことを不審に思ったのか、
「お武家様。刀はここで預からせていただきます」
と嗄れた声で言った。
「ああ。よろしく頼みます。いや、旅の疲れと汗を取るのは、やはり湯が一番だ」
そう言いながら、両刀を渡した逸馬は、草鞋を脱ぐと、袴をたくし上げるようにしながら、銭を渡して中へ入った。
近在の者らしき二、三人が先客でいて、土地訛りで楽しそうに話していた。軽く会釈をして、逸馬は裸になると、湯気が籠もっている湯船に向かった。薄暗いのは江戸も同じようなものであるが、高い天井の上の方にうまく明かり窓を取っている。
「うっ……ふうう……」
江戸も大概熱い湯だが、かなりの激しさに逸馬は一気にのぼせてしまった。しばらく浸かっていると、まるで茹で蛸のように体中が真っ赤になった。
「いやあ……しかし、たまんねえな、こりゃ……寒さなんざ忘れちまう……上がったら、冷や酒をぐいっとやりてえところだ」
オッサン臭い独り言が湯船のある天井にこだました。湯から出ようとすると、
「お侍さん、どうでしょう。お背中を流しましょうか」

と声がかかった。
薄暗くてよく顔は見えないが、手拭いで頬被りをしている男だった。
「三助の巳代吉と申しやす、へえ」
卑屈そうに腰を屈めて、手にはぬか袋を持っている。三助とは、釜焚きに風呂掃除、客の背中を流すなど、色々な助けになるという意味である。
逸馬はちらりと相手を覗き込むように、
「いいねえ。流して貰おうか。こうだから旅は止められないんだよなア」
と頼むと、巳代吉と名乗った三助はあまり表情を変えることなく、
「では、失礼して」
おもむろに逸馬の背中を擦り始めた。
「あ、痛ッ」
思わず声を上げた逸馬は顔を顰めたが、巳代吉は小声で、
「これは申し訳ありません」
「なんでえ、それは」
「漁師が使う投網を使って作ったもんです。糸瓜よりも肌にいいし、垢が落ちて、血の巡りもよくなるんですよ」

「そうかい……そうだな……ま、慣れてくりゃ、なかなかいいものだな」

宿場町には実に様々な人間が出入りする。旅籠や木賃宿だけではなく、通りすがりに湯に浸かって、すぐ旅立つ者もいる。中には、人に言えぬ罪を犯して、お上の目に隠れての道中もある。そんなお尋ね者をさりげなく探して、宿場役人に報せる三助もいるが、

——この男は、自分を探しに来ている奴かどうかを確かめている。

ということを、逸馬は承知していた。

十日程前のことである。

北町奉行所に転がり込んで来た中年女が、五年前の〝あの一件〟の下手人を見たと、物凄い勢いで話しはじめた。たまさか宿直だった逸馬は、その女の相手をしてやった。

「私の名は、おときといって、あいつに娘を殺された者です」

おときという女は、年の割には化粧っけもなく皺くちゃな顔で、縋るように逸馬に言った。長年、心労を重ねたような表情だった。

「あの一件と言われても分からぬ。落ち着いて話してくれ」

逸馬が宥めると、女は今度は嚙みしめるように言った。

「覚えがありませぬか、与力様……浅草寺裏から日本堤にかけて、何人もの人が襲われて殺された……あの一件ですよ。私は忘れることなんかできません。私のたったひとりの娘は、その時に殺されたんですから……何の罪もないのに、あいつに……！」

悲痛におときが訴える事件のことは、逸馬もすぐに思い出した。自分が直に吟味をしたわけではないし、探索をしたわけでもないが、江戸市中を震撼させた凶悪な事件だったからである。

ある夏の盛りの夕暮れ、逢う魔が時に、ひとりの三度笠の男が長脇差を振り回して、次々と人を斬り倒しながらカマイタチのように駆け抜けたのだ。到底、人間とは思えぬ所行によって、ふたりを殺し、十人余りの人に怪我を負わせた。

「私は絶対、許せない……娘は毎日のように私の枕元に出て、仇を討ってくれ……地獄に落としてくれって、涙ながらに頼むんですよ。ねえ、与力様、あんな奴を生かしておいてよいのですか。どうか、どうか、捕らえて、八つ裂きにして下さいッ」

懸命に訴えるおときの姿に嘘はないと逸馬は思った。

改めて、詳しく話を聞くと、おときの親戚の者が猪牙舟の船頭をしているのだが、烏川の倉賀野河岸に行ったとき、『阿弥陀湯』に立ち寄った。そのときに見かけた三

助が、

——あの男だ。

と確信したというのだ。

「名は、巳代吉と変えているし、顔には大きな火傷の痕があったが、あれは喜六に間違いないと、親戚の船頭は……」

「そいつだという証拠はあるのかい？」

「声をかけたそうなんです。いきなり、『喜六』ってね。そしたら、そいつ、えらく慌てた様子で、用事があるからと、裏の小屋に引っ込んだらしい」

それだけのことで、〝くらがり〟に落ちた事件を、再び探索をすることはない。だが、逸馬は前々から、何となく心に引っかかっていたことがある。だから、

「一度、訪ねてみよう」

という気になったのである。

その目当ての男が背中を流している。無言のまま続けているが、逸馬のことを怪しんでいる様子はない。とはいえ、何となく普通の客ではないと感じているようであった。

「お武家様は、かなり鍛錬をなさってますねえ」
「え？」
「背中を見れば分かります。そんじょそこらの男衆とは体つきが違う」
「そうかな」
「ええ」
「この宿場には、どのような御用で？」
「なに。ちょいと野暮用でな……この宿場には綺麗な飯盛り女が沢山いるらしいじゃねえか。知り合いに色々聞いてな」
「そうですかい……女に不自由してるようには見えませんがね。あっしと違って、なかなかの男前だし」
　首を曲げて振り返ると、巳代吉は頬被りで隠している顔の火傷を、さらに隠そうとした。逸馬は気づかない素振りで、前に向き直ったが、小さな声で、
「実は腹が減ってな……どこぞに、この土地ならではの美味いものはないか」
「美味いものですか。そりゃ、人によって違いますから……」
　と言いながらも、
「ちょいと離れますが、柳瀬の渡し近くに、『闇魔』という小料理屋がありやす」

「こりゃまた恐そうな名だな。この湯が阿弥陀で、そっちは閻魔か」
「船人足が足繁く通うほどだから、美味いんでしょうよ」
「でしょうよ？」
「あっしは漬け物と干物さえあって、おまんまが食べられるだけで結構で、へえ」
それからは口をきかなかった。
再び、熱い湯に浸かったとき、逸馬は巳代吉の垢擦りが余程気持ちよかったのか、何も考えずにすうっと眠ってしまった。近所の者がざわざわと入ってきて目が覚めたが、巳代吉は他の客の背中も、せっせと洗い流していた。

二

「巳代吉さん……？　ああ、『阿弥陀湯』の三助さんねえ……そういや、巳代吉って名だったっけねえ」
小料理屋『閻魔』の女将が、そのふくぶくしい体を捻るようにして、狭い店内を歩きながら、逸馬に言った。
閻魔の顔を描いた暖簾の中には、座卓が三つばかりあるが、十五人も入ればぎゅう

ぎゅう詰めであろう。それでも、鰹出汁の匂いが店中に漂っていて、馴染みの客たちは煮物や焼き物を実に美味そうに食べていた。

逸馬の前には、烏川で獲れる鰻の甘辛煮や川海老の天麩羅が出された。肉厚の鰻には、しっかりと旨味が染みこんでいて、さくさくとした川海老にも甘味があった。小料理屋というよりも、おふくろの味である。

名物は、手打ちうどんらしいが、腰が強いから、他の客たちは鳥肉や山菜などと一緒に煮込んだのを食べている。寒い夜にはたまらない逸品であろう。

「その巳代吉さんが、この店が美味しいって？　ありがたいことだが、変な話だねえ」

「変な話？」

「だって、ろくに来たことなんかないもの、この店には」

「そうかい」

「ええ。もっとも、この店は、『阿弥陀湯』とは親戚になるから、それしか知らないんじゃないかねえ」

宿場には阿弥陀堂があるが、そこには古くから閻魔が安置されているという話を女将はした。だから、店の名もそこから取ったのだろうが、逸馬にはそんなことより

も、巳代吉のことが気になっていた。
「あの人はいつ頃から、この宿場に？」
「さあねえ……いつ頃だったかねえ……」
女将が配膳をしながら首を傾げると、荷船人足のひとりが声をかけてきた。
「奴さんなら、もう五年くらい前だな」
「五年……」
「ああ。上州の何処かの炭焼き窯で働いていたらしいのだが、怪我をした上に、煮え湯で顔をやられたとかで、流れてきたんだ。初めは人足もしたんだが、あまり腕の力もなくて役に立たねえから、『阿弥陀湯』の主人が三助として拾ってやったんだ」
「力がない？」
「あんな柔な男は見たことがねえ……とはいえ、まあ風呂焚きと背中流しは一生懸命やってるようだがな」
「そうなのか」
「真面目で評判だから居着くことができたんだろうが、暗い奴で……偏屈ってわけじゃねえが、人嫌いなんだろうな」
「人嫌い……」

「お武家さんも背中を流して貰ったんなら分かるだろう？　どっか、取っつきにくくて、あまり構うなって感じで」
「そうでもなかったがな」
逸馬は適当に返したが、まったく嘘だというわけでもなかった。どこか寂しそうな巳代吉の姿が、胸に残っていたからだ。
「では、巳代吉という男の素性は、誰も知らないのかい？」
「素性って……」
常連客も女将も、逸馬の曰くありげな言い草に、俄に訝しげな顔になった。大きな宿場とはいっても、世間は狭い。妙な噂を立てられると住みにくかろう。逸馬は不用意だったとは思ったものの、もし本当に巳代吉があの凶悪な人殺し本人であれば、適切に始末せねばならぬのだ。
「そういや、宿場の寄合や宴会にも顔を出したことは一度もねえなあ」
「うん。顔があばだからかもしれねえが、ちょっとな……」
「昔のことも、あまり触れられたくねえみたいだし」
「人前に現れるといや、背中を流すときだけだもんなア」
「それも、こっちは背中を向けるだけで、顔を見ねえから、どうもな……」

などと、客はそれぞれ話したが、つまりはろくに顔を合わせてはいないのだ。しかも、巳代吉の方が避けている節がある。

「そういや……」

と女将が思い出したように虚空を見上げた。

「いつぞや、八州廻りの人が来たことがあるんだが……江戸から逃げた咎人を追ってるとかでね……」

「――八州廻り……畠山謙之介様のことか」

「さあ、お名前までは存じ上げませんよ」

八州廻りとは、勘定奉行支配で関八州を見廻る関東取締出役のことで、治安維持や犯罪者の捕縛を任務とした。「泣く子も黙る八州様」と恐れられていて、徒党を組んでいるので、野盗も逃げ出すほどだった。

「そんときは、ずっと『阿弥陀湯』の焚き口から離れなかったと、主人が言ってたなあ、たしか……けど、代官にあれこれ聞かれたらしいよ。大人しく話したらしいけど、追ってる咎人じゃなかった」

「八州廻りが追っていたのは……？」

「何でも、小伝馬町の牢屋敷から抜け出した奴とかで」

それならば、巳代吉を追っていたわけではないと思った。

とはいえ、巳代吉が喜六かどうかは、まだ分からない。強引に引っぱって調べてもいいが、白を切られればそれまでだ。下手に動けば、逸馬に対して疑いを抱いて、こっそり逃げるやもしれぬ。

「……逃げる？」

ふいに嫌な予感がした。女将から出された手打ちうどんに、掻き揚げを混ぜて食べていたが、逸馬は箸を置いて立ち上がると、金を払って暖簾を分けた。

そのすぐ外に、原田健吾が立っていた。北町奉行所の定町廻り同心で、逸馬に私淑して、何かと手伝ってくれる奴だ。その後ろには、手練れの岡っ引・紋蔵が、若い健吾のお守りのようについている。ふたりには、この宿場まで同行させ、巳代吉を張らせていたのだ。

「藤堂様ッ――」

健吾は慌てた様子で、店から出て来たばかりの逸馬に、切羽詰まった顔で言った。

「奴を……巳代吉を見失ってしまいました」

「なんだと!?　本当か」

「私としたことが、も……申し訳ありません！」

「紋蔵、おまえまでついていて、なんだ」
狸腹を撫でるような仕草で腰を屈めると、紋蔵も恐縮したように頭を下げた。
「それが旦那。奴はどうやら、藤堂様のことを見抜いていたようでして」
「俺のことを？」
「へえ。巳代吉の奴、旦那が湯屋に入ったときから、妙だなと勘づいたようで、店の主人や女将に、『見慣れない奴だから、気をつけた方がいい』と話してたそうです」
「ふむ……」
「見慣れない奴なら、この宿場には幾らでもいる。けど、旦那がお上の者だと気づいたのは、よほど獣のような勘があるか……旦那のことを知ってたかです」
「俺のことを知ってた……」
「ですから、自分から背中を流そうと近づいて、さりげなく話して探りを入れてたんじゃないんですかねえ」
紋蔵もまた客のふりをして、湯に浸かっていたのだ。
「五年前……江戸で吟味をした折にでも、奉行所内で旦那の顔を見ていたのかもしれやせんね。それに、咎人ってのは、自分の身が危ねえとなると、途端に頭が冴えやすから」

「だから逃げた……か。あの顔だから、もしかして人違いかとも思ったのだがな」
「いや。わざと火傷をつけて、顔を変えてまで、逃げてたんですよ」
「そこまでやるかな……」
「やりますよ」
壮絶な覚悟だが、人をふたりも殺して、十数人に怪我を負わせているのだから、死罪は免れない。だから懸命に逃げているのであろうが、紋蔵に言わせれば、
——往生際の悪い奴。
に他ならない。
「で、逃げた先に心当たりはあるのか。紋蔵、おまえさんが黙って指をくわえて見てたとは思えないがな。健吾じゃないんだから」
「あ、そんなア……傷つくなあ……」
健吾はふてくされたように口を尖らせたが、紋蔵は逸馬の言うとおり、あたりは既につけていた。逸馬が来る前に、色々と巳代吉の周辺を調べていたからだ。
「誰か、馴染みの女郎でもいるのかい？」
「そうじゃありゃあせん。奴は徹底して、誰とも会っておりやせん。それほど、お上の目から隠れたかったんでしょうよ」

「じゃ、何処に行ったと？」
「へえ。まあ、付いて来て下せえ」
紋蔵が逸馬を導くように案内を始めると、健吾はますます不機嫌な顔になって、
「おい、紋蔵。おまえは俺に言わないで、先に藤堂様に教えるのか」
「半人前は何をするか分からないもんで、へえ」
「なッ……！」
むかついて摑みかかる真似をする健吾の背中を、逸馬がからかうように叩くと、冷たい夜風が吹いてきた。

三

その頃、江戸の『一風堂』にも、筑波おろしのような強い風が吹きつけていた。ガタガタと建て付けの悪い障子戸が揺れて、壊れそうである。
離れ座敷から廊下に出て来た茜が、夜風を受けながら、傾いた雨戸を直していると、
「これこれ、女がそんなはしたない姿で、寝間を出るものではない」

と仙人こと宮宅又兵衛が、よろよろと奥座敷から歩いて来た。襦袢のままの茜に、仙人は照れくさそうに目を遣りながら、

「夜中とはいえ、誰が見てるかもしれぬからな。ふほっほ」

その声に、茜がさりげなく辺りを見廻すと、ガサガサと植え込みが揺れた。風のせいではない。明らかに何者かが、潜んでいるようだった。

「先生……中に……」

「大丈夫、大丈夫。おそらく夜になったら出て来るイタチかムササビであろう」

「……」

鋭い目になって闇を睨みつける茜の手を、仙人はふいに握って、

「のう、茜……わしゃ……わしゃ、おまえのことが好きじゃ」

「せ、先生……？」

「年寄りの冷や水と言われてもな、この胸の高まりは、どうしようもないのじゃ」

「……」

「考えてみれば、ここには、おまえと儂だけじゃ。傍から見れば親娘……いや、爺さんと孫娘じゃろうて。じゃがな、儂はおまえがスウスウと寝息を立てて眠っている汚れのない顔を見ていると、なんか、こう強く抱きしめたくなるのじゃよ」

嗄れ声ながら滔々と言いつつ、障子戸を閉めると、仙人は茜の手を握り締めたまま、転がり込むように座敷に入った。茜は戸惑いを隠しきれず、たまらず腕をねじ上げようとしたが、仙人はするりとかわして、そのまま膝を崩して床に押し倒した。

老人ではあるが、元は武士である。普段、よたよた歩いたり、惚けたことを呟いたりしているのが嘘のように、俊敏で鋭い動きであった。

「――シッ」

仙人は茜の耳元に囁いた。

「しばらく、こうしておいてくれ……大丈夫。わしゃ何もせんにんじゃ……むふふ……表にいる連中が呆れ果てて帰るまでの辛抱じゃて……」

その優しい声に、茜の体から急に力が抜けた。仙人の温もりだけが伝わってくる。どのくらいその姿勢のままいたか――。

仙人はゆっくりと起き上がると、いつものように飄然とした顔で、

「すまんのう……まあ、ちょっとくらい役得じゃったわい」

と誤魔化し笑いしてから、穏やかな目のまま、茜に向き直った。そして、傍らにあった丹前をかけてやりながら、

「何を悩んでおる、茜……」

「え？」
「逸馬も信三郎も心配しておる。おまえが元は鳥居耀蔵の密偵で、血の繋がりもあることは、儂らは承知しておる。じゃが、そのことはもう忘れなさい。忘れて、女師匠として、子供たちのために働くのじゃ」
いつも真摯に向き合ってくれる仙人の姿に、茜は本当の祖父のように感じて、思わず込み上げてくるものがあったが、
「違うんです……私は……」
と少し声を詰まらせて、言葉が途切れた。
「どうした。儂にも言えぬことか？」
「……」
「分かっておる……おまえは、逸馬に惚れているのじゃろう。だが、奴には、公事師の真琴さんがおる」
「！　……」
「叶わぬ恋だから、いっそのこと遠くに行きたい。別の人生を探したい。そう思う気持ちは分からぬではない。この儂だって、若い頃はあった。惚れた女のひとりやふたり、おった。じゃが、学問のために諦めた恋もある」

しずかに目を閉じた仙人は、誰かを思い出したかのように、

「――春やいつ枝に分かれて散る木の葉、それも時雨（しぐれ）は紅の露……」

と呟いた。

「あい、いや、これは恋の歌ではない。昔の偉い侍が作ったものじゃ。戦に明け暮れる中で、友との別れを覚悟、死ぬ覚悟を秘めたものじゃろう……だが、その奥には、惚れた女の顔が浮かんだのやもしれぬ」

仙人の皺だらけの顔に、仄（ほの）かな紅色が浮かんだように見えた。

「好き合うた女との間に……子もできた……だが、今はどこでどう暮らしているかも分からぬ。じゃがな、それもまた人生じゃ」

「……」

「おまえはまだ若い。色々と悩み苦しめばよい。苦しいからというて、逃げては終（しま）いじゃぞ……何処へ逃げようと、おまえの身だけはついてくる……自分からは逃れられぬのじゃ」

「分かっています。でも……」

「おまえが江戸を離れられるのは、本当に逸馬のことを絶ち切ったときじゃ……とは言うものの、逸馬を諦めることはあるまい。儂はそう思うがな」

「――私は真琴さんの……あの天真爛漫さには敵いません」
「人と比べるでない」
「……」
「儂はおまえの人を疑わぬ素直さが好きじゃ。その心が、鳥居の嘘を見抜いたのじゃ」
切々と語り、愛おしげな目で見る仙人の表情に、茜は深々と一礼をした。
その表には――。
植え込みの陰から、様子を窺う朱雀の姿があった。闇に溶けそうな黒い着流しに、やはり黒い絹の袖無し羽織を纏っている。
「やはり、おまえか、朱雀……」
近くの闇から、低い声がかかった。
朱雀は声の方を振り返りながら、腰の小太刀に手を当てたが、殺気はさほどないので、鯉口は切らなかった。
「俺だよ……」
ふらり現れたのは、信三郎だった。
「また会ったな……女だてらに、そんなものを振り回すんじゃねえ」

「……」

「その顔は俺の身元も知ってるようだな。鳥居が気がかりでしょうがねえ、藤堂逸馬とは竹馬の友だ。ここ『一風堂』で兄弟みたいに育った。言っておくが、仙人……いや宮宅又兵衛先生は、おまえたちが思っているような人間ではない」

「……」

「天下をひっくり返そうだの、幕府に楯突くだの、微塵も考えてない。だからこそ、俺たちも役人になった。ああ、人の役に立つ人間になれと教えられてな」

「それも、まやかし」

「まやかし？」

「謀叛を企てるために、幕府の中に入り込んでいるだけだ」

「よくそんなことを言うな。おまえたちこそ、鳥居の幻術に操られてる。そのことに気づかないのか、バカ」

「！　……」

「茜を見ても分かるだろうが。仙人の人柄に惚れ、信頼し、ふつうの女になった」

「あれは裏切り者だ」

「だったら、おまえも裏切れ。鳥居耀蔵なんぞを信じていると、ろくな死に方をしね

えぞ。おまえも女のようだが、人並みの暮らしをするのが一番だ」
「黙れ」
静かに言うと鯉口を切った。
「ふん。すぐ、それだ。気に入らない奴は斬る。てめえと違う考えの奴は葬る。それが鳥居の正体だ。それでよいのか」
小太刀を抜き払った朱雀に、信三郎は敵意を見せないまま、
「俺はおまえを斬りたくはない。なぜ斬らねばならぬのだ」
朱雀は猫のように身を屈めると、足音も立てずに間合いを取って、次の瞬間、ひらりと飛んで小太刀を打ちつけてきた。
――シュッ。
鋭く空を切る音がした。
だが、信三郎は微動だにしなかった。避けられなかったからではない。避けなかったのだ。そして、おもむろに背後に飛んで構えている朱雀を振り返った。
信三郎の首筋に、わずかに血が滲んだが、不思議と痛みはない。それを掌で拭った信三郎は朱雀に微笑みかけて、
「どうして斬らなかった。容易に仕留められたはずだぞ」

「……おまえこそ、どうして避けなかった」
「斬らぬ、と思ったからだ」
「！　……」
「な？　やはり、おまえもまだ人の血が通っている。どうだ、どうせなら仙人の教えを受けてみぬか、茜のように」
「甘い。次は斬る」
小太刀の切っ先を向けたまま、後ずさりをした朱雀は、そのまま闇に姿を消した。
「……洒落た着物でも着れば、なかなかいい女だと思うがな」
苦笑した信三郎は、真っ暗になった闇をじっと見続けていた。

四

「ここですよ、藤堂様」
紋蔵が案内してきたのは、烏川を見下ろせる高台の森であった。
この一帯はその昔、秩父三郎高俊という武将が倉賀野氏と名乗って御館（みたち）を造ったところである。後に金井淡路守という戦国武将が入城したものの、秀吉に敗れて、城も

滅んだ。そのせいか、冬だというのに鬱蒼と繁ったままの樹木が、風に泣いているように聞こえる。

その一角に道祖神を祀る祠があった。ふつうは道端にあるもので、昔はここも人が通る道があったということを物語っている。宿場には、宿場を大火事から救った北向道祖神があるが、この道祖神もその弟で、火伏せの神として崇められており、そのため山火事がないという。

祠の軒下にある注連縄を、ためらいもなく紋蔵が引くと、ガガッと音を立てて、祠がずれた。そして現れたのは、地中に繋がる緩やかな石段だった。

「ここは……？」

逸馬が訊くと、紋蔵が答えた。

「その昔、城だった頃、烏川への抜け道があったようですぜ」

「巳代吉がここにいるというのか？」

「へえ。今は川まで繋がっておりやせん。奥が洞窟のようになっていて、隠れられるようになっているんです」

「どうして、ここに巳代吉は……」

「江戸から逃げて来たとき、誰かから噂を聞いて、たまさか見つけたんでしょう。こ

の中に数日潜むために、食い物や水まで置いてあるから、大したタマですよ」
「だとして紋蔵……おまえは、どうして、このことを知ったのだ」
「簡単ですよ。奴が荷船人足になる前には、巳代吉らしき奴がこの辺りをうろついていたって、宿場の者から小耳に挟みやしてね。それに、この祠……何となく気になりやした」
「長年の岡っ引の勘てやつかい」
「そんなところで」
蠟燭の灯りだけを頼りに石段を下りていくと、意外と深い洞窟だったが、鉱山や石切場のように息苦しく感じた。
「大丈夫ですか、これ……」
崩れないのかと心配げな健吾に、逸馬は残るように命じて、祠の表で待たせた。
ぽつりぽつりと水が垂れてくる中を、踏みしめるように進むと、奥の方で獣のような荒い息が聞こえた。
「巳代吉かい？」
逸馬は優しく声をかけた。
「だったら、こんな所に潜んでないで、話を聞かせて貰えねえかな」

「……」

「聞こえるんだろう？」

荒い息だけが続いている。追いつめられて自刃するのではないかと、逸馬は気を配った。たとえ死罪が待っている男であろうとも、生け捕りにせねばならない。それが町方としての務めだ。

もっとも本来ならば、代官や宿場役人、あるいは八州廻りを通して行わないと、縄張り違いゆえ越権と見なされる。捕り物そのものが〝無効〟になることもある。だからこそ、逸馬は、巳代吉が自ら名乗り出ることを望んでいたのだ。

「そこにいるのであろう、巳代吉……いや、喜六じゃねえのか？」

カチリと匕首（あいくち）を抜き払う音がした。

「待て、早まるなッ。おふくろさんは、おまえの帰りを待ってるんだぜ」

逸馬の声が闇の中にこだまして、その後、しんと静かになった。

「察してのとおり、俺は北町の吟味与力だ。おまえを取り調べてはおらぬが、此度、ここへ来る前に、ちょいとばかり探索もした」

紋蔵が灯りを掲げながら進むのに合わせて、逸馬もゆっくりと歩きながら、

「おまえが喜六なら、江戸で待ってるおっ母さんのためにも帰ってやったらどうだ

い。一人暮らしで寂しい思いをしてたぜ」
「う、嘘だ……」
弱々しく震えた声が返ってきた。
「本当だ。俺はちゃんと会ってきたんだ。少し背は曲がっちゃいるが、顔の丸っこい愛嬌のあるおふくろさんじゃねえか」
「……」
「おまえは殺してねえ。人殺しなんかしてねえって、無実を信じてた」
「出鱈目を言うな。俺を逃がしたのは、おふくろだ」
「そりゃ、どんな息子でも、自分が腹を痛めた子は可愛い。だから、逃がしたんじゃねえのか。おまえに生きて欲しくて」
「……」
「さあ、こっちへ出て来い」
「いやだ……せっかく、おふくろが逃がしてくれたんだ。捕まってなるもんか……俺は何もやっちゃいねえ……殺しなんざしてねえんだ。だから、だから俺ア！」
悲痛に叫ぶ喜六の声を聞いて、逸馬は何度も頷いた。そして、穏やかな声で、
「分かってるよ……俺もそう思ったから、もう一度、吟味をしたくて、おまえを探し

ていたんだ。本当だ」
「し……信じられるか」
「お上を疑う気持ちは分かるが、俺のことは信じてくれ」
「……」
「俺も元は町人だ、おまえと同じな。だから、与力や同心の言葉なんぞ、ぜんぶ裏があると思いたくなるのも分かるつもりだ」
紋蔵の掲げる蠟燭の灯りが、膝を抱えるようにしてしゃがんでいる喜六の姿を浮かび上がらせた。思わず身を竦める喜六に、逸馬は穏やかな声で続けた。
「やってねえと言うなら、もう一度、きちんと聞こうじゃねえか。なあ、自身番から番人の目を盗んで、逃げ出したことを咎めることもしねえ。一から、吟味をやり直そうじゃないか」
「ほ、本当か……」
「嘘は言わない」
だが、返事は戻って来なかった。
「分かった……だったら、俺がおまえを信じる。明日の朝、七つ、柳瀬渡しの近くの観音寺で待っている。俺と一緒に江戸に行こう」

「……」

「それで来なければ……おまえは一生、追われる身のままだぞ。一晩、ゆっくりと考えてみるがいい。よいな」

逸馬はしっかりとした口調でそう言うと、

「紋蔵、行くぞ」

踵を返して、すぐさま出口に向かった。釈然としない顔のまま追った紋蔵は、洞窟の表に出るなり訊いた。

「いいんですかい、旦那。せっかく追いつめたのに」

「――いいんだ」

「あっしが張ってやしょうか」

「いや。奴を信じてみよう。それで来れば、喜六の言い分も、信じてやれそうな気がするんだ、俺もな……おや？」

逸馬は怪訝に辺りを見廻した。

「まったく、健吾の野郎。待ってろと言ったのに、我慢の足らねえ野郎だ」

しばらく待ったが、帰って来ない。

街道の方へ戻る小径で、逸馬と紋蔵は、街道の方から駆けて来る健吾に出会った。

急いで来たのであろう、息が上がっている。
「小便でもしてたか、健吾」
「あ、いえ、そうではありません。妙な奴がいたもので……」
「妙な奴？」
「俺たちを尾けていたようなんです。俺が誰何すると逃げたので……」
「追ったのか」
「はい。地廻りのやくざ者のようでしたが、腰に十手を差していたので、二足の草鞋って奴でしょう……途中で姿を見失いました」
「二足の草鞋ねえ……」
紋蔵が自分の十手を握り締めながら、
「この宿場で十手取り縄を任されてるのは、〝追分の為五郎〟だろうよ」
「追分の……？」
聞き返す逸馬に、紋蔵は歩きながら、
「元は関取だったらしい。追分の常夜灯を寄進した雷電為右衛門にあやかって、その名がついたが、ちょいと探りを入れてみましょうか」
「うむ……俺の動きを察して、喜六を捕らえるつもりかもしれぬ」

逸馬は洞窟の中での話をして、
「健吾、おまえは喜六のことを見張って、守ってやれ」
「えっ、この寒空の中をですか……」
「文句の多い奴だな。だったら、俺が戻る」
「あ、いえ、それはなりませぬ。では、私が、私が……」
すたこらと小径を高台に戻る健吾を、逸馬は呆れ顔で見送っていた。
その夜——。
思いがけず、雪がちらちら降ってきた。

五

観音寺の本堂では、修行僧らが暗いうちから修行をしていた。
読経の響きが、深閑とした暗い空の中に轟いていた。まだ降り止まぬ雪のせいで、余計、人里から隔てられたように感じられた。
逸馬は伽藍の裏手にある庫裏を借りて、喜六を待っていた。
来るか来ないかは、賭だった。

事件の真相を探りたいと思ってはいたが、当人が逃げ廻る道を選ぶのであれば、強引に捕らえねばならぬとも考えた。だが、本音は、喜六という人間を助けたいのだ。

――助けようとしている者なら、刺される覚悟でやれ。

遠山にはそう言われた。吟味をしていないから、お白洲で結審したわけではない。喜六を捕らえて、本当に辻斬りまがいの殺しをしたかどうか、事実と証拠をつき合わせながら裁かない限り、罪は確定しない。

だが、五年前から、喜六は逃げ回っている。捕らえられれば問答無用で処刑が待っているからであろう。しかし、殺しの疑いがあるだけで、決まっているわけではない。筆頭与力は、

「自分たちは咎人を捕らえて裁くのであって、庇うのではない。ましてや逃げ廻っている奴に同情の余地はない」

と断じているが、逸馬にはそうとも思えなかった。何も悪いことをしていなくても、逃げなければならぬこともあろう。物凄い火傷で顔を隠してまで逃げた、喜六という男の真意が知りたかった。

読経がやんだが、雪は降り続いている。

雲のせいで暗いままだが、微かに東の空が白くなった。山門の下まで出て見たが、

喜六の姿が現れる気配はない。

「ダメだったか……」

代わりに駆けつけて来たのが、紋蔵だった。年甲斐もなく懸命に走っている。思わず身を乗り出した逸馬に、

「だ、旦那ア！　た、大変だア！」

と縋るように言った。叫んだつもりだろうが、かろうじて洩れた嗄れ声である。

「どうした。喜六に何かあったか」

「と、とにかく、急いで……」

紋蔵が元来た道を戻ると、丁度、日光街道と中山道の追分の辻あたりで、人が怒鳴り合う声が響いていた。同時に激しく刃を打ち合って火花が飛んだ。

やくざ者数人に囲まれた喜六を庇って、健吾が屁っ放り腰ながら闘っているのだ。長脇差で斬りかかってくるやくざ者に、体当たりするような無茶振り剣法を披露している。相手も大した腕ではないからよいものの、下手をすれば背中から斬られているところだ。

「待て待て！」

猛然と駆け寄った逸馬は、斬りかかってくるやくざ者を小手投げや袖絡み、霞み取

りなどの柔術で投げ飛ばし、一見して親分だと分かる虎髭面の男に鋭く抜き払った刀の切っ先を突きつけた。喉元にヒタッと触れたので、微塵も動けない。
「追分の為五郎か」
頭ひとつデカい為五郎は鋭い目つきで、逸馬を見下ろした。
「なんだ、てめえは」
「何故、喜六を狙う？」
「知るけえッ。江戸の町方がうろついてるんで、これで問い質したら、そっちから斬りかかってきたんだ、ばか野郎」
右手の十手を振り上げようとしたが、腰の辺りで止めた。
「言い訳無用。俺は北町奉行所与力、藤堂逸馬。喜六を斬ろうとした訳を聞こうか」
逸馬の言い様は、まるで為五郎の意図を知っているかのようだった。
「さあ言え。何か訳があるのであろう？　でないと、こんな朝っぱらから、やくざ者がうろついてるはずがない」
「そのとおりですぜ、藤堂様」
と言ったのは紋蔵である。
「俺はずっと、こいつらの一家を張ってたんでさ。そしたら、子分の数を集めて、ぞ

ろぞろと、まるで〝出入り〟でもするかのように意気込んで、喜六が来るのを待ち伏せしてやがったんだ」

逸馬たちの動きを察知して、先手を打って殺そうとしたのは見え見えだ。

「なあ、為五郎……なぜだ。言えば、その命だけは取らねえよ」

「ま、町方が、そんな脅しをして……いいのか。俺は……十手持ちとして……お尋ね者のそいつを……喜六を捕らえようとしただけだ」

「そうかい。だったら、江戸北町奉行所の与力様が来たのだ。帰っていいぜ」

紋蔵が吐き捨てるように言うと、為五郎は鋭く睨みつけて、

「ここは……江戸の町方の縄張りじゃねえ」

「安心しな。奉行同士で話はついてる」

嘘も方便。逸馬は適当にあしらおうとしたが、為五郎もなかなかしぶとい奴とみえて、素直に引っ込もうとしない。どうでも、自分でしょっ引こうという腹づもりだ。

しかし、逸馬はズイと為五郎に寄って、

「そんなに連れて行きたきゃ、俺を殺して行くんだな」

と険しい目で凄むと、為五郎は抗って、長脇差を抜き払おうとした。逸馬はその腕を摑むと、そのままねじって地面に叩き伏せ、バキッと足で踏み折った。

「ぎゃああ！」

元関取の為五郎の材木のような太い腕が、力無くぶらりとなった。のたうちまわる為五郎の姿を見て、子分たちは腰砕けになって遠巻きに眺めていた。

「て、てめえ……知らねえぞ……ここは八州様の縄張りだ……町方与力がなんだ……知らねえぞ、この野郎……」

八州廻りとの繋がりの深さを強調する言い草で、しぶとく睨み上げる為五郎を、紋蔵は苛立ったように蹴って、

「とっとと行きやしょう」

と逸馬に言った。健吾は子分たちを牽制しつつ後ずさりをしたが、誰も追いかけてきそうもない。

雪が少し積もった道を、逸馬は喜六の手を引いて、その場からどんどん離れた。健吾と紋蔵も黙ったまま、その後を追った。

丸一日歩いて、鴻巣宿についた時は、日がとっぷりと暮れていた。

十三里を超える道程ゆえ、かなりの急ぎ足だった。だが、一刻も早く倉賀野から離れた方がよいというのが、逸馬の思いだった。喜六が逃げ廻っていた裏には、為五郎が関わっていると感じていたからである。

鴻巣は中山道の七番目の宿場だが、松山に至る吉見道、忍藩に向かう忍道などの中継にあたる問屋場が多く、また将軍家の鷹狩り場であったがため、倉賀野にも増して賑わいのある宿場だった。

鴻巣雛といえば、江戸にも沢山出廻っている特産物で、誰もが知っている可愛らしいものだが、ずらりと並ぶ旅籠の表にも、招き猫のように鎮座していた。

客引きに誘われるままに、逸馬たちは宿場外れの宿屋に入った。

道中、ろくに話すこともなかった喜六だが、

「疲れた……湯に入りてえ」

と言ったので、逸馬も一緒に入った。健吾と紋蔵は一休みしながらも、追っ手が来ないか見張っていた。為五郎の執念深さには、何か曰くがありそうだったからである。

宿の湯は温泉ではなく、檜の湯船に沸かした湯を流し入れたものだが、疲労した体の節々を揉みしだくように温かかった。

「裸の付きあいは二度目だな」

逸馬は背中を向けながら、喜六に言った。それが当たり前のように背中を流しはじめる喜六に、改めて訊いた。

「追分の為五郎に狙われる訳でもあるのかい？」
「……」
「あるんだな？」
「へえ……」
「吟味に関わるから、洗いざらい話してくれないか。俺から見れば、おまえにはまだ殺しの疑いがあるだけだ。咎人とは、罪を犯したとはっきりした奴のことだ」
今度は投網ではなく、糸瓜で擦りながら、喜六は訥々と話しはじめた。
「あれは、ある夏の夕暮れ……俺は、許嫁だった女のために、ある職人に頼んでた簪を受け取りに行った帰りのことでした」
「許嫁がいたのか」
「おさよという、浅草にある小さな紙問屋の娘でした。一月程後に祝言を挙げることにしてました。へえ、俺もその頃は、蔵前の札差に奉公する手代でした」
「で、簪を受け取った帰りに？」
「あの一件に出くわしたんです。浅草寺裏から近道をして、おさよの店に行こうとしていたときです……ぎゃあッと物凄い悲鳴がしたので、声のする方へ行ってみると、既に人がふたり斬り殺されていた。ひとりはまだ若い町娘で、もうひとりは商家の番頭風の

男でした」

喜六はそこで一息つくとさらに続けた。

「……他の人々にも斬りつける三度笠の男を見て、俺も殺されるのかと思って思わず、灯籠に身を隠したのですが……目が合ってしまいました。ほんの一瞬のことですが、顔だけはしっかり覚えています」

「それが……」

「はい。あの追分の為五郎だったのです」

「！　……」

逸馬は思わず息を飲んだ。

「ですが、その時は何処の誰兵衛か分かるはずもありません。とにかく俺は、その男が去ってから、倒れている人の所へ駆け寄りました。商人の方には、腹に匕首が突き立ったままでした……俺はどうしてよいか分からず、おろおろしていると、近くの自身番の番人が駆けつけて来ました」

「そいつに疑われたのか」

「疑うってもんじゃねえ。すぐに俺を捕らえようとしたんだ。そしたら、怪我をして倒れている奴が、こともあろうに……俺にやられたと指さして……このままじゃマズ

い。捕まったら、下手人にされちまう……そう思って、その場は逃げたんです」

その直後、お尋ね者として町奉行から探索がかかり、人相書が町のあちこちに貼り出された。もう、喜六は自分の家にも許嫁のもとにも行けないと思ったという。近くまで潜んで様子を見ていたが、岡っ引や下っ引がうろついている様子が手に取るように分かった。

「だから、だから俺は……おさよに会うこともできずに……」

「だが、おふくろさんの所にだけは戻った」

「真夜中にこっそり……でも、おふくろは、『おまえが殺ったなんて思ってねえ。だけど、誰も信じちゃくれまい。私も番屋に引っぱられて酷い目に遭った』そう泣きながら、当面の金をくれて追い出されたんだ。何としても生きろ、生き続けろ……そのうち、本当の下手人が捕まるからって」

だが、なぜか日が経つごとに、喜六への探索の手は厳しさが増すばかりで、意地でも捕らえて処刑する雰囲気があった。町方のみならず、町人たちの間にも、

――非道い奴だ。八つ裂きにしてもまだ足らねえ。

と口々に言う者が多くなった。もし、誰かに見つかれば、その場で私刑にあうかもしれないという恐怖心が湧き起こった。同時に、ほんの一瞬だけ見た下手人のことが

憎らしく思われてきた。

「だから、俺は……たった一通だけ、文をおさよに出してからは一切……自分を消して、変えて……本当の下手人を探し続けた。こんな顔にしたのも……追っ手の目から逃れるため……そして、一生かかってでも下手人を探し出して、磔にしたいという覚悟でした」

「その思い……何と言ってよいか……」

逸馬は自分が犯した過ちのように、

「すまねえ。町方がしっかりしてりゃ、こんなことには……」

「……」

「だが、どうして追分の為五郎は、そんなバカなことをしたんだろうな。辻斬りなんぞして、何になるんだ？」

「そんなこと知りやせんよッ。頭がおかしいんでしょうよ。旦那も見たでしょ、あの悪党ヅラを。奴は十手持ちをしながら、堅気の連中を脅して、金を吸い上げてんだ」

「うむ……」

「長年かけて見つけたんだ……俺は許せねえ……絶対に奴を……！」

怒りに震える喜六の手に思わず力が入った。

「いてて……背中が痛えぜ……だが、喜六。おまえの心の痛み、その火傷の痛み……きちんと始末をつけてやる。だから、決して自棄を起こしちゃならねえよ」
「へえ……」
「で……おさよさんて人は、どうした。簪を上げたかった許婚とやらは」
「……」
「待っていてくれてんじゃないのかい」
「それは……もういいんです。ぜんぶ、終わっちまったことなんです」
「終わっちまった……？」
喜六の心の奥を考えると、逸馬にしてやれることは、無実を明らかにして、元の暮らしに戻してやることだ。そう心に誓ったが、その思いを冷ややかに嘲笑うように、粉雪がまた舞いはじめた。

六

その夜、信三郎は馬喰町四丁目の『叶屋』に来ていた。真琴の公事宿である。
番頭の梅吉が茶を差し出すと、信三郎はアッと目を凝らした。

「こいつは縁起がいい。ハハ、茶柱が立ってる」
「そうですか。大の親友が大変なときによくもまあ……」
と不満げに返した梅吉は、奥から資料を抱えて出て来た真琴を振り返った。
「いいのよ梅吉さん。この人はこういうガサツな人ですから。逸馬様とは違うんです」
「どういう意味だよ。俺は逸馬の心配をしてるから、茶柱を……」
喜んでいるのではないかと言い張った。
苦笑しながら帳場に座った梅吉は、まるで商人のように算盤を弾きはじめた。その姿がパチ助に似ていたので、信三郎もニンマリ笑い返した。
「なんですか？」
「別に」
「ところで、真琴さん。逸馬が探索してる五年前の一件、何か分かったことがあるか。パチ助にも頼んだのだが、あいつはあてにならんのだ」
「評定所には何も？」
「吟味前のことだからな、まだ町奉行所預かりだ。下手人が分かっているから、〝くらがり〟に落ちたわけではないが、評定所には上がってきていないのだ」

「私も直に事件に関わったわけじゃありませんけどね。これ……」

真琴が差し出した一綴りの冊子には、その事件について書かれた瓦版と、殺されたふたりについてのことが記されていた。実は梅吉が書き留めていたのだ。

吟味筋については、町方が探索をしているが、殺されたとなると賠償のことも浮かび上がってくる。つまり、現代で言えば、遺族が〝慰謝料〟を犯人に請求する裁判を起こすことである。こういうときに、金銭で片を付けることはよくあった。

殺されたふたりのうち、娘を殺されたおときという女は、金なんかいらないと訴え出なかったが、殺された商人の方と怪我をした何人かは、慰謝料を求める出入筋の訴えを、月番だった南町奉行所に起こしている。その訴状などの手続きをしたのが梅吉だった。

「たまたま商人の知り合いだった、町名主に頼まれてやったのですがね……まあ、こっちとしては、まだ下手人がはっきりしないうちには訴えを起こしようがないと断ったのですが……」

と梅吉は前置きをして、

「それでも、特に商人側が必死に訴えるので、検討はしてみたんです」

「その商人てのは……」

「逸馬様から聞いてませんか」
「はっきりとはな」
「日本橋茅場町の『美濃屋』という両替商の番頭さんです。あまり大きなお店ではありませんが、すぐそこの馬喰町二丁目の郡代屋敷にも出入りしていたとかで、羽振りはよい方でした」
郡代屋敷といっても、今は関東郡代はおらず、勘定奉行の支配のもと代官持ちとなっている。とはいえ、関東八州に睨みをきかす八州廻りとも深い関わりがあるので、勘定奉行御用達のような両替商といってもよかった。
「番頭の名は？」
「ここに書かれているのは……」
真琴は冊子を指して、
「金兵衛とありますね」
「まさに、金好きみたいな名だな」
「またそんな言い方を……もう仏になった方なんですよ」
「で、この金兵衛とやらの賠償を求めたのは、誰だい」
「主人の貫右衛門さんです」

「店の主人……」
「はい。これは私が昼間、訪ねて行って話を聞いてきました」
と真琴は膝を進めて、少し声を落とした。
「お奉行所には届けてなかったようですが、実は金を五百両ばかり持っていたそうです。それを取られていた……とのことなので、いわば返還を求める訴えです」
「五百両も⁉　切り餅が二十個だ。かなりの荷物だったはずだな。それを人殺しに盗まれたというわけか？」
「らしいです」
信三郎は骨が鳴るほど首を傾げて、
「なんだか、しっくりとこないな。だって、そうじゃねえか。通りすがりに次々と人を殺す奴が、金狙いとは思えねえ」
「ですねえ……」
真琴も妙ですねえと溜息をついた。そして、しばらく考えて、
「もしかして、狙いはそのお金だった。それを誤魔化すために、他の人を巻き添えにしたってこと……？」
「わざわざ、そんな目立つことをするか。それに金が狙いなら、金兵衛が持っている

ことを知ってる奴だろうから、奉行所が店に関わりある者を調べれば、必ず誰か浮かび上がってくるはずだ」

「ええ……」

「しかも、三度笠を被っていて、人を斬り倒しながら、疾風の如く逃げたとのことだから、盗みってのはどうもな。ましてや、逸馬が調べてる喜六って奴も、金兵衛とは何の関わりもなかったはずだ」

「だとしたら、信三郎さんはどう……？」

「そいつの狙いは、金兵衛の命……いのちだった」

「ええ？」

「だが、金兵衛ひとりを殺したとなると、どうしても下手人が絞られる。だが、〝通り魔〟のような者の仕業ならば、金兵衛と殺した奴の関わりが薄れる」

「……」

「五百両も奪われたなら、奉行所に届けていなかった貫右衛門の態度も気になる」

「どういうこと？」

「まあ、これは俺の考えだが……金兵衛に生きて貰ってては困る誰かが、他の者を巻き込んで殺した。そのことに、『美濃屋』の主人貫右衛門も絡んでいる。だからこ

そ、金を奪われたなどと証言した」

信三郎は険しい目になって、まるで確信に満ちた顔で言った。

「本当は、そんな大金、金兵衛さんは端から持っていなかったとでも？」

真琴も思わず身を乗り出した。

「かもしれねえってことだ……その辺りのこと、『美濃屋』に探りを入れてみてくれないかな、真琴さん」

「ええ。で、信三郎さんは？」

「もっと裏がある気がする。実は八州廻り……つまり、関東取締出役の畠山様に、評定所ではちょっとした疑いが出ていてな」

「疑い？」

「ここじゃ言えないが、まあ博徒がらみの不正がな……」

武蔵、相模、上野、下野、常陸、上総、下総、安房を廻る〝移動警察〟である八州廻りは、犯罪者の取り締まりが役目だが、本当の狙いは、農民の逃散を阻止するためだった。賭博に誘い込まれて、田畑の仕事を投げ出し、その挙げ句、借金をして村を離れてしまえば、年貢に支障が出る。

それゆえ、博徒のみならず、賭博を常習している者も捕縛して、厳しく処した。万

が一、間違って博徒でない者を捕らえて拷問にかけたとしても、不問にされた。だから、強引な探索をする。逆に、脛に傷を持つ者たちは、予め袖の下を渡して、見逃して貰う。

天領、大名領、旗本領が入り交じっている関八州は、いわば〝警察組織〟が複雑だったからこそ、どこにでも踏み込める八州廻りが活躍していた。だが、そのことが逆に、

――八州様にお目こぼしを貰えれば、好き勝手ができる。

ということとなり、力のある博徒やそれとつるんでいる商人や豪商などは、自分の悪さを隠し、刑罰を逃れるために金を払うことになる。八州廻りの方も、それを当然のように思い、〝お布施〟を受け取る巡廻ということになる。

「逸馬は勘がいい。そのことに気づいたら、旅先で何をしでかすか分からねえ」

「え、ええ……」

「なあ、真琴さん。あんたの愛しい人を助けるためだ。ここは正念場だぜ」

「愛しい人って、そんな……」

「今更、照れるなよ。こっちが恥ずかしくならあ」

信三郎はポンと真琴を軽く叩こうとして、胸に触れてしまった。

「あ、すまん……でも、意外と大きいんだな」
「はしたない！　怒りますよッ」
手を出してきた真琴をひょいと避けて、信三郎は店の外へ行きながら、
「ほんと。このきつい女のどこがいいのかねえ、逸馬の野郎は」
と冬枯れの道を駆け出した。

七

「宿改めである。神妙にしておれば、危害は加えぬ」
八州廻りが鴻巣の旅籠に乗りこんで来たのは、翌未明であった。
叩き起こされた宿の主人は、泊まっている客よりも八州廻りの役人に気を配っているようだった。下手に逆らうと、すぐさま斬り捨てられるかもしれないという恐怖から、揉み手で命令に従っていた。
役人が二階の奥の部屋の襖を蹴るような勢いで開けたとき、そこには逸馬がひとりで布団の中で眠っていた。
「おい、起きろ！」

「え……なんだ……？」

寝ぼけ眼を擦りながら起き上がると、目の前に笞を突き出して、

「他の者はどうした」

と、いわゆる八州様の畠山謙之介が、そのイカツイ顔で見下ろした。

「は？」

「惚けるな。おまえと一緒に、喜六なるお尋ね者が泊まっていることは、この主人が話しておるのだ」

「喜六……」

「宿帳には出鱈目な名を書いておるが、他にも若侍と岡っ引がいたはずだ」

「誰のことを言ってるのか、俺にはさっぱり分からねえな」

「貴様……町奉行所与力だと思うて、儂をなめておるのか」

廊下には、追分の為五郎が、それ見たことかという顔で控えている。こいつが八州廻りという虎の威を借る狐ということは、およそ分かっていたが、

——やはり、こういうことだったか。

と逸馬は思った。必ず追ってくる。それを見越していたから、一足先に喜六たちを鴻巣宿から発たせていたのだ。

「おいッ。ここは江戸じゃないのだ。町方が出る幕じゃないことは、おまえが一番承知しているのではないかッ。いや、町奉行の許しなんぞ出てるわけがない。さあ、おまえと一緒にいたお尋ね者はどこだ！」

八州廻りは勘定奉行支配だが、町方同心よりも身分は低い。しかし、銀磨きに紫の房の十手を持つことが許されている。手柄のある与力や同心並みの扱いである。ましてや、町方が探索権のない関八州にあっては、町方よりも偉ぶるのは当然のことだった。

「偉いのは分かりますがね、畠山さん。俺はそうやって、人を脅かしてねじ伏せるやり方が、どうでも好きになれないんですよ。こっちが元は町人だったせいかもしれねえがね」

逸馬の事情など知らないので、一瞬、えっとなった畠山だが、ならば尚更、控えろとばかりに十手を見せつけて、

「もしや貴様……お尋ね者を逃がしたのではあるまいな」

「だとしたら？」

「町方与力にあらざる所業、断じて見逃すわけにはいかぬ」

「喜六がまことのお尋ね者ならば、な」

「なんだと」
「奴は殺しなんぞしてねえ。町奉行所が人相書を出して探索していたのも、間違いかもしれねえんだ」
「ふざけるな」
「こちとら、大真面目だぜ。本当に殺したかどうか、きちんと調べるのが俺の務めだ。あんたが捕らえようが、俺が連れて行こうが、一度はお白洲で詮議を受けねばならない。だとしたら、同じことじゃないか。ここで知り合ったのも何かの縁だ。この俺に任せてくれねえか」
ポンと胸を叩いた逸馬を、畠山は苦々しい目で睨みつけ、
「半端なことを言うな。貴様は吟味方与力のくせに御定法を無視するのか」
「そうじゃない。同じ幕府の釜の飯を食ってんだ。ここは俺の顔を立ててだな……」
「黙れ！」
手にしていた十手で、畠山はいきなり逸馬の肩を打ちつけた。
「い、痛えなア……」
苦痛で眉間に皺を寄せた逸馬に、手代や手付、足軽、小者たちが一斉に躍りかかり、捕らえようとした。逸馬はとっさに足払いをかけるや、素早く立ち上がり腰投げ

や捩閻魔（ねじりえんま）などという柔術で相手を投げ飛ばしたが、畠山がズイと抜き払った刀を突き出した。

「！　……」

驚く逸馬を尻目に、小者が床の間の刀を奪い取っていた。

「おいおい。ここまでやるのか、八州廻りさんよ」

「控えろ。儂の命令は勘定奉行の命令じゃ。延（ひ）いては老中、いや上様の命令である」

「つたく、困ったお役人だぜ」

「たとえ町方役人でも、お尋ね者を逃がしたる罪は重い。神妙に縛につけ」

振り払って逃げようと思えばできない逸馬ではないが、

――ここまで依怙地（いこじ）になって捕らえに来るとは、やはり何かがある。

そう睨んだ逸馬は、座り込んで、

「そうかい、そうかい。たしかにここは、八州様が偉いや。好きにしやがれ」

とやけっぱちに吐き捨てた。

そのまま逸馬は、宿場内にある代官の出先である番屋に連れて来られた。宿場役人が交代で見張りをしており、問屋場で不正を働く者やお尋ね者や博徒を捕らえて来て

は、厳しく詮議をしていた。

宿場外れの勝願寺は浄土宗の名刹（めいさつ）だが、三つ葉葵の紋の入った瓦を掲げるほど、徳川家と縁の深い朱印地でもある。ゆえに、宿場内で不祥事があってはならぬと、他の宿場にも増して、役人たちの目は厳しかった。

番屋に集まった宿場役人たちも、逸馬が町方与力だと聞いても、

――それがどうした。

という態度で、お尋ね者の喜六を逃がしたことを責め立てた。もっとも相手は仮にも御家人である。町人や百姓を相手のように、叩いたり、拷問を加えたりはできないが、厳しく問い詰めた。

案内役となった追分の為五郎も調子に乗って、その凶悪な目つきで逸馬を睨んでいた。が、責められれば責められるほど、逸馬はある確信を抱いてきた。

でんと腰を下ろした畠山は、番人たちを追い出して、為五郎とふたりだけになった。そして、改めて、縄で縛られた逸馬の顔をまじまじと見つめ、

「なかなかの面構えをしてやがる……遠山のお奉行様に気に入られているそうだが、そんなものは、ここじゃ通じないぞ」

「能書きはいいから、きちんと取り調べるんだな」

「野郎ッ」
為五郎が土間に座っている逸馬を蹴倒そうとしたが、畠山は止めた。
「よせ、為五郎。こいつは、そんなことぐらいで音を上げる奴ではない。骨のある奴だということぐらい、儂には分かる」
「これはこれは、お褒めに与って喜んでいいのかい？」
畠山はじっと見下ろしたまま、しばらく煙管を咥えて紫煙を燻らせていたが、
「なあ、藤堂……おまえももう少し利口にならぬか」
「十分、利口なつもりだがな」
「咎人を逃がした罪で、おまえを裁くことはこの儂にだってできる。斬り捨て御免で、幕引きにだってできるんだ。後は、支配違いのお奉行同士が話し合って終いだ」
「何が言いたい」
「奴が……喜六が何を喋ったか知らぬが、てめえの命が大事ゆえな、出鱈目な作り話をしてでも、助かろうとしたんだろう。それを鵜呑みにするとは、それこそ吟味方与力として、何か足りないのではないか？」
「何を喋ったと言うんだ？」
「……」

「奴に何か喋られて、あんたが困ることでもあるのかい？」
「――言うたであろう。出鱈目を話されて迷惑千万」
見据える畠山を、逸馬は余裕の笑みさえ浮かべて見上げていた。
「残念ながら、畠山さんよ。あんたのことなんぞ、喜六は一言も言ってねえぜ」
「……」
「あいつが懸命に話してくれたのは……そこな為五郎のことだ」
「為五郎の？」
「ああ。そいつが例の殺しをやった。喜六はたまさか通りかかっただけだ。だが、自分が人殺しとしてお尋ね者になった。だから、人相をすっかり変えてまで、長い年月をかけて、為五郎を探し出した」
ぎくりと逸馬を見やった為五郎を、畠山はちらりと見た。
「だが、こいつは逆に、自分のことを探し出した喜六を、お尋ね者のまま始末しようとした。違うか、為五郎」
と逸馬が振り向くと、為五郎は知らないと言って、にんまり笑った。
「知らぬ存ぜぬ……か」
「喜六の言うことが正しいなら、その証拠を立てろ」

「その喜六だって、ろくな証拠もないまま、人殺し扱いされてきたのだ。おまえがやったと正直に吐けば、奴は助かるのだぞ」
「ばかも休み休み言え」
「――まあ、いいだろう。喜六が北町奉行所に行きさえすれば、すべては明らかになる。そうなりゃ、おまえにお白洲に来て貰わねばなるまい。証拠が欲しいと言うならば……今頃は俺の友だちが、揃えてくれているだろうよ。たとえば……」
逸馬は為五郎を睨み返して、
「両替商『美濃屋』とおまえとの繋がりとかな」
「えっ」
と声を洩らしたが、為五郎は湧き出しそうな感情を抑えて、
「知らねえな」
とだけ言った。
逸馬は鎌を掛けたわけではないが、その表情を見逃さなかった。畠山も淡々と眺めていた。
「そうか……そこまで動いていたか」
そう言ったのは畠山の方だった。

「ならば、やむを得ぬな……『美濃屋』との繋がりを消すしかあるまい」
いきなり為五郎をバッサリと斬った。声もなく為五郎は倒れ、血飛沫が番屋の中に広がった。血に濡れた刀を逸馬に向けて、
「こやつを斬ったから、やむを得ず儂もおまえを斬った……でよかろう？」
と身動きできぬ逸馬に刀を振り上げたとき、
——シュン！
空を切る音がして、グサリと畠山の腕に棒手裏剣が突き立った。
途端、戸を蹴破って入って来た黒装束が、パッと畠山に目潰しを投げた。
「何奴じゃッ」
手当たり次第に刀を振り回すのを瞬時にして、足払いで倒し、畠山の鳩尾にズンと拳を落としてから、黒装束は逸馬の縄を刃物で切った。傍らの大小の刀を渡し、無言のまま手を引いて番屋から駆け出たとき、番人たちが数人、怒声を上げながら突進してきた。
思わず、鞘ごとの刀で、番人たちの急所を打った逸馬は、黒装束に導かれるまま、河辺まで走り、すでに用意されていた小舟に飛び乗った。
誰も追って来る気配はない。

離岸して、すぐに逸馬は黒装束に声をかけた。
「危ない真似は二度とするな……そう言ったはずだがな」
「……」
「であろう、茜？」
何も答えず、俯いたままの黒装束は櫓を漕ぎ続けた。
「だが、済まぬ……助かった……」
逸馬はそう言うと、川の流れに乗る小舟の舳先を、静かに見つめていた。

八

板橋宿に着いたとき、茶店で休んでいる逸馬のもとに、紋蔵が駆けつけてきた。
「ご無事でしたか、藤堂様……鴻巣を離れた後、胸騒ぎがしやしてね」
「それより、喜六は」
「へえ。原田の旦那が、無事に奉行所まで届けやした。お尋ね者ではありますが、そのことは白紙に戻せという、藤堂様の文を内与力の坪井様にお伝えし、その身は安泰かと」

「うむ。調べはこれからだが、とりあえず……俺もほっとしたぜ」
逸馬は茶碗を置いて立ち上がると、無言のまま歩き出した。江戸とは違う方へ向かうので、紋蔵が思わず呼び止めた。
「旦那、どちらへ？」
「吟味は明日にでもするが、今日は訪ねたいところがある」
「もしや、あの……？」
「そうだ。俺なんかにゃ何もできないかもしれねえ。けど、なんとかしてやりてえんだ。でねえと、あまりにも不憫じゃないか」
「ですが……」
紋蔵は次の言葉を呑んで、
「旦那の思うとおりに、なさってみればよろしいでしょう」
と穏やかに言った。
逸馬も静かに頷いて、その場を離れようとして振り返り、
「あ、そうだ、紋蔵……おまえに調べておいて貰いたいことがある」
「何なりと」
「実は、追分の為五郎は斬られた。八州廻りの畠山にな」

「ええ!?」
「口封じだ。畠山と両替商の『美濃屋』の繋がり……何でもいい。下手人の為五郎がいなくなったんだ。このままじゃ、またぞろ喜六が無実だって証が立たねえ」
逸馬と紋蔵は別々の方へ歩き出した。

四半刻（約三十分）後――。
板橋宿の外れにある生源寺という尼寺を、逸馬は訪ねていた。男子禁制の寺だから、門を潜ることは許されない。その代わり、門前の幾つか並んでいる茶店や参拝客が休む庵があって、そこに出向いて来た尼と会うことは許された。
竹垣が美しい庵の茶室で、逸馬は前夜の小雪の名残を、茶釜の湯気越しに眺めていた。どこぞの山村の奥のような錯覚にとらわれた。
法衣を纏った悠寂と名乗る尼が来た。剃髪した頭を尼頭巾で覆っているが、目鼻立ちは美しく、不謹慎だが妙な色香があると逸馬は思った。だが、暮らしぶりは決して、優雅ではないのであろう。袖口から見える手は、苦労が染みこんだように細かった。
「藤堂様でございますか？」

声もか細かった。

「どういう御用向きでございましょうか」

「喜六……のことで」

「きろく、さん」

いつもは何事にも泰然自若として過ごしているのであろうが、さすがに目の色が変わった。だが、それも一瞬のことで、

「あの……」

「あなたと行く末を誓い合っていた喜六ですよ。あの一件があってから姿を消し……」

その後のことから、倉賀野宿であったことなどを話して、逸馬は喜六は無実だときっぱりと断じた。そして、懐から、一本の簪を差し出して見せた。

「鴻巣の旅籠で、あなたのことを聞いたんだ」

「私のこと……」

「お尋ね者にされてから、あなたにはまったく会ってないそうだな」

「……」

「何度か、家の近くまで行ったそうだが、役人がうろついているし、迷惑がかかると

思って、顔も見せずに逃げたそうだ」
「はい……」
「だが、今般、無実であろうことが、判明してきた。このとおりだ……」
逸馬は畳に額がつくまで頭を下げた。自分とは関わりのない事件とはいえ、町奉行所が誤ってお尋ね者として、長年、追い続けていたことは、明らかに町方の手落ちである。それゆえ、謝ったのだ。
「一目だけでも会ったらどうだ。そう言ったのだが、奴は……喜六は、それはだめだ。もう終いなんだと……」
「……」
「だから、これを預かって来たのだが……」
「……」
「あなたが仏門に入ったことは、風の噂に聞いていたようだがな」
悠寂は簪を受け取ると、大切そうに胸に抱いてから、そっと懐に忍ばせた。
「――文が来たのです」
おもむろに悠寂が口を開いた。
「喜六さんから一度だけ、文が届きました。あの悲惨な殺しの事件の下手人として、

追われはじめてすぐのことです」

黙って聞いている逸馬のことを、信頼しきったように悠叔は訥々と話した。

「その文には、『俺は殺しなんかしていない。信じて欲しい。だけど、捕まれば必ず、すぐ処刑されるだろう。誰も俺を庇ってはくれないだろう。だから俺は逃げる。逃げて逃げて、生涯かけてでも、下手人を探す。だから、おまえは他の幸せを摑んでくれ。誰か大切にしてくれる人と一緒になって、子供を作って、楽しい一生を過ごしてくれ』……そうありました」

「そのとおりにしなかったのは、喜六への思いが深かったからかい？」

「はい。あの人ではない所に嫁ぐなんてことは、考えもしませんでした。父や母は、たとえ喜六さんが下手人でないとしても、これだけの騒ぎになれば、もはや一緒になるのは世間体もあるから無理だと言いました」

「……」

「ですから、私はいつまでも待つ……そう決心して、嫁になんぞいかずに、いつかは喜六さんの無実が晴れて帰って来る。そう信じて待っていました。でも……」

「でも……？」

「世間というものは、父や母が言うように、甘いものではありませんでした。手当た

り次第に人殺しをするような男を婿にしようとしたのか、とか、本当は喜六を逃がして隠しているんだろう、とか、ありもしない噂が流れ……うちの商売も立ちゆかなくなり、店は潰れ、まるで悪い運がいっぺんに押し寄せたように、父は心の臓を患ってなくなり……母は元々後妻でしたから、それこそ江戸から離れ、姿を消しました」

まるで他人事のように淡々と話す悠寂のことを、逸馬は不思議そうに見ていた。人は悲しみのどん底を超えると、かように冷静になれるのかとも感じた。

「ならば尚更、喜六のことが恋しくなるんじゃないのかい？」

逸馬は同意を求めるように、悠寂を見つめて言った。長い睫が潤んでいるように見える。その奥の黒い瞳に、ほんのわずかだが仄かな光が浮かんで、

「あなた様は、心が綺麗なのですね」

「え？」

「私はまだまだ修行は足りませぬが、人を見る目は養われた気がします」

「……」

「仏門に入ってから、色々と仏に教えられました。人生は苦であり、その苦は渇愛によって成り立つ。それゆえ、その苦悩から脱するためには、八正道……つまり正しい暮らしによってのみ救われる」

「……」

「ですから私の行いが正しければ、喜六さんも救われる。そう思って生きてきました」

その決意に満ちた顔からは、還俗はできないという声が聞こえてきそうであった。

「では、あなたは、おさよ……に戻る気持ちはないのかな？」

「ありませぬ……というより、できませぬ」

「喜六は無実なのだぞ。あの日、あなたのために簪を取りに行ったままの喜六が帰って来れば、思いを遂げられるんじゃねえのかい」

「私の身はもう、御仏に捧げました」

「！　……」

逸馬は深い溜息をついてから、喜六とおさよというふたりが、離ればなれになっていても同じような思いを抱いていたことを痛切に感じた。だが、それは思いを遂げるのではなく、お終いにするということで、気持ちを整理したのである。

それでも、逸馬は納得できなかった。惚れあった者同士が、己のせいではなく縁を切られたにも拘わらず、熱い思いを断ち切ることができるものかと。

「断ち切ったのではありませぬ」

悠寂は、まるで逸馬の考えを見抜いたように言った。
「お互いにこれからの生涯を一生懸命生きれば、極楽浄土では一緒になれるかもしれません。私は……私はそう信じています」
これでは、気持ちの上での〝心中〟ではないか。逸馬はそう感じた。
――そうか、心中、か……。
喜六のことは死んだものと諦めている。そう思ったとき、逸馬の胸の内側から、何かが開いた気がした。
「されば悠寂様……」
逸馬は正座をし直して、拝むように言った。
「最後の最後に、ひとつだけ願いを聞いてはくれまいか。俺が今、一番救いたい、喜六のためだ。どうか、このとおりだ」
悠寂は戸惑いの色を浮かべて、精悍な逸馬の顔をじっと見つめていた。

九

江戸北町奉行所の吟味部屋の小さな白洲に、喜六が座らされたのは、翌日の朝のこ

とである。前日にも増して寒さが厳しく、玄関前の石畳にも氷が張っているほどだった。

吟味部屋の白洲が一段と冷たく感じられた。筵が敷かれているが、すぐに足が痺れるようだった。

壇上の吟味方与力の席にも、重苦しい雰囲気を散らすほどの、隙間風が吹き込んできていた。陪席で立ち会っている坪井も、不機嫌に眉間に皺を寄せている。

「寒いな、喜六……だが、おまえが今まで、人知れず辛い思いをしてきたことに比べれば、大したことではないかもしれぬな」

逸馬が声をかけると、喜六は深々と頭を下げて、

「お手数、おかけして申し訳ありません」

「謝らなきゃいけないのは、こっちの方だ。五年もの間、酷い目に遭わせた。これは町奉行所の過ちだ。詫びても詫び尽くすことができようはないが、済まなかった」

「もういいですよ、藤堂様……」

喜六の顔にも、どこか穏やかな表情が広がっている。

「さて……」

と逸馬は威儀を正して、白洲の喜六を見下ろして、

「おまえの身に覚えのない一件につき、辛いだろうが、答えて貰いたいことがある」
「なんなりと」
「あの事件で亡くなった者はふたりいる。そのいずれもと、おまえは関わりのないことは既に判明しておるが……この五年で探し当てた本当の下手人の名は何と申す」
「はい。追分の為五郎といいます」
「そいつが、浅草寺の裏で、何人もの人間を斬り倒したという、その証拠はあるのか」
「私がこの目で見たのです……忘れようがない顔です」
「しかし、たった一度、ちらりと見ただけのことであろう？」
「よ……与力様は私の味方ではないので？」
「お白洲である。問われたことに答えよ」
控えの間では、遠山奉行が目を閉じて聞いていた。逸馬は本白洲での心証をよくするために、きちんと導こうとしているのだ。
「どうなのだ。追分の為五郎という十手持ちが下手人だという証拠は」
「十手持ちといっても、二足の草鞋というやつです。俺は……いえ、私は倉賀野宿の湯屋で三助をしながら、為五郎の日頃の行状をつぶさに見ておりました」

「殺しと繋がる何かがあったのか？」
「一度だけですが、子分たちを相手に、酒に酔った勢いで、そのときの様子を話していたことがありました。そして……『金兵衛が余計なことをしなけりゃ、死なずに済んだんだ』……そう言ってました」
「金兵衛とは、両替商『美濃屋』の番頭のことか？」
「さようでございます」
「では、為五郎という男は、金兵衛とやらを殺すのが狙いで、他の者は巻き込まれた……そう申すのか」
「巻き込むというよりも……他の者を犠牲にし、金兵衛を狙ったことを誤魔化した……そう私は思いました。もっとも、これは為五郎の話を聞いてからのことですが」
「為五郎は何のために、金兵衛を殺したのだ？」
「さあ、それは……」
そこまでは分からないと喜六は首を振った。
「だが、おまえが浅草寺で見た三度笠の男は、たしかに為五郎なのだな」
「はい――」
毅然と頷く喜六に、逸馬は頷き返すと、仕切りの外に控えている健吾に声をかけ

た。

「両替商『美濃屋』をこれへ」

すぐさま、健吾は公事人溜で待っていた貫右衛門を連れて来て、喜六の隣に座らせた。どうして自分が咎人と同じ白洲に座るのかと、不満げな顔だった。

「貫右衛門……この者に見覚えはあるか」

「は？」

「篤と顔を見よ」

改めて、喜六を見やった貫右衛門は思わず目を逸らした。

「誰か分かるか」

「わ、分かりませんが……もしかして、お尋ね者の……」

「そのとおりだ。おまえが、五百両の弁償を求めた相手だ」

貫右衛門が少し戸惑った目を向けるのへ、逸馬は淡々と言った。

「おまえが五年前、事件の直後に、公事宿『叶屋』に相談しているであろう」

「はて……忘れました」

「そんな大金の訴えのことを覚えていないと申すか」

「あ、いえ……急なことなので、ちょっと……ああ、思い出しました。はい、殺され

た金兵衛から奪われた金のことです」

自ら答えた貫右衛門を、逸馬はしばらく黙ったまま、じっと見下ろしていた。貫右衛門は図太そうな目を逸らさなかった。

「その時……何者かに殺された時、金兵衛はなぜ五百両もの大金を持っていたのだ？」

「取引先から預かって来たものです」

「その取引先とは」

「たしか、札差の『紀州屋』さんだったと思います」

「奉行所の調べでは、さような事実はないが、まあ、後で確かめてみる」

「……」

「だがな、この男は五百両は盗んでおらぬ。もし、それほどの金を持っているのであれば、顔をかように変えてまで、下手人探しをするであろうか」

逸馬が唐突に貫右衛門に言うと、ほんのわずかに頬の肉が動いたが、

「さあ。何をおっしゃりたいのですか、与力様」

と逆に問い返してきた。

「この喜六は、五年もかけて、本当の下手人を探し当てたのだ。それが、追分の為五

郎というやくざ者だったのだが……実はおまえに頼まれて金兵衛を殺した、というのだ」

「――何の話をしているのやら」

貫右衛門は目を逸らしたものの、まったく身に覚えのないことだと繰り返した。喜六も不思議そうに逸馬を見上げていた。貫右衛門と為五郎の関わりなど知りもしないからだ。

「おかしいな……為五郎は、おまえに頼まれたと、この俺に話したのだがな」

「私には本当に何のことやら」

「知らぬと言うのか」

「まったく知りませぬ」

「だが、評定所役人の武田信三郎並びに公事師の『叶屋』真琴、さらには岡っ引の紋蔵も、おまえの店に、追分の為五郎が出入りしていたこと、金兵衛とも一緒に、方々の料理屋などで会っていたことの裏を取っているが？」

「金兵衛が誰とつき合っていたかなんぞ、私は一々、知りません」

「まるで他人事だな、貫右衛門……」

逸馬は睨み続けたまま、

「俺は、おまえが奪われたという五百両のことで、この白洲を開いているのだ。もし、下手人が為五郎ならば、そやつに弁償させねばなるまい？」
「そのことは……もういいです。金兵衛が戻ってくるわけでもありませぬし」
「そうか……ならば、仕方があるまい。しばらく小伝馬町牢屋敷に留め置き、改めて篤と調べることとする。引っ立てろ」
と命じた逸馬に従って、健吾が腕を摑むと、貫右衛門は激しく抗った。
「そんな無茶な。一体、私が何をしたというのですッ」
「だから何度も言わせるな、殺しだよ」
伝法に吐き捨てるように言った逸馬を、貫右衛門は凝然と見上げた。
「てめえが、為五郎を金で雇って、おまえたちを裏切った金兵衛を、口封じに殺したんだよ。エッ、どうでも白を切るってんなら、もうひとつでかいお白洲で、町奉行の遠山様の前でやって貰おうじゃねえか、おう」
「そんな……何を証拠に」
「為五郎がてめえで吐いたんだ。それが何よりの証拠だ」
「吐いた……ばかばかしい。第一、奴はもうこの世には、いな……」
と言いかけて、貫右衛門は口をつぐんだ。

「この世には……なんだ」

「……」

「いない、と言いたかったのか。どうして、そのことを知ってる。そもそも、為五郎のことなんぞ知らねえんじゃなかったのかい⁉　奴が死んだのは一昨日のことだ。この俺の目の前でな。しかも、殺したのは八州様だぜッ」

「！　……」

「そのことが、早速、耳に入っていた……てことは、八州廻りの畠山からの報せを聞いたってことだな。やはり、信三郎が調べていたとおり、てめえら、つるんでやがったか！」

それでも貫右衛門は知らないと首を振り続けた。

「おまえが金を貸して、百姓に博打をやらせ、それで困った奴にさらに金を貸して、不当な利息を取る。返せない者からは、娘や女房をカタに取り、お決まりの岡場所送り。八州廻りが後ろ盾になってりゃ、為五郎のような悪党はあちこちでのさばれる」

「……」

「だが、金兵衛はおまえたちのやり口が嫌になった。そこで、お上に駆け込み訴えをしようってときに殺した。違うか」

逸馬は一気にまくし立ててから、優しく声をかけた。

「なあ、貫右衛門……このまま畠山を庇い立てしたところで、今度はおまえが、金兵衛や為五郎のように殺されるだけだぜ。畠山には、おまえたちのような手下が、関八州にわんさかといるんだからな」

「……」

「改めて、調べるゆえ、覚悟せい」

坪井がそう言うと、貫右衛門はがくりと項垂れた。俄にぶるぶる震えはじめた貫右衛門の腕を、健吾はもう一度摑んで、吟味部屋から連れ出そうとした。だが、その足は操り人形のように力がなく、町方中間らに引きずられるように去った。

「ありがたや、ありがたや……」

目を閉じ、両手を合わせて拝むようにしている喜六に、逸馬が声をかけた。

「これでいいのか、喜六」

ゆっくりと瞼を開けると、アッと驚きの顔を上げた。

すぐ目の前に、尼姿の悠寂が立っていたのだ。

「……」

喜六は一目で悠寂が、おさよと分かったが、その名は口にしなかった。

ふたりは長い間、お互いを見つめ合っていた。悠寂はそっと近づいて、喜六の火傷の痕に掌を当てて、

「よく、ご無事で……」

と声をかけた。

だが、喜六は何も答えず、込み上げてくるものを抑えるのが、精一杯であった。そして、たった一言だけ、

「俺の……俺の葬式だと思って、ひとつお経を上げてくれないか」

と頼んだ。

悠寂は静かに頷いて、目を閉じる喜六の前に座り、数珠を取り出した。まるで、詫びて詫び尽くすような声だった。

その夜――。

逸馬はやりきれぬ気持ちのまま、子供たちがいない『一風堂』の座敷で、ごろんとなっていた。冷たい風が吹き込んでくるのも構わず、手枕で仰向けになっていた。

「春やいつ枝に分かれて散る木の葉、それも時雨は紅の露」

廊下で、ふいに仙人が口ずさんだ。

「人ってのは、誰かに詫びて、謝りながら生きてるもんじゃ。おふくろに謝り、女房に謝り、娘に謝り、そして……のう逸馬……」
「先生にも、誰かいるんですか？　謝らなきゃいけない人が」
「いや、おらん」
「……」
「おらんのも寂しいもんじゃぞ」
しんしんと江戸の夜は更けていった。

第四話　風花の舞

一

カランコロンと下駄の音が、薄暗い宵闇の中で響いていた。

辻灯籠にぼんやりと人影が浮かんだ。

潰し島田に結った武家娘が、鮮やかな花柄の振袖を垂らし、内股気味に静かに歩いていた。目は虚ろであるが、何かを探し求めているふうでもあり、あてもなく彷徨っているようにも見えた。小さな提灯を手にしているが、足下を照らすのがようやくだった。

この数日、冬の晴れ間が続いて、昼間はからりとしており、江戸からも遠く富士山や海越しに房総の峰々が見晴らせた。それゆえ夜気も爽やかで、月のない星の燦めく

夜だった。

武家娘はふらついた足取りで、人形町は有馬屋敷の水天宮辺りから、八丁堀の一角にある武田家の門前まで来て、

「信三郎様……信三郎様……」

と声をかけた。蚊の泣くようなひ弱な声である。

しばらく佇んでいると、玄関の内側に灯りがともり、なるべく音を立てないように、そっと戸が開いた。すらりとした黒い影が伸びて、表門の内側まで来て、

「ああ……芳枝さんか……」

と信三郎の声がした。

「かような刻限に申し訳ありません」

道行のような防寒の衣装も着けずに、これでは体を冷やしてしまう。

「さあ。入りなさい」

信三郎は門扉の閂をはずすと、女の手を取って屋敷の中に招じ入れた。氷のような手だった。指先にはまったく血が通っていないかのようだ。

——はあっ。

と、信三郎はそれが当然のように息を吹きかけて、手の指の一本一本を擦ってやり

ながら、離れへと連れて行った。

行灯はつけなかったが、星明かりのせいか、お互いの顔だけはうっすら見えた。

「母上を起こしてはいけないから……」

父親が亡くなってから、母ひとり子ひとりで暮らしてきた。いや、今まで三度も、嫁を貰っては、跡取りができないとか、暮らし向きがさほど豊かではないとか、信三郎の女癖が悪いとか、色々と問題があって離縁を繰り返してきた。それゆえ、信三郎は母親の香澄に心の奥で詫びながらも、

――またぞろ悪い癖。

が出たのである。悪い癖といっても、女をたぶらかすとか、弄ぶという類ではない。困った女の相談に乗り、身の上話を聞いているうちに、深みに入るというやつである。

芳枝は、八千石の大身旗本、藤倉家の一人娘で、父親は大目付を務めている。三河譜代の大名並みの待遇ゆえ、番町に長屋門の豪壮な屋敷を構えている。

信三郎が芳枝に初めて会ったのは、かれこれ一月程前になる。なんでもない、今宵のような冬枯れの夜だった。

上野不忍池にある馴染みの水茶屋で一杯やってから、店の女をふたりばかり連れ出

して、おでん屋に行く途中のことである。黒い着物を着た女が、路地から不意に現れて、信三郎にぶつかりそうになった。

誰かに追われているのは、女の必死の形相で分かった。満月ではなかったが、軒提灯が並ぶ界隈である。目鼻立ちのとおった美しい女であることを、女好きの信三郎は見逃さなかった。

路地を振り返ると、怪しげな浪人者が三人、追ってきていた。

女の方は人気(ひとけ)のない池畔の方へ向かっている。

信三郎は両方の姿を見比べて、一瞬のうちに浪人にわざと鞘当てをした。

――ガチッ！

周りの酔っぱらい客が驚いて振り返るほどの大きな音だった。

「あ、これは済まぬ。無礼を致した」

わざと千鳥足になって、信三郎は浪人のひとりの肩に寄りかかり、何度も詫びて、

「俺の不始末、この女たちが代わって相手をするから、勘弁してくれまいか。なに遠慮はいらぬ。こいつらには散々、金を使ってきたのだ。それに、ほら見ろ、なかなかいい女たちであろう？　そっちも嫌いなクチではあるまい。ささ、袖振り合うも多生の縁……いや、恋の鞘当てになるやもしれぬ。どうぞ、おつきあい下され」

と早口で捲し立てたが、相手は苛々と、
「どけい、邪魔だ、三ピン」
肩を押しやった。そして、三人の浪人は若い武家娘が逃げた方へ駆け出したが、信三郎はさらに絡んで、
「おい、待て！」
今度は異様なほどドスの利いた声だった。
「三ピンとはなんだッ。これでも御公儀に禄を戴いている者だ。こっちは素直に謝っておるのに、どういう了見だ」
それでも浪人たちは信三郎を相手にせず、女の方へ急ごうとするので、ひとりを足払いをかけて倒し、もうひとりも一瞬のうちに腕をねじ上げて、地面に押しつけた。
残りのひとりは驚いた顔ながら、
「貴様ッ……やるというのか！」
いきなり抜刀して、信三郎に切っ先を突きつけた。
「面白い。相手になってやろうじゃねえか」
指をポキポキと鳴らして身構えた途端、浪人たちは斬りかかってきた。
信三郎は水茶屋の女たちを庇って押しやり、そのまま相手の懐に飛び込むと鳩尾を

突きながら、刀を奪い取った。すぐさま峰を返して、ポポンと小気味よく鎖骨や手首を打つと、苦痛の悶え声を洩らして、浪人たちは這々の体で逃げ出した。

水茶屋の女たちは嬌声を上げて喜んで、

「やっぱり信さんは、そんじょそこらの遊び人とは違うわ」

「益々、惚れ直しちゃった」

「さすがは、評定所のお役人様。人の捌き方が違う」

「飲み直しましょうよ、ねえねえ」

などとシナを作って寄りかかってきたが、するりとかわした信三郎は、

「その辺りで飲んで行ってくれ」

と朱銀を手渡すと、そのまま池畔の方へ歩き出した。

「なんなのよ、信さん、つまんない」

黙ったまま、女たちから遠ざかるように足早になった。一瞬だけすれ違った女のことが気になって、追いかけたのだ。

——もしかしたら、他にも狙っていた奴がいるかもしれぬ……。

そう思ったからだが、何処をどう探しても女の姿はなかった。枯れた葦の群れがざわつく音だけが聞こえていた。

その夜の女が、今、目の前にいる芳枝である。
女は少しほつれた鬢を直しながら、薄くさした紅色の唇を舐めた。
「……あの夜、信三郎様をお見かけしていなければ、今のふたりはありません」
「そうだな」
信三郎は火鉢の炭に軽く息を吹きかけて、赤く燃やした。わずかに明るくなる闇の中で、芳枝の顔がぼんやり浮かんだ。
「だが、まさか、あの後、芳枝さんが俺を尾けて来ていたとは考えもしなかった」
「私、見ていたのです」
「うむ。近くの路地で、俺が奴らを追っ払うのをであろう？」
「あの時、一緒にいた女の人の誰かが、評定所のお役人と言ってました。でも、それだけではありません。この方なら、きっと助けて下さる。そう思ったから……」
「それにしても……」
火鉢を芳枝の方へずらしながら、信三郎は苦笑して、
「随分と無茶をするお姫様だ」
「そうですか？」
「幾ら、お父上のためとはいえ、あんな浪人者にひとりで立ち向かうとは、じゃじゃ

馬としか言いようがない」

信三郎は冗談半分で言ったつもりだが、芳枝は俯いたまま、掌を火鉢にかざしていた。ゆらゆらと揺れる影が儚く見えたのは、信三郎の錯覚であろうか。ただ、初めて見たときから、何となく薄幸に感じたのは、顔だちのせいだけではなかった。漂う雰囲気が寂しげで、男を惹きつける翳りがあった。

「で……お父上のご容態はどうなのだ」

「はい。それが相変わらず、体が思うように動かず、言葉もうまく出ません」

「それは、さぞやお辛いでしょうな……」

「意識ははっきりしているので、悔しがっておるのが分かります」

「あのとき……親父の一件で、一度だけお会いしただけだが、実に誠実で懐が深い、武士らしい武士だと感じ入ったことを、今でも覚えている。すぐにでも見舞いに参上したいのは山々だが……」

「ですが今は、お控え下さいませ」

顔を曇らせる芳枝の気持ちは、重々、承知しているつもりだった。だが、たしかに今は藤倉家にとって大切なときである。信三郎も下手に関わりを持たない方が得策だと、考えていた。

その時、母親の香澄の声がした。
「信三郎……？」
中庭に敷いた砂利を踏む音がする。渡り廊下を使わないということは、裏手から回ってきたということだ。
「まずいなア……」
押し入れにでも隠れようかと、芳枝は目配せをしたが、
「別に隠れることはないが。こんなところを見られるとな……お喋りだからな、うちのおふくろさんは」
外に出て誤魔化そうと思ったが、外から障子戸を開ける方が早かった。
「あっ」
「あ……」
信三郎と香澄は同時に声を洩らした。が、座敷に座っている芳枝の姿を見た途端、
「ど、どういうことです、信三郎。こんなはしたないことを、あなたは！」
と香澄は脳天を突き上げるような声を発した。
芳枝は両手をついて深々と頭を下げて、
「ご心配をおかけして申し訳ありません。私は……訳あって今は名乗れませんが、信

三郎様には大変お世話になっている者でございます。夜分、失礼を致しました。では、今宵は……また改めて、ご挨拶に参ります」

と言うと、信三郎に封紙に包んだ文を手渡して、立ち上がった。

何か言いたいけれど、一言も返せないほど、ぞくっとする姿の芳枝に、香澄は気後れしてしまったようだ。神々しいような不気味な雰囲気に呑み込まれたのだ。

「あ、こ、これはどうも……」

香澄は芳枝に軽く頭を下げて、そして、あらぬ方向を向いて、もう一度、今度は深めに挨拶をした。

「――母上……誰に礼をしてるのです？」

ポンと信三郎に肩を叩かれて、香澄は我に返ったように、静かに立ち去る芳枝を見送っていた。芳枝ももう一度、信三郎を振り返り、

「どうぞよろしくお願い致します」と消えいるような声で言ってから背中を向けた。

香澄はしばらく茫然と立ち尽くしていたが、

「寒くないのかしらね。ふたりともあの格好で……」

「ふたりとも？」

「ええ……」

首を傾げた信三郎は、障子を閉めながら、
「母上こそ、風邪を召しますぞ」
「それにしても、あなたに……あんな人がいたとは……何処のどなたなのです。正直に言いなさいよ。見れば、どこぞの偉い方の娘御のようですが……」
「心配には及びませぬ。そういう間柄ではありませんから」
信三郎は誤魔化すように香澄の肩を抱きながら、寝間の方へ連れて行った。
黒い空には、星が不気味なくらいに煌々と輝いていた。

二

同じ星空を望遠鏡で見上げている仙人がいた。『一風堂』の屋根の上にこしらえた、物干し台からである。
国友藤兵衛や岩橋善兵衛が作った〝天体望遠鏡〟を真似して作ったのだが、簡天儀を併用して眺めていても、はっきりと星を見極めることができない。天保七年には、すでに善兵衛は、金星、木星、土星を確認し、さらに土星の付星も見つけている。
仙人こと宮宅又兵衛は、測量のために天文学を嚙っているのだが、実はそれだけで

はなく、いつかは来ると言われている彗星の落下についても、その昔、西川如見（にしかわじょけん）が予測したように、自分も予測を試みているのだ。

とはいえ、明日の暮らしも読めぬ人間が、神の営みとも言える天体を計測するというのだから、世の中、変わってきたものだと、仙人はひしひしと感じていた。

「幽霊……とな」

仙人は望遠鏡を覗きながら、傍らで同じように首を反らせ折って空を見上げている逸馬に、口をもごもごさせながら聞き返した。

「はい。お母上に相談されたのです」

逸馬の言うお母上とは、信三郎のおふくろのことである。母親を早くになくした逸馬は実母も同然に思っていた。

「相談？　またぞろ信三郎が女にうつつをぬかしておるのか」

「お察しのとおりです」

「まあ仕方がない。奴にとって、おなごは山歩きで見つけた、一服の清らかな滝水と同じなんじゃろう。小さな頃からそうだった。はにかみ屋のおまえと違って、ちょっと綺麗だと思うと、すぐに尾いてゆく。母親ぐらいの年増でもな、はは」

「ですが、今度は笑い事ではないのです。お母上の話だと、夜毎、訪ねて来る女は人

ではない……幽霊だと」
「ばかばかしい」
仙人は望遠鏡から目を離して、逸馬の肩を押すように、
「覗いてみろ。真っ赤な帚星がこっちへ近づいて来るように見えぬか」
「え？」
「ほら、ほら」
逸馬は目を望遠鏡にあてがって覗いてみたが、真っ暗な中にキラキラと星が光っているだけである。
「別に帚星は見えませぬが」
「そうか？　もっとしっかり目を遠眼鏡に当てて見てみよ」
逸馬は言われたとおり、ぐいと目を押しつけて見てみたが、仙人が言うような真っ赤な帚星は映らなかった。すぐさま目を離した逸馬は、
「こんなことより、信三郎の話です。毎日のように現れる女は、たしかに幽霊ではないかと、お母上は言うのです」
「空の月や星の姿を、こうして人が見ることができる御時世に幽霊などと、何を戯言を言うておるのだ、逸馬」

「それとこれとは別だと思いますが？　そもそも、お天道様や月が空にあり、我ら人間がこうやって生きているのだって不思議なこと。ならば、人の目に見えぬ妖怪やお化けがいたところで、おかしくはありますまい」

「見える妖怪もおるがのう……南のお奉行所には」

仙人がこう言ったのは、すぐ近くに、またぞろ朱雀が張り込んでいることを承知していたからである。いや、朱雀だけではない。近頃は、この浅草天文台を真似た望遠鏡のことが、洋学禁止の対象となったのか、白虎、青竜、玄武らもうろついているようだった。

鳥居がかくまでも仙人を目の敵にするのは、大坂の『懐徳堂』の自由な学風にも通じる石門心学の泰斗であり、大塩平八郎を扇動した疑いがあるからだけではない。近頃は、長崎帰りの医者や学者を集めて、西洋の様子を子供たちに話して聞かせているという風聞があるからだ。そして、

「これからは小さな国に拘わらず、大きく羽ばたいて、海を渡れ」

などと国禁を破れと推奨する言動が増えたからである。これには老中首座・水野忠邦も危惧している。人心を惑わし、幕府を揺るがす人間を生みかねぬからだ。

もっとも仙人にそのような意思はない。人は生まれながらにして、何ものにも縛ら

れぬ自由があり、己の人生を創造し、それを楽しむという思いが強いだけだ。
そんな仙人だからこそ、信三郎の女好きも認めているのだが、
「今度だけは違うんですよ、先生」
と逸馬は繰り返した。
「俺も感じていたのです。近頃、少し痩せてきたし、顔も青白くなってきた。どことなく精気に欠けるし、話していても何となく目が虚ろなんですよ」
「働きすぎて疲れておるのであろう」
「そんな程度ではありませぬ。先生が見れば、きっとただの疲れではないと見抜かれる。だから、奴も『一風堂』には近づかないのです」
「心配のし過ぎであろう」
「女が母上に対して、名さえも名乗らぬのも、おかしいではありませぬか」
「信三郎が言わせないのかもしれぬぞ……おお、寒くなってきた」
ぶるっと体を震わせながら階下に降りるのを、逸馬は追いかけながら、
「真面目に聞いて下さい、仙人……」
「聞いちょるよ」
「信三郎に会って、さりげなく相手のことを聞き、私も調べてみました」

「なんだ。相手が分かったのなら、幽霊ではないではないか」
「でも驚かないで下さいよ、先生……その女とは、大目付藤倉頼母様の娘なのです」
「藤倉……聞いたことがあるのう」
「ええ。二月近く前、誰かは分かりませぬが、千代田の城から屋敷に戻ったところを賊に襲われ、未だに怪我が回復しておらず、寝たきりだとのことです」
「ふむ……だが、そのご息女ならば、幽霊ではあるまい」
「それが……」
逸馬は中庭にいるであろう鳥居の密偵に聞こえぬように、声をひそめた。
「娘の芳枝という女は……その折の騒動に巻き込まれて殺され、葬儀も行われたというのです……死んでいるのです」
「ほう……では、その女が夜な夜な、信三郎を訪ねて来ていると？」
「そうです。一緒にいる女中も、その折に死んでるとか」
部屋に入った逸馬が火鉢の前に座ると、目の前の仙人は、なぜかニマニマ笑っている。
それでも逸馬は真顔で、
「お母上は、芳枝に伴って、四十がらみの女中も一緒であったと話しています。しか

し、信三郎はいつもひとりで来ていると言い張ってます。これも、おかしなことでしょ、先生」

「おかしなことじゃな。それが本当の話なら」

「本当なのです。奴は、芳枝という女の幽霊に取り憑かれているのです」

逸馬が眉間に皺を寄せて迫ると、仙人は噴き出すように笑った。

「おまえの方が、何かに取り憑かれておるようじゃな」

「仙人……」

「分かった分かった。じゃが、何故、その女の幽霊とやらが、信三郎に取り憑いたのかのう。この世に名残があって、惚れたのかのう。その女のことを調べれば、幽霊の正体も分かるのではないか？」

傍らの盆にあった煎餅をボリッと噛んだ途端、アッと仙人が悲鳴を上げた。ぽろりと入れ歯が外れたのだ。総入れ歯ではなく、奥歯だけなのだが、煎餅の割れカスを思い切り噛んだらしく、俄に目から涙が出てきた。

入れ歯はすでに江戸中期には、当然のように使われていた。入れ歯師という職人がいて、柘植細工でなかなか具合のよいものが広がっていたという。

「いてて……いってえなあ、まったく……」

今度は逸馬が思わず噴き出した。

「夜空の果てのことに思い馳せながらも、結局、自分の身のことで思い煩うのですな、人ってものは」

「笑うな……」

お互いが笑い合っていると、離れ座敷から、茜がやってきた。

「賑やかですねえ……」

と言いかけて、プッと噴き出した。

「逸馬様、そのお顔」

「え？」

「何やってんですか、まったく」

帯に挟んであった手鏡を、茜は逸馬に見せてやった。逸馬が覗き込むと、目の周りに、丸く墨の痕がついていた。遠眼鏡の覗き口の形である。

「ああッ！　人が真面目に話しているときに、もう……！」

真剣に怒る逸馬の顔を、仙人は指を差して笑った。だが、その笑い飛ばす仙人の姿には、辛さや悲しさをモノともせずに生きていかねばならぬ強さがある、と茜は感じていた。

だが、それは茜の買いかぶりだった。仙人はただの悪戯好きだっただけである。

三

番町には大小の旗本屋敷がずらりと並んでいる。その中でも格段の差がある藤倉家の長屋門は聳えるようであった。

町方与力が訪ねて来ても、敷地内に入れることはなかった。門番は人を威圧する態度で、決して近づかせなかった。そんな具合だったから、逸馬は藤倉の隣組の八助に頼んで、一緒に門内に入れて貰った。

石高こそ違えど、同じ三河譜代の旗本である。八助と逸馬は丁重に、客間に通されて、家老職の富樫和将が対応に出た。

「――御姫様……芳枝様がですか？」

富樫は怪訝な目を逸馬に向けた。

傍らの八助は何となくやきもきして見ている。隣組とはいえ、毛利家はたかだか、二百石の家禄。それに比べて、藤倉家は八千石。あまりにも身分が違いすぎるので、粗相があってはならぬと緊張していたのである。

「はい。武田信三郎という名に覚えはありませぬか」
「武田信三郎……武田……」
心当たりがありそうな顔になったが、富樫はいや知らぬと改めて答えた。
「ええ。夜毎、芳枝様がこいつ、あ、いえ信三郎の家に訪ねて来ているらしいのです」
「そんな馬鹿げた話につき合うほど、それがし暇ではありませぬ」
感情を露わにした富樫は腰を浮かせたが、逸馬はもう少しだけと嘆願した。
「されど、芳枝様が来ているのは事実なのです。いいえ、芳枝様の幽霊と言った方が正しいのですが、富樫様には心当たりはありませぬか」
「下らぬ」
と富樫はさらに眉間に皺を寄せて、
「芳枝様はすでにお亡くなりになった。四十九日に法要も済ませた。その武田という御家人に会いに行っているのが芳枝様の幽霊ならば、それがしも会ってみたいものだ」
「では、まったく心当たりはないと？」
「知らぬと言うておろう」

「私はもしや、芳枝様と名乗る別人が、信三郎に近づいているのかも……と一度は疑いました。しかし、自身番、木戸番、辻番、橋番などを廻ってみると、たしかにそのような女が通るのを見たと言うのです」

夜の四つ（午後十時）を過ぎれば、町木戸は閉まることになっている。だが、怪しくないと判断されれば、番人が通すことはよくある。盗賊などが出ているときでなければ、脇の扉を潜って抜けることもできる。

「幾つかの番屋の番太郎たちが、芳枝様らしき娘さんを見ているのです」

「だから、それは芳枝様ではなかろう。死んでいるのだから、別人ではないか？」

「ならば一度、富樫様もお会いしてみてくれませぬか……でないと、信三郎は何かに取り憑かれたように、その女に……」

「知ったことではない！」

不機嫌になって富樫は立ち上がってしまった。

「おぬしの親友が女の幽霊に好かれようが嫌われようが、我が藤倉家と何の関わりがある。二度とかような下らぬことで訪ねて来るな。だから不浄役人は嫌いだ」

富樫家はかつて戦国時代の守護大名の流れを汲むらしく、藤倉家の家老職であっても、その誇りを胸に秘めているようだ。

「不浄役人……」

ほんの一瞬だが、逸馬にはカチンときた。いつもなら聞き流すところだが、なぜか苛立ちを覚えた逸馬も立ち上がって、

「今言ったあなた様のお言葉、篤と覚えておいて下さい」

「なんだと？」

「その不浄役人が探索しているのは、藤倉家にまつわる、ある不正についてです。不浄なことが明らかになった折は、その腹、見事カッ切って貰いましょうか」

まるで啖呵を切るような言い草に、慌てたのは八助の方だった。しどろもどろで、富樫に対して謝れと言ったものの、逸馬はさっさと自ら部屋から出て行ってしまった。

「毛利殿。これは何の座興でござるか」

「あ、いえ、そんな、いや……」

「書院番頭にご出世なさったそうだが、あのような無礼な輩と付き合いがあると上様の耳に入れば、どうなるか……覚悟なされよ」

「申し訳ありません。私が代わって、平に平に……」

八助は平伏して謝ったが、富樫は鼻を鳴らして立ち去った。

すぐさま逸馬を追いかけた八助は、すっかりカンカンになって、罵声を浴びせた。
「待て、大将！」
構わずさっさと歩いて行く逸馬を、八助はいつになく物凄い勢いで、
「おい、待てと言ってるンだ！　こっちは非番なのにわざわざ口を利いて、つき合ってやったのに、なんだあの態度は！」
つと立ち止まった大きな逸馬の背中に、ドンと八助はぶつかった。鼻先をぶつけたのか、小さな悲鳴を上げて、
「ばか野郎、急に止まるな。ッたく……」
「済まぬ済まぬ。おまえを騙すつもりではなかったのだが、ああでも言わないと富樫様は動かないと思ったのでな」
「動かない？」
「うむ。あの人は此度の一件、何か知っている。敵か味方か分からぬが、あの人が動かぬ限り、信三郎も痩せ細る一方であろう」
「な、なんだ……訳が分からぬ。もって廻った言い方をしないで、はっきり言ってくれ」

「そこの店で、釜飯でも食うか」
「腹は減ってない」
「まあ、つき合え。炊き上がるのを待っている間に腹の虫が鳴る。この寒さを吹っ飛ばしてくれる美味さだぞ」
勝手にさっさと紺地に屋号を白抜きした暖簾をくぐって、店の中に入った。蕎麦屋のような板敷きの広間があって、囲炉裏を囲むようにぐるりと客席がある。昼餉の時ではないので、客はまばらである。
「奉行所の連中がよく通うらしい」
と言いながら席に着こうとすると、店の主人がすぐさま声をかけた。
「藤堂様。二階でお待ちですよ」
「そうかい。じゃ、上がらせて貰うぜ」
逸馬は土間の方へ曲がって、奥の階段へ向かうと、八助も慌ててついて行きながら、
「誰が待っているんだ」
「来りゃ分かるよ」
階段を登って、黒光りする廊下を一番奥の部屋まで行くと、「失礼します」と声を

かけて襖を開けた。
中には、坪井喜八郎が貧乏揺すりをしながら、窓辺に座っていた。
「お待たせしました」
「おう、入れ。早く入って、襖を閉めろ」
坪井に言われるままに入った逸馬は、八助を促すように上座に座らせた。
「おい、俺は……」
もちろん、八助は坪井が遠山奉行の内与力だということは承知しているが、何事かよからぬ予感がして怯んだ。坪井は険しい顔のまま、八助に上座を勧めた。仮にも旗本である。下へ置くわけにはいかない。坪井にこくりと挨拶をして、
「どういうことだ、逸馬」
居心地悪そうに腰を下ろして、八助は訝しそうに尋ねた。
答えたのは坪井の方だった。
「毛利様に折り入って、お願いしたき儀がございます」
「はあ……」
「これは、北町奉行遠山左衛門尉様のお願いだと思って下さって結構です」
なんだか余計な威圧を感じた八助は、黙って聞いていた。

「実は、大目付の藤倉頼母様が賊に襲われた一件につき、奉行所でも独自に探索を続けていたのですが、ある浪人者の証言にて、書院番組頭の筒井安兵衛という者が、事件に関わっていた節があると分かったのです」

「筒井……はい。筒井なら、五番組頭ですが、あの者が関わっているとは、一体、どういうことですか」

「それがはっきりとは分からぬから、お頼み申しているのです」

「と言われても……」

「万が一、筒井某が藤倉様に手を出していたとなると、毛利様、あなたの目配りが足らなかったと、老中から責めを受けることにもなりかねませぬ」

「そんな……脅かさないで下さい」

「そういう動きがあったこと、遠山様は察知しているのです。ご存知かとは思いますが、藤倉頼母様は評定所にて、遠山様とも席を同じくする仲……此度の襲撃の裏には、遠山様と一緒に吟味していた……あの一件についても関わりあるかとおっしゃいましてな」

「あの一件……？」

「作事下奉行の滝川政則様が、普請請負問屋に渡すべき公金の中から、幾ばくか懐

していたという、あの一件です」

滝川が横領していたという噂は、幕府内ではまさに噂として流れているだけで、確たる証拠はない。だが、もし何か大きな力が、藤倉を消そうとしたのだとすれば、断固、真相を暴き出さねばならぬ。それが遠山の考えでもあった。

だが、町奉行の立場で、武家の事件に食い込むことは難しい。

「そこで、毛利様にお願いしたいのだ」

「はあ……」

「どうか、どうか、宜しくお頼み申し上げます」

逸馬の上司に両手をついて頼まれては、八助としても受けないわけにはいくまい。

渋々、承知した八助だが、

「いつも、こんな役回りだな、大将。この穴埋めはきっとして貰うぜ」

と小声で言った。

「では、後は頼んだぞ、藤堂」

八助には深々と頭を下げ、逸馬には偉そうに命じて帰った坪井だった。

しばらくすると、雉子肉と根菜や茸が混じった釜飯が届いた。ほんわかと匂い立つ醤油の香に、八助の腹はぐうぐうと鳴っていた。喉まで鳴った。

「言うたであろう？　さあ、腹が減っては戦はできぬ……だ」
逸馬が釜の蓋を取ると、もわっと広がる湯気に包まれた。

四

その夜も——。
信三郎の屋敷に、振袖姿の武家娘が現れた。芳枝である。
薄暗い離れから、ぼそぼそと声が聞こえてくるので、香澄は気取られないように、そっと忍び足で近づいていった。すると目の前に、すうっと白い紗のようなものが過ったかと思うと、背筋を伸ばした女が離れ座敷の前に、立ちはだかるように現れた。
「あ……」
声にこそならなかったが、悲鳴を上げたいほど驚いた。香澄は手にしていた数珠を握り締めると、目を閉じてお経を唱えた。しばらく続けて瞼を開けると、そこには信三郎の姿があった。
「信三郎！」
「どうしたのです、母上。何をぶつぶつと……誰と話していたのです」

「お経を唱えていただけです。あなたこそ、誰と！」

押しやって部屋の中に入ると、やはり芳枝の姿があった。凛然と座っているものの、じっと見上げている黒い瞳には、異様なほど人を突き放すものがある。

「し……信三郎……あなたはこの女が誰か知っているのですか」

「はい。よく知ってますよ」

「知ってる⁉　だったら、どうして、こんな真似を……！」

香澄は部屋の中へ入るなり、信三郎が見たこともないような梵語で書かれた紙を突きつけて、ぶつぶつと怪しげな呪文を唱えはじめた。唖然と見ていた信三郎は、香澄のあまりの変貌ぶりに恐くなるほどだった。

「母上！　しっかりして下さい！」

羽交い締めにするように止めると、ハッと我に返った香澄は、恐る恐る部屋の中を見廻した。芳枝の姿はない。

「……消えた……信三郎、やはり、あなたの所へ女中と一緒に現れていたのは、幽霊、物の怪の類だったのですよ」

「……」

「どこで取り憑かれてきたのか分かりませんが、とにかく菩提寺の道庵和尚に教えら

れた呪文が効いたようですね。一安心です。これを持っていなさい」

香澄は護摩札を手渡し、離れ部屋の障子や襖などにもペタペタと糊で貼り始めた。

その姿の方が異様なくらいだった。

「帰っただけです。芳枝さんは、帰っただけですから。母上が呪文を唱えている間に」

香澄は、やはり、という目を向けて、

「ほら語るに落ちた」

「え？」

「芳枝というのですね。藤倉芳枝という女の幽霊でしょ。ええ、分かってますとも。この女はもう二月も前に死んだのです。四十九日を過ぎてもまだ、この世に未練があって、うろついているのです」

「母上……」

「逸馬さんが調べてきてくれたとおりです。あなたは、やはり……」

「逸馬が？」

「でも、もう大丈夫。呪文が効いたようです。今度は、和尚様に来て貰って、あなたの体の中にある邪気を追い出して貰いますから、きちんとするのですよ」

「……」

「普段から、女の尻ばかり追いかけているから、訳の分からない怨霊に取り憑かれるのです。これを機に心を改めなさい。きちんと新しい嫁を貰わないから、こうなるのです」

「待って下さい。母上がこんなだから、嫁は逃げ出したんじゃないですか」

「あら。私のせいだと言うのですかッ。今まで三人も離縁になったのは、私の!?　信三郎、聞き捨てなりませんよ」

興奮気味になる香澄を、信三郎は必死に宥めて、

「落ち着いて下さい」

「これが落ち着いてられますか。たったひとりの武田家の跡取りを、つまらぬ幽霊に骨抜きにされてたまるものですか」

何枚もの護摩札をペタペタと貼り続ける香澄を、信三郎は真顔で見つめていた。

久留米藩九代目藩主が、文政元年に江戸屋敷に分霊をした水天宮は、月に一度だけ、町人の参詣を許していた。その日だけは、安産と子授けの神様に参拝する者たちで賑わっていた。

藩の屋敷内にあるから、普段は出入りすることができない。だが、歩いて来た芳枝が潜り戸の前に立つと、まるで着いたのが分かったかのように内側から扉が開いて、中にすうっと入って行った。

その様子を、ずっと信三郎の屋敷から尾けてきていた北町定町廻り同心の原田健吾と岡っ引の紋蔵が見ていた。

「健吾の旦那。やはり、お化けだってのは嘘だったみてえですね」

紋蔵は端から、逸馬が話していた幽霊話は信じていなかったが、芳枝の姿があまりにも儚いので、そのことの方が気になった。

「たしかに、信三郎さんが入れ込むのは分かるような気がするな」

「ええ。あのような美形の女に夜毎、通われては、心も動くというもの。押しかけ女房も悪くねえってもんで」

「しかし……」

健吾は立派な門を見上げながら、

「久留米藩のお屋敷とは、あの女、只者ではなさそうだな。藤倉様の娘御は死んだとのことだが、それを名乗って信三郎さんに近づいているのは、どういう狙いがあるのかな」

「それを探るのが、あっしらの務めじゃありゃあせんか」
「しかし、この中に入るのはな……」
「案ずるには及びませぬ。あしたは五の日。毎月、五日には水天宮が開かれ、誰でも参ることができましょう」
「あ、そうか。では、明日、来よう」
「旦那……そうやって、すぐ休むことばかり考えてませんか？　ここは藤堂様が親友の武田様のために動いてるんですから、気を引き締めてやりやしょう」
呆れたように説教をする紋蔵に、健吾は寝ぼけ眼を擦りながら、仕方なく頷いた。
寒い中で一晩中張り込むのは大変だが、我慢するしかなかった。何も起こらないかもしれぬ。だが、何かがあってからでは遅い。
すると――。
夜半過ぎになって、編笠の侍がぶらりと門前にやってきた。異様なほどの殺気を背中から出していた。
「旦那……」
薦を被って、天水桶の陰でうつらうつらしていた健吾の肩を紋蔵がつついた。
「な、なんだッ」

「シッ。あの浪人風の侍……あっしには誰だか、よく分かりますよ」
「ん……？」
「色々と辛酸を舐めさせられた相手ですからねえ……谷津重兵衛ですよ」
「すっと音もなく一筋に人を斬る……うなぎの重兵衛……」
凝視していると、他に黒装束姿がふたり駆け寄って来て、あっという間に塀に縄ばしごをかけると、するすると登っていった。塀の上には猫も歩けないように、茨が張られているが、それをものともせずに屋敷の内側に入った。
見ていた紋蔵は思わず、
「曲者！　曲者だぞ！」
と叫びながら、呼び子を鳴らして路地から飛び出した。
「お、おい、紋蔵、待て……」
二の足を踏んだ健吾だが、構わず紋蔵は笛を吹き続けて、谷津のもとに近づいた。編笠の縁を指先で上げた、その奥にはたしかに谷津の顔があった。
「谷津様。あんた一体、何をやらかそうってんです？」
十手を突きつけたまま、紋蔵は身構えて、できることならば捕らえて北町に連れて行こうと考えていた。かつては南町の同心とはいえ、本来ならば不祥事を起こして切

腹をしなければならない身。それを放置して、鳥居耀蔵の手下として働いている輩を、紋蔵はどうしても見逃すことができなかったのである。

「紋蔵か……かような所で何をしておる」

闇の中で人影が動くのを認めた谷津は、それが健吾だと見抜くや、

「若造。余計なことをしていると怪我では済まぬぞ」

気押された健吾だが、姿を見せてしまっては仕方があるまい。

「谷津様……いや谷津重兵衛……訳がなんであろうと、武家屋敷に忍び込むとは断じて見逃すわけにはいかぬ。番所まで来て貰おうか。篤と話を聞こう」

必死に言ったが、膝は震えていた。その健吾の姿を見て、谷津はふっと小馬鹿にした笑みを浮かべたが、

「またぞろ邪魔をしやがるか」

音もなく鞘から刀を抜き払うと、目にも止まらぬ速さで、健吾に斬りかかった。懸命に避けながら、抜刀しようとしたが羽織がかかって、うまく抜けない。

「曲者だ！　曲者ですぞオ！」

叫びながらドンドンと表扉を叩く紋蔵の大声に、屋敷内が俄にざわめいた。あちこちで蠟燭や行灯に火がともるのが、闇に広がる明かりで分かる。

「曲者だ、曲者だア！」

声の限りを尽くして張り上げながら、今度は、ようやく刀を構えた健吾が谷津と向かい合っているのを見て、思わず駆け出した。谷津の腕前をよく知っている紋蔵には、健吾が到底勝てる相手とは思えなかった。

紋蔵は谷津の背後から、十手につけている鎖を投げつけた。ひょいと避けて振り返った谷津を睨みつけ、

「今だ、旦那！」

その紋蔵の声に、健吾は一歩踏み出して斬りかかった。が、払うように伸びた谷津の刀の切っ先が、健吾の手の甲を打った。

「うわっ」

悲鳴を洩らしながら、飛びすさった健吾に、谷津がさらに斬りつけた。

必死に打ち返した健吾の刀が弾き飛ばされた。そのまま膝が地面にがくりとついた。

アッと見た紋蔵は咄嗟に、もう一度、鎖を投げながら、ふたりの間に割って入るように飛び込んだ。

途端——バッサリと谷津の刀が紋蔵の背中を斬り裂いた。

あっという間に血が流れ出し、健吾の目の前で崩れた。その目はじっと健吾を見つめながら、声にならない声で必死に、

「だ……旦那、すまねえ……下手をこいてしまった……に、逃げなせえ……旦那……」

と虫の息で言いながら、突然、引き攣って地面に倒れ伏した。

啞然となったまま身動きできない健吾の前に、谷津は冷たい目で立った。血塗れた刀を握り直したそのとき、

「何の騒ぎだ！　出会え、出会え！」

潜り戸が開いて、顔を出した屋敷内の家臣が怒声を張り上げた。

谷津はチッと舌打ちをすると、そのまま駆けだした。屋敷内から飛び出してきた家臣たちが、追いかけたが、谷津の姿は音もなく消えていた。

動かなくなった紋蔵の前で、健吾は言葉にならない声で、済まぬ済まぬと頭を垂れて、いつまでも謝っていた。

五

「そろそろ、本当のことを話してくれてもいいんじゃないか？」

窓辺に立つ信三郎に、逸馬は詰め寄った。

外はカラリと晴れ渡っており、陰湿な事件が起こっているとは思えぬ明るさだった。だが、昨夜（ゆうべ）よりも寒さが増したのであろう。淡い粉雪が風に舞っている。

ここ『佐和膳』の二階は、遠山様がお忍びで来るときに使うと限られている。が、佐和の計らいで一切、誰にも話が洩れないようにして、じっくりと向かい合えたのだ。

「なあ、信三郎。おまえは時に、大事なことを黙っている癖がある。人に迷惑をかけたくないという思いからだろうが、水臭いじゃねえか」

「……」

「またぞろ、敵を欺くにはまず味方から……ってやつか？」

「そうじゃねえが……」

「煮え切らん奴だな。ガキの頃からそうだ」

「おまえのように、脳天気に大雑把には生きていけないんだよ。俺はこう見えて、心は飴細工みてえなんだ」
「よく言うぜ。飴は飴でも、仙人の歯を折ってしまうほどの固い飴だろう」
「減らず口はいい……いいが……」
信三郎は俄に神妙な顔になって、申し訳ないと頭を下げた。
「俺のせいで、岡っ引の紋蔵が……本当に申し訳ない」
「おまえが謝ることじゃねえよ」
深い溜息をついて、逸馬もしみじみと瞑目し、
「健吾を一人前にしたくて、無理にあいつの世話を頼んだ俺が悪かった」
「逸馬……」
「紋蔵親分は本当は、十手を返して、孫と遊ぶのを楽しみにしてたんだが、それも叶わなくなった……残された者の面倒は俺が見るつもりだが、許せねえのは谷津重兵衛だ」
「……」
「あいつの裏には、鳥居耀蔵がいる。てことは、此度の一件も、鳥居がどこかで関わっているってことだ」

「そのようだな」
「知っていたのか？」
「いや。そんなことは知らない……けど、色々と考えを巡らせてみりゃ、さもありなんと思えることがあってな」
「芳枝さんとやらの身は大丈夫なのか」
「心配するな。こんな事件があったのだ。久留米藩邸の方も、警戒を強めた」
「どうして、久留米藩邸、なのだ？」
「母親が久留米藩に縁があってな、尼寺から移って、仇討ちの機会を窺っていたらしい」
同じように深く溜息をついた信三郎に、逸馬は親友らしく、じっと見つめて、
「話してくれるな。さっきも話したとおり、北町で秘かに探索している〝公金横領〟の一件とも関わりがありそうなのだ」
「ああ……」
「芳枝と名乗る女は、幽霊ではないと分かったが、あれは久留米藩のご息女か？」
「いや、違う。正真正銘の藤倉芳枝さんだ」
「大目付の……」

「そうだ」
「だが、藤倉様が襲われたとき、芳枝さんとやらも死んだと聞いたが？　葬儀まで済ませたというではないか」
逸馬はその裏に何かあると勘づいたようだが、黙って信三郎が話し出すのを待っていた。信三郎はしばらく考えていたが、両肩から力が抜けると、いつもの飄々(ひょうひょう)とした顔に戻って、
「町方与力のおまえが調べても、芳枝さんは死んでいたのであろう……そうせざるを得なかったのだ」
「死んだふりってことか」
「ああ。そうせねば、本当に殺されるか、でなければ、無理矢理、好きでもない男と一緒にさせられるかもしれぬのだ」
「どういうことだ？」
「うむ……ちょいと喉が渇いた」
階下で客の相手をしている女将の佐和に、逸馬は冷や酒と燗酒を一本ずつ頼んだ。
信三郎には燗酒を注いでやり、しめ鯖といかのゴロ焼きを肴(さかな)に、逸馬は手酌で冷やをやりながら、

「で、なぜ芳枝さんが、そんな目に遭わなきゃいけないのだ」
「おまえも調べたとおり、藤倉様は作事下奉行の滝川様が公儀の金を着服していたことを突き止め、今一歩というところまできていた。だが、その証拠が誰かに奪われ、証人になった者も不慮の死を遂げている」
「……てことは、滝川ひとりの仕業ではない、ということか」
「ああ、性懲りもなく、旨い汁を吸いたい輩が、幕閣の中には大勢いるということだ。まったく、政(まつりごと)を変える偉い人が出て来ないと、いつまで経っても同じ事の繰り返しだ」
「遠山様が老中首座になれれば、幕府も変わるのではないかな。どこか大名にでも婿入りして、老中になればいいのに」
「それだよ」
「え？」
はらわたのすべてに行き渡るように、信三郎はぐいと飲み干して、
「藤倉の御家を狙っている奴がいる。そいつが藤倉頼母様を殺し、一人娘の芳枝様に養子縁組で御家に入り、さらに幕府内での権勢を握ろうとしているらしいのだ」
「それが……滝川政則だというのか、作事下奉行の」

「ああ。だが、それだけの陰謀、ひとりではできまい？　必ず手を貸す奴がいる。後ろ盾もいよう。あるいは、藤倉様の近くにも裏切り者がいるやもしれぬ」
「近くに……」
「だからこそ、芳枝さんは本当に信頼できる奥女中たちによって尼寺で葬儀を済ませ、しばらくは、その寺に身を潜めていたのだが……」
「だが……？」
「本当は、生来、じゃじゃ馬なのであろう。自分の父上をこんな目に遭わせた奴が誰か……たったひとりで探し出そうとしたんだ」
信三郎は真剣なきらきらしたまなざしで、
「その気持ち……俺はあの時、あの一瞬の出会いで、感じたのだ」
「あの時？」
「まあ、それはいいとして……とにかく、何者かが、藤倉家を乗っ取ろうとしている。しかも、大目付様が暴こうとした悪事も、闇に葬ろうとしている。こんなことが許されていいのか、逸馬」
「思わねえよ」
「だろう」

「だったら、なぜ端から俺に話してくれなかった」
「言っただろう？　おまえが動き出すとガチャガチャして目立ってしょうがねえ」
「だから、芳枝さんも夜な夜な幽霊のように……ってわけか」
「ま、そんなところだ。むろん、大切な話をするためだし、芳枝さんからは大事な文も預かった。評定所の証拠や判例を扱う役人ということで信頼されたようだ」
「それにしても……どうして、そこまで芳枝さんに入れあげるのだ？」
逸馬が顔を覗き込むと、信三郎は真顔で手を振って、
「そんなんじゃない。藤倉様は……親父が昔、それこそ横領の嫌疑を受けて詰め腹を切らされたとき……最後まで、無実を信じてくれ、武田家の存続に力添えをしてくれた人だ」
「……」
「たった一度しか会ったことはないが、親父の恩人なのだ。だから俺は……」
それからは言葉にならなかった。信三郎が義に厚いことは逸馬が一番知っている。
「そうか……おまえらしいな。パチ助も今、色々と調べている。いずれ、芳枝さんの助けになるネタも拾ってくるだろうよ」
逸馬はそう慰めて、銚子を傾けた。空だったが、日の高いうちに飲み過ぎもよくあ

るまい。お互い調べごともあるからと、腰を上げて下に向かおうとすると、階段の途中に茜がいた。

「どうした……こんな所で……」

「あ、いえ。先生がたまには外で食べたいと……だから、一緒に来たところなんです。そしたら、逸馬様たちがおられると……」

「そうか……仙人が外でとは珍しい……」

逸馬と信三郎が顔を見合わせると、まずい所に来たかのように、茜は店の下に戻った。すると信三郎が逸馬に耳打ちをした。

「聞かれたかもしれぬ。だとすれば、茜のやつ、またぞろおまえのために命を投げ出すかもしれねえ……気をつけてやれ」

「ああ……」

困惑ぎみの逸馬の背を叩いて、信三郎が陽気に笑いながら先に降りた。これでは、どっちが慰められたのか分からぬ。逸馬はまた溜息をついて、階段に足を伸ばした。

六

書院番の詰所では、将軍の日光参拝について色々と警護の段取りなどの話し合いが行われていた。八助は新任だから、緊張の面持ちで見守っていたが、腹の中では、

――さても、さても困ったことだ。

と心ここにあらずだった。

自分が棚ぼたで書院番頭に起用されたものの、それは前の書院番頭の不祥事が原因であった。今度は部下にあたる組頭が、大目付襲撃に関わっているらしい。それが事実で表沙汰になれば、せっかく手に入れた地位をまたぞろ失うことになる。

――つくづく俺はついてない。

そう心の中で呟いたとき、

「如何でございますか、毛利様」

と声がかかった。その主は、五番組頭の筒井安兵衛だった。

「おまえか……」

「は？」

「あ、いや、何でもない。諸事万端、組頭で話し合って決めて貰いたい。ところで、筒井。話がある。ここでは話しにくいことゆえ、下城前に、私の下部屋に来い」
「御用……ですか」
「うむ。少々、尋ねたいことがある」
「ここでは、いけないのですか？」
八助のことを、小馬鹿にしているのがよく分かる顔だ。底意地の悪そうな目だ。虫酸が走る。だが、感情をぐっと抑えて、
「話してもよいのか？　みなに聞かれては困ると思うての配慮だ。よいな」
「さっぱり分かりませぬが」
「大目付、藤倉頼母様の一件についてだ。そう言えば分かるであろう」
毅然と八助が言った途端、筒井はごくりと固唾を飲んだ。その音が集まっていた他の組頭に聞こえるほどだった。
「確かめたいことがあるだけだ。待っておるぞ」
念を押して立ち上がった八助の背中に、ひそひそと声が聞こえた。
もしかしたら、他の者たちも薄々と勘づいていたことなのかもしれぬ。だが、下手に突っつけば、お互い武門を誇る旗本たちである。根も葉もないことと争いごとにな

りかねぬから、口にしなかっただけかもしれない。

その日暮れ——。

下部屋で待っていた八助だが、なかなか筒井は姿を現さなかった。下城の刻限はとうに過ぎてしまい、廊下もすっかり暗くなっている。

「遅いッ……さては、奴め。俺に逆らう気だな……あるいは、先に下城して、証拠でも隠すつもりか。しまった……！」

藤倉の一件とバラしたから、相手に〝一目〟余計に与えてしまったかと悔やんだ。

「まったく、なんというドジを……ああ、また逸馬と信三郎が、俺をバカにしながら怒る顔が目に浮かぶ」

胸騒ぎがして立ち上がったとき、茶坊主が慌てた様子で駆け込んできた。常に冷静であらねばならぬ茶坊主が荒い息をしているとは、よほどのことが起こったのであろう。

「一大事……一大事でございます」

「なんだ」

「とにかく、とにかく、こちらへ来て下さいまし」

案内されたのは、書院番の詰所である虎之間近くの厠だった。

「どうしたというのだ」

既に、他の書院番組頭や宿直の大番、新番の者たちも袴の肩をぶつけあいながら集まって来ていた。

厠を覗き込んだ八助はアッと仰天した。

そこには、切腹した筒井安兵衛の姿があった。生々しい血がだらだらと床に流れている。思わず八助は噎せ返りそうになった。

「なぜ……どうしてだ……」

狼狽する八助を押しのけて、駆けてきた大番頭が適切な後始末を命じていた。ガンガン痛みが走り、頭が真っ白になってゆく中で、八助は茫然と立ち尽くしていた。

どこをどうやって、屋敷に帰ったかも覚えていない。

ただ、帰ったとき、自分よりも先に、若年寄の使いが来ており、評定所の担当として、信三郎も同行していた。

「し、信三郎……」

思わず八助は情けない声を出したが、信三郎は役目柄、

「直ちに、若年寄・本間越後守の屋敷までご同行願いたい」

と言った。

書院番頭の差配が若年寄である。城中で部下の組頭が切腹をするという事件がありながら、報告もなしに下城したということが〝不行届〟となったのだ。

――ああ、これで俺の書院番頭も、おしまいだ……。

この期に及んで、そういうことしか頭に浮かばない己が情けなくなった。

門を振り返ると、息子たちが何気なくこちらを見ている。信三郎が心配には及ばぬと声をかけているが、子供たちの不安そうな顔色は消えなかった。

評定所で詮議をする前に、越後守の屋敷にて、事の仔細を聞きたいとのことだった。

信三郎が同席とはいえ、八助は心細かった。

越後守とは、一日置きに顔を合わせているが、今日のような険しい表情は初めてであった。両肩を震わせながら、神妙な面持ちで座る八助に、越後守は訊いた。

「おぬしに説教されて後、切腹をした……とあるが、心当たりはあるか？」

「……」

「遺書も残っておる。このとおりな」

と越後守が見せたのは、たった一枚に墨書で、

『まことに申し訳ありませぬ。毛利様にはご迷惑をおかけしました』

とだけある。筆跡から見ても、筒井が書いたものであることに間違いはない。それを手にして、わなわなと震えていると、信三郎が助け船を出した。

「この一件、私のせいでございます」

「おぬしの？」

「はい。この際、お話ししておきたいことがありますが、よろしいでしょうか」

本間越後守は若年寄になる前は、寺社奉行をしたこともあり、信三郎とは知らぬ間柄ではない。職務にまっすぐな性格であることも、越後守は承知していた。

「申してみよ」

「ははッ」

信三郎は大目付の藤倉頼母が賊に襲撃された一件から、娘の芳枝が死んだふりをして身を隠していること、そして父が暴こうとしていた作事下奉行の公金横領について、詳細に話した。

ただ、これは賭でもあった。

城中で、書院組頭が切腹するという異常事態だが、信三郎は頭から自刃とは思っていない。誰かが殺したと思っている。その見事な手さばきからいって、城中で権勢を持っている者の仕業に他ならない。だとすれば、目の前の越後守が関わっていないと

も限らないからだ。

だが、もし不都合が生じたのであれば、同時に八助も始末したであろうし、この場に呼びつけて詮議する意味もない。即刻、配下の管理不行届で免職にしてもよいのだ。

「では、武田。おぬしは、まさか、誰かが城中で殺したと言うのか？」

言葉に出して先に言われて、信三郎は少し驚いたが、その通りだと頷いた。そして、その周辺で、鳥居耀蔵の息のかかった者がうろついていることも話した。

「谷津重兵衛……たかが町方同心ですが、本間様もご存知でございましょう」

「うむ。鳥居の懐刀だった奴だな」

「そやつ、死んではおりませぬ。切腹したことになってはいましたが、未だに奇妙な輩を引き連れて、何やら暗躍しております」

「なるほど……裏には鳥居か……」

越後守は低く唸ってから、困ったように顔を顰めて、

「ということは、そのさらに裏には水野忠邦様が……これは少々、面倒だな」

「私は、水野様を評定所に引きずり出そうなどと考えてはおりませぬ。大目付を襲撃した輩とその狙いさえハッキリさせれば、それでよいのです」

「相分かった。後は、儂に任せてみよ」
毅然と越後守はそう言った。
だが……。
数日、経っても、評定は開かれず、ただ、八助の御役御免が決まっただけであった。

七

とんだとばっちりだと、八助は不満たらたらだったが、
「命があっただけマシですよ」
などと佐和が慰めるものだから、余計に落ち込むのだった。
『佐和膳』には、いつもの三羽烏に加えて、真琴が来ており、今後の処理をどうするかについて話し合っていた。真琴は逸馬に頼まれて、秘かに作事下奉行・滝川政則の奥女中として忍び込んだり、居酒屋でくつろぐ中間らに近づいて、聞き込みをしていたのである。
すると、滝川と藤倉の家老富樫和将が、何度も船宿や料亭などで会っていたことが

分かった。だが、どういう話が交わされていたかは明瞭ではない。

「しかし……そのふたりが会っていたのが分かっただけでも、大きな収穫だ」

逸馬が真琴の手を握り締めて感謝の言葉を伝えると、なぜか八助も真琴のもう一方の手を握り締めて、

「乗りかかった船だ。この際、俺も手を貸すが、恐い目だけは嫌だぞ」

と言った。

八助とて御役御免には納得できない。自分なりに仇討ちをしたい思いが強かった。しかし、若年寄の越後守ですら意見を封じられたのである。後ろには水野がいることだけは確かなようだが、そこまで作事下奉行のような軽い役職の者を庇うとは、よほど甘い汁を吸っているのであろうと、逸馬は思った。

「こちらから仕掛けねば、決して敵は動くまい」

逸馬は膝を乗り出して、

「家老の富樫を揺さぶったつもりだが、危ういと察したのか、決して動かなかった。あるいは、上から下手に動くのを止められていたのやもしれぬ」

「ああ、そうだな……」

信三郎は何となく気のない返事をした。だが、逸馬たちは気にする様子もなく、ど

うやって敵に〝斬り込む〟かということを考えていた。

当面の敵は、滝川と富樫である。このふたりを押さえて、評定所に引きずり出すことができれば、遠山奉行が追いつめられるのではないかと踏んだ。しかし、肝心の証拠が不十分だ。先に筒井を捕らえて、吐かせておけば、少なくとも藤倉襲撃については、クロと言えたはずだ。

「こうなりゃ、俺が踏み込んでみるか」

いきり立ったように逸馬が言うと、真琴が止めた。

「よしなさい」

「まだ何も言ってないじゃないか」

「逸馬様が考えていることくらい、大体、分かります」

「なんだよ」

「滝川様に直にあって、ありもしない証拠を摑んだと捲し立て、相手に語らせるつもりでしょう。でも、それは無理というものですよ」

「なぜだ」

「あなたが思っているほど、滝川様は口が軽くないからです。いえ、重いと言った方がいいでしょうねえ」

「どうして、そんなことが真琴に……」
「言ったでしょ？　女中として紛れ込んだって。あの人は絶対に余計なことを喋らない。普段から無口で、私も声を聞かなかった」
「そうなのか？」
「だから、賂にしても、寄越せとは決して言わない。頼みましたぞ、の一言で済ませる。でも、自分が思ったほどのお金が入って来ないときには、二度とその普請請負問屋には声をかけない。だから、滝川様の顔色を兢々と窺っているのですよ」
「だったら尚更だ」
逸馬は半ば躍起になって、真琴に対決でも挑むように答えた。
「こちとら、吟味方与力だ。相手の出方次第で、鬼にでも仏にでもならあな」
「でも、そこで終いになっちゃ困る」
と八助が口を挟んだ。
「俺の役職を返して貰わなきゃな」
「おまえはてめえのことしか考えてねえのか、パチ助。どうせ番方なんぞ向かねえと、自分で言ってたではないか」
「気が変わったんだよ」

「信三郎の身になってみろ。こいつは親父の恩人をだな……」
窓辺にもたれている信三郎に、逸馬が目を移したとき、
「いいんだよ、俺のことは……」
「どうした。元気がないじゃないか……ま、あるわけがねえか」
「そうじゃない。もう、これ以上、みんなに迷惑をかけるわけにはいくまい」
「また水臭いことを」
「逸馬……色々と考えたのだが、俺は真相を暴くことよりも、芳枝を守ることに力を注ぎたいんだ」
「芳枝を守ること……」
逸馬が言葉を呑み込んで見つめ返すと、八助がまた口を挟んだ。
「あ、信三郎。おまえ、やっぱりその女に惚れたな。そりゃ、惚れるだろうな。夜毎、訪ねて来られりゃ、おまえのことだ。手を出さない訳がない」
「……」
「だから、芳枝なんて、呼び捨てにしたりして」
「パチ助。おまえがどう思おうと勝手だが、やはり俺は滝川や富樫を吊し上げるよりも、芳枝の身が大事だ」

「どうしたいのだ？」
「俺が……俺が芳枝のところに婿入りする」
驚きを隠せなかったのは逸馬だけではない。八助と真琴、そして、傍らで聞いていた佐和も動揺した。
「そんなことしたら、信三郎。武田家を守り続けてきたあの母上が許すまい」
すぐさま八助が首を横に振った。
「バカ、本当にじゃねえよ」
「え？」
「実は、芳枝は生きていて、俺が婿入りすれば、もう藤倉を乗っ取ろうとしている奴は諦めるだろう」
「さあ、それはどうかな」
と逸馬は不安げに口元を歪めた。
「今度はおまえを狙ってくるやもしれぬ。いや、どうせ芳枝さんは死んだことになっているのだ。この際、早手回しに芳枝さんを消して、滝川は強引に、病に倒れている藤倉との養子縁組を企むかもしれねえ」
「……」

「筒井安兵衛や紋蔵を情け容赦なく殺す奴らが相手だ。甘っちょろいやり方じゃ、返り討ちに遭うのがオチだ」
「いや。そうじゃない……俺は……あ、いや、なんでもねえ」
曖昧な言い方しかできない信三郎を見て、
――また気を遣わせないように、自分ひとりで解決しようとしている。
と逸馬は思った。だが、そんなことをすれば、それこそ水野や鳥居の思う壺だ。それに、吟味方とすれば、殺しの下手人を挙げて、獄門や磔にしなければ気が済まない。
「しかしな、逸馬……滝川だの富樫だのを評定所で裁いたところで、その裏にいる奴らは絶対にのさばったままなのだ」
「だからって、放ってはおけぬ。手を下した奴もまた、黒幕と同じく悪いのだ」
「そうか……分かった。ならば、表に引きずり出すことは、おまえに任せる」
「信三郎は……」
「繰り返すが、芳枝を守るだけだ」
「守るだけ？」
今度は真琴が声をかけた。

「だったら、私に任せてくれなかしら。悪いようにはしない」
「勝算があるのか？」
「公事師というのは、負け戦はしないものなんです」
そう断言してニコリと笑ったが、佐和だけは内心を見抜いたように、険しい顔をしていた。そして、無茶はいけませんよときつく言った。だが、真琴はやはり微笑んだまま、
「はい。決して」
と答えただけであった。

八

数日後——久留米藩邸から出て来た頭巾をかぶった芳枝は、供の者もつけずに、ぶらぶらと歩いていた。
そして、いつもと同じように信三郎の屋敷の前に止まると、
「信三郎様……信三郎様……」
と声をかけた。

だが、表門が開くことはなかった。見上げると、門柱には梵語の護摩札が貼られてあり、辻灯籠と三日月の光に著しく見える。

返事がないので、元来た道へ戻ろうとしたとき、黒い着流しの朱雀が現れた。

「！　……」

その後ろからは、谷津重兵衛が泰然と現れた。

「死んで貰うよ、芳枝さんとやら」

「……」

「のこのこと信三郎に会いに来たのが運の尽きというところか。久留米の殿様に匿われていれば死なずに済んだものを」

芳枝が緊張で後ずさりした路地からは、富樫の姿が浮かんだ。

「さよう……芳枝様。あの折、お父上が倒れたとき、素直に滝川様を婿に迎えていれば、それで事は万事うまく収まっていたのだ。私も余計に心を煩わさずに済んだ」

「……」

「死んだ、などと、私を欺いたのは、父上の仇討ちをするためですか……なるほど、幼い頃から、頭のよかった芳枝様だけのことはある」

「……」

「ですが、お父上も余計なことに首を突っ込まなければよかったのです」
「つまり、大目付を殺して、公金着服の件を闇に葬り、ついでに藤倉家も乗っ取る。一石二鳥を狙ったわけですね」
芳枝が言い返すと、富樫はまさに幽霊でも見るように後ずさりした。そして、訝しげに目を細めると、
「誰だ……？」
頭巾を取ると、それは真琴であった。
「!?　――」
富樫はまずいという思いが、一瞬にして頭の中をぐるりと巡ったのであろう。谷津と朱雀に向かって、
「始末は頼んだぞ。よいな」
と言って、路地へ駆け込んで逃げた。
「聞いちゃったわよ。ねえ、谷津の旦那……もう逃げられないと思うけど」
「……」
「北町与力の藤堂逸馬様が、その辺りにいるわよ。大勢の捕方を引き連れてね」
「黙れ、女」

「あら。あなたとは、色々とお白洲でもお会いしたことがあるでしょう。お忘れになったのですか？　それとも谷津重兵衛とは別人を装っているのですか」

谷津は無言のまま刀の鯉口を切った。同時、朱雀も忍び刀を抜き払って、身構えた。

思わず真琴は背中を向けて逃げ出した。多少の柔術や小太刀の心得はあるが、殺しを生業としているような輩とまともにやって勝てるわけがなかった。

一心不乱に逃げた。だが、追ってくる気配はなかった。

――これも罠だ。

と気取ったからであろう。だが、真琴はひたすら逃げた。止まると背中からバッサリとやられる。そう思ったからだ。

二町あまり駆けたであろうか。まだ灯りのついている自身番の前で立ち止まった。声をかけて戸を引き開けると、顔見知りの番人がふたり、うたた寝をしていた。

「公事宿『叶屋』の真琴です。しばらく、匿って下さいね」

と言うなり、土間の片隅にある甕から、柄杓で水を飲んだ。

ほっと息をついてから、今頃は、逸馬が谷津を斬るか捕縛するかしているだろう。そう思って、もう一度、溜息をついたとき、

「残念だったな」

と背中から声がかかった。振り返った真琴は凝然となった。そこには、さっきいた番人ではなく、見知らぬ男がふたり、刃物を摑んで立っていた。白虎と青竜だが、真琴は知らないことだった。

「だ、誰……？」

「これが運の尽きだ……諦めな、女公事師さんよ。おまえがあれこれ嗅ぎ廻っていたのは、こっちも承知していたのだ」

ヒッと悲鳴を上げて、表戸を蹴破るような勢いで飛び出ようとした真琴が、敷居につまずいて転んでしまった。ひらり黒い影が飛来して、上から覆い被さった。

「ああッ――!?」

だが、それは本当にただ布が覆い被さっただけで、投網のように真琴は包まれて、表通りまで引きずり出された。ほんの一瞬のことで、真琴は訳が分からなかった。

自身番から飛び出て来た白虎と青竜は、屋根の上から飛来した十方手裏剣の音に気づき、素早く飛びすさった。

手裏剣を投げ終えて、鎖鎌を構えているのは、茜だった。

「白虎、青竜……あなたたちは、まだ鳥居様の言いなりになっている」

「裏切り者めが！」

問答無用で斬りかかってくるのを、茜は必死にかわしながら、さらに手裏剣を打った。相手が怯む隙に、鎖鎌を投げ、白虎の足に絡めた。同時、ぐいっと引き寄せると、白虎が地面に背中から倒れた。うっと噎せているところへ、手裏剣を数本、打ち込んだ。

――うぐッ！

喉に命中した。目をカッと見開いたまま、絶命した。

忍び刀を握ったまま、青竜を振り返った茜は、まったく別人のように獣の目になっている。だが、青竜は怖じ気づく様子もなく、淡々と刀を構えて、無言のまま斬りかかった。

茜は切っ先の動きを見極めながら、一寸の差でよけていたが、ガッと肩に衝撃をくらった。痛みはないが、左腕がだらんとなって力が入らない。筋を切られたようだ。

「青竜。目を覚ませ」

「死ね」

無表情のままで青竜は竜巻のような勢いで、茜の頭上を飛び越え、背後に着地するなり、バッサリと背中を斬った。かに見えたが、するりと脱皮した虫のように、茜は

闇の中にひらりと飛んで、目潰しを投げつけた。
しかし、すぐには刀を握れない。
――相打ちでいい。
そのつもりで、青竜の胸に飛び込み、短刀をドスッと打ち込んだ。
ほとんど同時に、茜は青竜に首根っこをかっ切られたようだが、傷は浅かった。皮が薄く削がれたくらいであった。
青竜は茜に倒れ込むように、しがみついて放そうとしなかった。そして、茜の耳に囁りつくように歯を立てて、
「鳥居様は甘いな……おまえを生かしてたがために……うぐッ」
血反吐を吐いて、その場に崩れた。
黒い布がガサゴソと動いた。乱れ髪を振るように這い出てきた真琴は、目の前の凄惨な光景を見て、声が出なかった。
ふたりの亡骸はまだ蠢いているように見えた。
「だ、誰が……!?」
辺りを見廻したが、誰もいなかった。
ゆっくりと立ち上がり、ぼんやりと辻行灯に浮かぶ町通りを、何度も何度も見廻し

た。一陣の風が土埃を巻き上げて、真琴の全身をぐるりと包むように廻ると、闇の空に吹き上がった。ただ、

「逸馬様とお幸せに……」

という声が聞こえた気がした。

その日を境に、茜はぷっつりと姿を消した。まるで飼い猫が、ふいに逃げたかのように、あまりにも突然にいなくなった。

九

翌日、辰之口評定所に、滝川政則と富樫和将が呼び出され、担当の老中、若年寄も見守る中、藤倉頼母襲撃の件につき、詮議がされていた。

最初の詮議ということで、町奉行、勘定奉行、寺社奉行の三掛かりであった。もっとも、大目付、目付も臨席はしている。

町奉行の遠山が議事を進めていた。

滝川も富樫も緊張の顔はしているものの、そのふてぶてしい態度は誰が見ても、一目瞭然であった。

「もう一度、繰り返すが、大目付藤倉様を襲撃したことに関わりはない。ご両人とも、そう申すのですな」

遠山が念を押すと、滝川が答えた。

「何故、私にそのような嫌疑が及んだか、さっぱり分かりませぬ」

「さようか。では、何も関わりないと」

「ですから、身共が藤倉様を襲う理由など、ありはしませぬ」

「では、筒井安兵衛を殺したことは、どうだ。書院番組頭の筒井だ」

「あれは切腹ではないので？」

「不自然な点が多いのでな、幕閣一同の許しを得て、この私自身が調べてみた」

「何か、ご不審でも？」

「うむ。大ありだった。切腹の作法は腹の左から右……といえども、咄嗟の折は利き腕でやるもの。筒井は左利きゆえな、右腹から刺すのが自然。それが逆だった」

「ならば、作法通りになさったのでしょう」

「いや。脇差を握っていたのは、左手で、しかも刃が切った方向と反対を向いていた。つまり、誰かが切腹に見せかけたが、間違って持たせたのであろうな。城中ゆえ、よほど慌てたのであろう」

「だとして、何故、私のせいだと？」
「せいだとは言っていない」
遠山は穏やかな目で、じっと見据えて、意味ありげにほくそ笑んだ。滝川は一瞬、瞳が揺らいだが、素知らぬ顔をしていた。しばらく、遠山は見据えていたが、富樫の方へ視線を移して、
「では、富樫殿に尋ねる」
「なんなりと」
「昨夜、藤倉様の御息女、芳枝様を襲った……とあるが、さよう相違ないか？」
「はて、覚えがありませぬ」
「襲われた当人が、そう証言しておるが」
「これは異な事を。芳枝様は二月（ふたつき）前に、殿が賊に襲われた折、死んでおります。尼寺で葬儀も行ったこと、遠山様もご存知なのではありませぬか？」
「ああ、耳にしている。私が聞いているのは、その芳枝様を襲ったであろう、ということだ。証人なら、おるぞ」
遠山が目配せをすると、評定所の下役人が控えの間から、真琴を連れてきた。
「この人を襲ったこと。間違いなかろう」

「あはは……何を言うのかと思えば……この女は芳枝様ではございませぬ」
「だから？」
「遠山様は、私が芳枝様を襲ったと申したから、違うと申したのです」
「では、この女を襲ったのだな」
「……その女も知りませぬ」
「篤と見よ。おまえと谷津が襲った女だ」
「知りませぬ」
語気を強めて言い放つ富樫に、遠山は静かに、
「では、この女はどうじゃ……？」
もう一度、控えの間に目配せをすると、今度は、信三郎が芳枝を連れてきた。富樫は思わず目を逸らし、唇を噛んだ。
「どうだ、富樫殿。では、おまえが襲ったのは、こちらの美女か？」
「違います。知りませぬ」
「知らぬ……これは、面妖な……己が主人の娘の顔を忘れたか」
「あ、いえ……似ているなとは思いましたが、死んでいるものと」
「実は生きておった。嬉しくないのか？」

遠山はさらにせっつくように聞いたが、富樫は頬を引き攣らせるものの、相変わらず知らぬ存ぜぬを押し通した。

「富樫……」

と芳枝は富樫の前に立って、毅然と見下ろした。

「おまえは、昨夜私を襲った。それは、そこにおる浪人者が証言したぞ」

見やると、中庭に縄で縛った谷津を、逸馬が引っぱって来た。それを指しながら、遠山自身が続けた。

「おまえは逃げたが、こやつはうちの藤堂が捕らえた。おまえに命じられて、この芳枝様を襲ったと喋ったぞ」

「知りませぬ。そんな男、見たこともありませぬ」

「だが、この男は、おまえに頼まれて、筒井とともに藤倉様を襲ったと吐いた。理由は、滝川が藤倉家の養子となって、御家を乗っ取るためだ」

「何をバカな。よくも出鱈目を言えるな」

富樫は少し昂ぶった声で、

「お奉行、かような谷津の言うことなぞ、信じるに足りませぬ」

「……」

「私は知りませぬ」
「――富樫。俺はひとことも、谷津の名なんぞ言ってねえぜ」
わずかばかり伝法な言い方になった遠山は、さらに声を強めて、
「どうして、知ってるのだ、富樫」
「！　……」
「こやつが誰の手下かも承知しているのであろう？　すべてを話せば命だけは助けてやろう。どうだ……命令したのは、誰だ？　この評定所にいるのではないか？　本当に藤倉家を乗っ取らんとしたのは、何処の誰兵衛だ」
「……」
「不正の帳簿も一部は、芳枝さんが持っていたのだぞ。おまえだけでも、助けてやりたいんだ。さあ、正直に言いな」
富樫は目を閉じて、わなわなと震えはじめたが、
「もはや、これまで！」
と富樫が脇差を抜いて、自らの腹を刺そうとした。それを素早く、逸馬が駆け寄って、止めた。ぐいっと腕をねじ上げて、脇差を奪い取ると、その場に打ちつけた。
「どうだ、富樫。言って、楽にならないか」

「ほ、本当に……私は知らないのです……たしかに滝川様には殺しを頼まれました……大金を積まれて……その後も、家老でいるつもりでした。ですが……黒幕がまだいるのかどうか、そこまでは私は知りません……」

「……」

「滝川様が公金を着服したのを、うちの殿が暴こうとしたとき、私は……私は女房子供を殺すと脅されて仕方なく……」

そう言いながら、ひれ伏した富樫を眺めていた若年寄の本間越後守がずいと出て、

「もうよかろう、遠山……富樫はすべてを白状したのだ。後は、罪科を評議したら如何かな。のう、ご一同」

水野と鳥居の名はあくまでも出させないつもりか。遠山は改めて、吟味すると断じて、この場は収めることにした。

だが、滝川の悪事はすべて白日の下に晒され、切腹の上、御家断絶となった。もちろん、今度は、谷津とても、鳥居が助けることはできなかった。

その夜――。

芳枝が改めて、武田家を訪ねて来た。

玄関に出た香澄は、卒倒しそうだったが、必死に我慢した。傍らに、信三郎も一緒だったからである。

「お母様に、お願いがございます」

静かに芳枝は言った。

「たった今、水天宮から良縁の話を戴いてきました」

「す、水天宮……まさか、お腹にやや子でも……いやですよ、幽霊の子なんて」

「違います。まだ信三郎様の子は、ここにはおりませぬ」

「まだって、あなた……お願いって、まさか、うちの信三郎を……」

「はい。私の……藤倉家の養子になって下さいませぬか」

「ふ、藤倉家の!?」

「私……毎晩、通って、お話を聞いて貰っているうちに、信三郎様のことが、心から好きになってしまいました」

「俺もなのだ、母上」

信三郎も横合いから声をかけた。

「な、なりませぬ……なりませぬ。そりゃ、藤倉様といえば八千石の旗本。うちは微禄の御家人です。あまりにも釣り合いが取れませぬ。だめです、だめです」

「おふくろ……仙人もいつも言っているじゃないか。人に上も下もない。生まれながらにして、等しく大切なんだって。だから……」
「なりませぬッ。あなたは武田家の大切な跡取り。武田の家を潰すなんてこと、絶対に私は認めませんからね」
「そう言うだろうと思った」
「男なら、キッパリと諦めなさい。あなたには武田家に相応しい嫁を、色々と探しております。だから、自分の口からお断りなさい」
「……ということだ、姫」
と信三郎は意外にもあっさりと、芳枝に事情を分かってくれと話した。
「あなただって、八千石の藤倉家を捨てて、この貧乏御家人の嫁に来るなんてことはできないだろう？」
「さあ、どうでしょう」
エッと驚いて顔を見合わせた信三郎と香澄は、冗談はやめてくれとばかりに、同じ仕草で手を振った。〝似たもの親子〟である。
「では、信三郎様……私はあなたとの一夜きりの思い出を胸に秘めて、一生、過ごしとうございます。女はそれで、幸せなのでございます」

「お、おい……」

信三郎は戸惑ったが、芳枝は満足そうに微笑み返すと、深々と礼をして、ゆっくりと宵闇の向こうへと立ち去った。

「一夜きりの思い出を胸に秘めて……か。なかなか言えることではないな」

門の脇から、逸馬が見送っていた。

「なんだ、おまえも来てたのか」

「心配でな。しかし、結局、おまえ、八助が言ったとおりだったのではないか」

「黙れ……」

照れくさそうに逸馬を押しやったところへ、香澄が出てきて、またあらぬ方へ深々と頭を下げた。

「どこに、おじぎをしてるんだ、おふくろ」

信三郎が言うと、香澄は何度もおじぎをしながら、

「あなたもしなさい。お供の女中さんが、あんなに頭を下げているのに」

と言った。信三郎は不思議そうに首を傾げて、

「見えるか、逸馬」

「いいや」

「てことは……」

「もしかして、芳枝さんを守ってるのかもな、殺された女中ってのが……いや、芳枝さん自身も本当は……」

わあっと大袈裟に声を上げて逸馬が駆け出すと、信三郎も思わず追うように訳もなく走り出した。

行く手には星空が広がっている。

翌朝は、日本晴れになった。なのに、雪が舞っていた。風花だ。

それが曇って、三日三晩も降り積もり、再び風花の舞となって、雪が溶けた頃、信三郎も、そして逸馬も、すっかり幽霊のことは忘れていた。

本書は書下ろし作品です。

著者｜井川香四郎　1957年愛媛県生まれ。主な作品に、「梟与力吟味帳」シリーズ（講談社文庫）のほか、「暴れ旗本八代目」（徳間書店）、「刀剣目利き神楽坂咲花堂」（祥伝社）、「船手奉行うたかた日記」（幻冬舎）、「金四郎はぐれ行状記」（双葉社）、「くらがり同心裁許帳」（ベストセラーズ）、「おっとり聖四郎事件控」（廣済堂）、「ふろしき同心御用帳」（学習研究社）などのシリーズがある。

紅の露　梟与力吟味帳
井川香四郎
© Koshiro Ikawa 2009

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2009年11月13日第1刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話　出版部　(03) 5395-3510
　　販売部　(03) 5395-5817
　　業務部　(03) 5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社プリプレス管理部
印刷———豊国印刷株式会社
製本———株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

ISBN978-4-06-276503-9

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫刊行の辞

二十一世紀の到来を目睫に望みながら、われわれはいま、人類史上かつて例を見ない巨大な転換期をむかえようとしている。

世界も、日本も、激動の予兆に対する期待とおののきを内に蔵して、未知の時代に歩み入ろうとしている。このときにあたり、創業の人野間清治の「ナショナル・エデュケイター」への志を現代に甦らせようと意図して、われわれはここに古今の文芸作品はいうまでもなく、ひろく人文・社会・自然の諸科学から東西の名著を網羅する、新しい綜合文庫の発刊を決意した。

激動の転換期はまた断絶の時代である。われわれは戦後二十五年間の出版文化のありかたへの深い反省をこめて、この断絶の時代にあえて人間的な持続を求めようとする。いたずらに浮薄な商業主義のあだ花を追い求めることなく、長期にわたって良書に生命をあたえようとつとめるところにしか、今後の出版文化の真の繁栄はあり得ないと信じるからである。

同時にわれわれはこの綜合文庫の刊行を通じて、人文・社会・自然の諸科学が、結局人間の学にほかならないことを立証しようと願っている。かつて知識とは、「汝自身を知る」ことにつきていた。現代社会の瑣末な情報の氾濫のなかから、力強い知識の源泉を掘り起し、技術文明のただなかに、生きた人間の姿を復活させること。それこそわれわれの切なる希求である。

われわれは権威に盲従せず、俗流に媚びることなく、渾然一体となって日本の「草の根」をかたちづくる若く新しい世代の人々に、心をこめてこの新しい綜合文庫をおくり届けたい。それは知識の泉であるとともに感受性のふるさとであり、もっとも有機的に組織され、社会に開かれた万人のための大学をめざしている。大方の支援と協力を衷心より切望してやまない。

一九七一年七月

野間省一

平岩弓枝
はやぶさ新八御用旅(四)
〈北前船の事件〉

川上弘美
ハヅキさんのこと

井川香四郎
紅の露
〈くれない〉
〈梟与力吟味帳〉

高田崇史
QED～ventus～御霊将門

綾辻行人
迷路館の殺人
〈新装改訂版〉

森村誠一
ガラスの密室

川上未映子
そら頭はでかいです、世界がすこんと入ります

鯨統一郎
タイムスリップ水戸黄門

高橋克彦
高橋克彦自選短編集
〈1 ミステリー編〉

高野秀行
西南シルクロードは密林に消える

飯田譲治
NIGHT HEAD 誘発者

梨屋アリエ
プラネタリウム

デイヴィッド・ハンドラー
北沢あかね 訳
ダーク・サンライズ

谷中で変死体。何やら過去の事件に関係が。探る新八だったが女中のお鯉がさらわれて!?

さりげない日常、男と女の心のふれあいやすれ違い。著者独自の声が心をかすめる掌編集。

辻斬り事件の探索で、逸馬は倉賀野宿を訪れる。NHK土曜時代劇原作。〈文庫書下ろし〉

「神田明神」「将門首塚」「成田山」……「繋馬」の家紋が示す、日本三大怨霊、平将門の真実。

4人の作家が推理小説の競作を始めた奇想の館。密室と化した迷宮で連続殺人劇の幕が開く!

隣室の女性の絞殺死体を発見した青年が容疑者に。無実を信じる妹、棟居刑事が真相を追う。

文学に衝撃を与えた著者は何をがむしゃらに見つめ考え感じてきたのか。デビュー随筆集。

現代にやって来た黄門さまが、工場爆破を企むテロリスト集団を相手に、胸のすく活躍を。

「陰の歌麿」など初期の傑作、単行本未収録の「風俗史の問題」を収録した極上短編集。

最古のシルクロードに挑んだ、困難で絶体絶命で、しかも滑稽な旅を描くノンフィクション。

大地震を予知した兄と弟は、惨劇を阻むべく立ち上がった。感動のミスティック・ノベル。

中学3年生の多彩な自意識を、世田谷と少し異なる〝世界谷〟を舞台に描いた4つの物語。

不穏な色彩を帯びる朝焼けは、凄惨な事件の幕開けだった。バーガー・シリーズ最新作!

森博嗣 イプシロン ε に誓って 〈SWEARING ON SOLEMN ε〉
神崎京介 女薫の旅 奥に裏に
群ようこ 馬琴の嫁
睦月影郎 変わり萌え
杉田望 不正会計
内館牧子 食べるの好き 飲むのも好き 聖子ちゃん
日本推理作家協会 曲げられた真相 〈ミステリー傑作選〉
柏木圭一郎 京都紅葉寺の殺人
池永陽 雲を斬る
小嵐九八郎 真幸くあらば
間庭典子 走れば人生見えてくる
出久根達郎 逢わばや見ばや 完結編
今野敏 特殊防諜班 諜報潜入

ジャックされた高速バスに山吹と加部谷が！乗客名簿にあった「ε」という謎の団体とは？山神大地の成長を女性との触れ合いから描く青春官能大ヒット小説。ついに200万部突破！

人気戯作者の家に嫁し、後に「八犬伝」の代筆を務めた女性の一代記。著者初の時代小説。

寄せ場で働く十馬の境遇は、顔形を変える力のため、急変する。〈書下ろし時代官能小説〉

老舗メーカーに浮上した粉飾決算疑惑。監査をした会計士にも粉飾幇助の嫌疑がかかる。

「できあい」総菜も食器と盛りつけの演出で立派な料理に変身。写真と文で綴る食卓術。

道尾秀介、連城三紀彦、平山夢明、古川日出男、石持浅海ら7名によるミステリー競演集。

紅葉の東山で、京都再生会議座長が殺される。名探偵星井裕シリーズ最新刊。〈文庫書下ろし〉

仇持ちなのに賞金首となった三四郎が、襲い来る刺客に秘剣〝氷柱折り〟で立ち向かう。

死刑囚の青年と被害者の婚約者が禁断の恋におちた。二人をつなぐ秘密通信。奇蹟の純愛。

走って人生変わった男女14人のルポルタージュ。プームの理由はここにある。〈文庫書下ろし〉

昭和四八年、高円寺にて独立。古本屋は天職であると信じていた。長編自伝小説、完結。

芳賀一族ゆかりの教団を短期間に掌握した二代目夢妙斎。その目的とは何か？真田は潜入する。

小島信夫

美濃

解説＝保坂和志　年譜＝柿谷浩一

こA7

978-4-06-290066-9

故郷・美濃の風景世界の中に登場する著者と友人たちの分身。ルーツを探りながら、客観的に自己と他者との関係を見つめる、虚実を超えた新しい手法による長篇小説。

谷川雁

原点が存在する

谷川雁詩文集

編・解説＝松原新一　年譜＝坂口博

たAG1

978-4-06-290067-6

五〇年代に彗星のように現れ、「東京へゆくな」「自我処刑」等の〝暗喩の詩人〟として、また民衆運動のカリスマ的指導者として活動。強い磁力をもつ詩と先駆的評論四〇篇。

山城むつみ

文学のプログラム

年譜＝著者

やN1

978-4-06-290068-3

小林秀雄、坂口安吾、保田與重郎の戦時下の著述を丹念に辿り、日本文を成立せしめる「訓読」というプログラムの分析へ到る。気鋭による〈日本イデオロギー〉批判。

家田荘子　渋谷チルドレン
池宮彰一郎　高杉晋作（上）（下）
池宮彰一郎他　異色忠臣蔵大傑作集
井上祐美子　公主帰還
飯島　勲　妃殺し屋（中国三色奇譚）
池井戸　潤　不祥事
池井戸　潤　空飛ぶタイヤ（上）（下）
岩瀬達哉　新聞が面白くない理由
岩瀬達哉　完全版　年金大崩壊
乾くるみ　塔の断章
乾くるみ　匣の中
岩城宏之　森の宴（本直純との芸大青春記）
池井戸　潤　BT'63（上）（下）
池井戸　潤　架空通貨
池井戸　潤　銀行狐
池井戸　潤　銀行総務特命
池井戸　潤　仇敵
池井戸　潤　果つる底なき
石月正広　渡世人
石月正広　笑花魁（紋重郎始末記）
石月正広　握られ同心（結わえ師・紋重郎始末記）
石月正広　糸のさだめ（結わえ師・紋重郎始末記）
糸井重里　ほぼ日刊イトイ新聞の本
岩井志麻子　東京のオカヤマ人
岩井志麻子　私小説
乾　荘次郎　妻敵討ち（鴉道場日月抄）
乾　荘次郎　夜襲（鴉道場日月抄）
乾　荘次郎　介錯（鴉道場日月抄）
石田衣良　LAST「ラスト」
石田衣良　東京DOLL
石田衣良　てのひらの迷路
石田衣良　40（フォーティ）翼ふたたび
井上荒野　ひどい感じ―父・井上光晴
飯田譲治　NIGHT HEAD 1-5
飯田譲治　NIGHT THE HEAD DEEP FOREST
飯田譲治　アナン、（上）（下）
飯田譲治　Gift
飯田譲治　この愛は石より重いか
飯田譲治　盗作（上）（下）
稲葉　稔　武者とゆく
稲葉　稔　闇夜の義賊
稲葉　稔　真夏の凶刃（一）
稲葉　稔　月夜の始末（二）
稲葉　稔　陽月の契り（三）
稲葉　稔　武士の約定（四）
井村仁美　アナリストの淫らな生活
池内ひろ美　リストラ離婚（ベンチマーク）
池内ひろ美　妻が・夫を・捨てたわけ
池内ひろ美　読むだけで「いい夫婦」になる本
いしいしんじ　プラネタリウムのふたご
伊藤たかみ　アンダー・マイ・サム
池永　陽　指を切る女
井川香四郎　冬の蝶（梟与力吟味帳）
井川香四郎　日照り草（梟与力吟味帳）
井川香四郎　忍び冬（梟与力吟味帳）
井川香四郎　花詞（梟与力吟味帳）
井川香四郎　雪の花火（梟与力吟味帳）

講談社文庫　目録

井川香四郎　鬼雨
井川香四郎　科戸の風〈梟与力吟味帳〉
伊坂幸太郎　チルドレン〈梟与力吟味帳〉
伊坂幸太郎　魔王
岩井三四二　逆ろうて候
岩井三四二　戦国連歌師
岩井三四二　銀閣建立
岩井三四二　竹千代を盗め
絲山秋子　逃亡くそたわけ
絲山秋子　袋小路の男
絲山秋子　絲的メイソウ
石黒　耀　死都日本
石井睦美　レモン・ドロップス
犬飼六岐　筋違い半介
石川大我　ボクの彼氏はどこにいる？
内田康夫　死者の木霊
内田康夫　シーラカンス殺人事件
内田康夫　パソコン探偵の名推理
内田康夫　「横山大観」殺人事件
内田康夫　漂泊の楽人
内田康夫　江田島殺人事件
内田康夫　琵琶湖周航殺人歌
内田康夫　夏泊殺人岬
内田康夫　平城山を越えた女
内田康夫　「信濃の国」殺人事件
内田康夫　鐘
内田康夫　風葬の城
内田康夫　透明な遺書
内田康夫　鞆の浦殺人事件
内田康夫　箱庭
内田康夫　終幕のない殺人
内田康夫　御堂筋殺人事件
内田康夫　記憶の中の殺人
内田康夫　北国街道殺人事件
内田康夫　蜃気楼
内田康夫　「紅藍の女」殺人事件
内田康夫　「紫の女」殺人事件
内田康夫　藍色回廊殺人事件
内田康夫　明日香の皇子
内田康夫　伊香保殺人事件
内田康夫　不知火海
内田康夫　華の下にて
内田康夫　博多殺人事件
内田康夫　中央構造帯(上)(下)
内田康夫　黄金の石橋
内田康夫　金沢殺人事件
内田康夫　朝日殺人事件
内田康夫　湯布院殺人事件
歌野晶午　ROMMY〈越境者の夢〉
歌野晶午　正月十一日、鏡殺し
歌野晶午　死体を買う男
歌野晶午　放浪探偵と七つの殺人
歌野晶午　安達ヶ原の鬼密室
歌野晶午　新装版　長い家の殺人
歌野晶午　新装版　白い家の殺人
歌野晶午　新装版　動く家の殺人
内館牧子　リトルボーイ・リトルガール

内館牧子　切ないOLに捧ぐ
内館牧子　あなたが好きだった
内館牧子　ハートが砕けた！
内館牧子　BU・SU〈すべてのブリティ・ウーマンへ〉
内館牧子　別れてよかった
内館牧子　愛しすぎなくてよかった
内館牧子　あなたはオヤサンと呼ばれてる
内館牧子　養老院より大学院
内館牧子　愛し続けるのは無理である。
宇都宮直子　人間らしい死を迎えるために
薄井ゆうじ　竜宮の乙姫の元結の切りはし
薄井ゆうじ　くじらの降る森
宇江佐真理　泣き銀次
宇江佐真理　室の梅〈おろく医者覚え帖〉
宇江佐真理　涙〈琴女癸酉日記〉（ことにょきゆうどう）堂
宇江佐真理　あやめ横丁の人々
宇江佐真理　卵のふわふわ〈八丁堀喰い物草紙・江戸前でもなし〉
宇江佐真理　アラミスと呼ばれた女
上野哲也　ニライカナイの空で
魚住　昭　渡邉恒雄　メディアと権力
魚住　昭　野中広務　差別と権力
氏家幹人　江戸老人旗本夜話
氏家幹人　江戸の性談〈男たちの秘密〉
内田春菊　愛だからいいのよ
内田春菊　ほんとに建つのかな
魚住直子　非・バランス
魚住直子　超・ハーモニー
魚住直子　未・フレンズ
植松晃士　おブスの言い訳
内田也哉子　ペーパームービー
上田秀人　密封〈奥右筆秘帳〉
上田秀人　国禁〈奥右筆秘帳〉
上田秀人　侵蝕〈奥右筆秘帳〉
上田秀人　継承〈奥右筆秘帳〉
内田　樹　下流志向〈学ばない子どもたち　働かない若者たち〉
上橋菜穂子　獣の奏者〈Ⅰ闘蛇編　Ⅱ王獣編〉
遠藤周作　海と毒薬
遠藤周作　わたしが・棄てた・女
遠藤周作　ぐうたら人間学
遠藤周作　聖書のなかの女性たち
遠藤周作　さらば、夏の光よ
遠藤周作　最後の殉教者
遠藤周作　反逆（上）（下）
遠藤周作　ひとりを愛し続ける本
遠藤周作　深い河（ディープ・リバー）
遠藤周作　周作塾〈読んでもタメにならないエッセイ〉
遠藤周作　『深い河』創作日記
江波戸哲夫　小説盛田昭夫学校（上）（下）
衿野未矢　依存症の女たち
衿野未矢　依存症の男と女たち
衿野未矢　依存症がとまらない
衿野未矢　「男運の悪い」女たち〈男運を上げる15歳ヨリウエ男〉
衿野未矢　恋は強気な方が勝つ！〈悩める女の厄落とし〉
江上　剛　頭取無惨
江上　剛　不当買収
江上　剛　小説金融庁

ISBN978-4-06-276503-9

C0193 ¥571E（0）

江戸中を震撼させた連続辻斬り事件の探索で、中山道倉賀野宿へと出張った逸馬は、『阿弥陀湯』の三助巳代吉に疑いを抱く。あえて大火傷を負い顔を変えて逃げ続けた巳代吉は、真犯人の顔を見たと訴え出る。一方で信三郎と真琴は、事件の背後にある八州廻り畠山と両替商絡みの不正をつかむ。〈文庫書下ろし〉

9784062765039

1920193005714

紅の露
兼与力吟味帳
井川香四郎

定価：本体571円（税別）

い
110
8